

松本市文化財調査報告 No.99

NITANDA

松本市二反田遺跡

OKADAMACHI

松本市岡田町遺跡

——緊急発掘調査報告書——

(本文編)

1993・3

松本市教育委員会

NITANDA

松本市二反田遺跡

OKADAMACHI

松本市岡田町遺跡

——緊急発掘調査報告書——

(本文編)

1993・3

松本市教育委員会

序

松本市の北部に位置する岡田地区は、開発に伴う発掘調査が幾度となく行なわれ、多くの遺跡が分布していることが知られておりました。このたび当地に県営ほ場整備事業が及び、二反田・岡田町遺跡を含む地域もその対象となったことから、文化財の保護を図るため、松本市が松本地方事務所より委託を受け、松本市教育委員会が事業に先立って発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行なうことになりました。

発掘調査は市教育委員会によって組織された調査団により、平成3年5月から同年12月の長きにわたって行なわれました。作業は夏の猛暑、冬の厳寒に悩まされるなど大変なものでしたが、参加者の皆様の並々ならぬ御尽力により無事遂行することができました。その結果、古墳時代～奈良・平安時代にかけての住居址119軒、建物址22棟をはじめとする数多くの遺構と、同時期に土器などを得て、多大なる成果を取ることができました。これらの資料は、今後地域の歴史解明に大変役立つものとなることでしょう。

しかしながら開発事業に先立って行なわれる発掘調査は記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾のなかで、文化財保護に携わる者の苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護への御理解を深めて頂ければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷状況のなか発掘作業に御協力頂いた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大な御理解を頂いた女鳥羽川土地改良区、地元関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成5年3月

松本市教育委員会 教育長 守屋立秋

例 言

- 1 本書は、長野県松本市岡田の伊深・岡田町一帯に所在する二反田遺跡と岡田町遺跡の発掘調査報告書のうち、第1分冊（本文・写真図版編）である。
- 2 本調査は平成3年度県営園場整備事業本郷岡田地区に伴う緊急発掘調査であり、松本市が長野県松本地方事務所から委託を受け、松本市教育委員会が実施したものである。
- 3 遺跡名は調査開始時には二反田、寺北、中島の3つとされていた。調査が進むにつれ、寺北と中島は本来一つの遺跡と捉えるべきと判断し、2つを合わせて岡田町遺跡にした。
- 4 本調査の発掘調査期間は以下の通りである。
二反田遺跡：平成3年5月14日～7月8日 岡田町遺跡：平成3年7月29日～12月6日
- 5 本書は、遺跡、遺構、および遺物についての記述と一部の挿図、写真図版により構成される。遺跡・遺構の測量図・実測図、遺物の実測図・拓影等は第2分冊（図版編）でまとめて示してある。このため、本文中の「第〇図」は第2分冊（図版編）中の図番号を指す。
- 6 本調査の実施、本書の作成にあたって、次の方々から援助・指導・助言をうけた。記して感謝する。（敬称略）

八賀晋 森郁夫 小林康男 川上元 倉沢正幸 島田哲男 望月映 森義直 西沢寿晃
太田守夫 桐原健 倉科明正 山田真一 山下泰永 三村肇 澤谷昌英 竹原久子

- 7 本書作成の総括・編集是三村竜一が担当した。
- 8 本書作成にあたっての執筆分担は下記の通りである。

第1章 事務局

第2章 第1節：森義直 第2節：三村竜一

第3章 第1節：三村竜一

第2節：1・2 三村竜一、高山一恵 3・4 竹内靖長 5 木下守

第3節：1(1)竹原学 (2)直井雅尚 (3)竹内靖長 2 竹内靖長 3・4 三村竜一

5 木下守 6 三村竜一

第4章 竹内靖長

- 9 遺物の写真撮影は宮嶋洋一氏による。
- 10 石器の石材鑑定は太田守夫氏にお願いした。
- 11 一覧表の作成は関沢聡、石合英子、林和子、高山一恵、木下守、久保田剛、三村竜一による。
- 12 本書では調査結果の提示を重視したため、委託契約書、作業日誌等の事業の経緯を示す書類は掲載できなかったが、これらは現場で作成した測量図類、写真類、遺物、遺物実測図類とともに松本市立考古博物館（松本市中山3738-1 ☎0263-86-4710）で保管している。

目 次

第1章 調査経過	
第1節 事業の経緯と文書記録	4
第2節 調査体制	5
第2章 遺跡の環境	
第1節 遺跡の立地と地形・地質	7
第2節 周辺遺跡	9
第3章 調査	
第1節 調査の概要	13
1. 調査方法	13
2. 調査結果	14
3. 提示の方法	15
第2節 遺構	
1. 二反田遺跡	
(1) 竪穴住居址	21
① 古墳時代	21
② 奈良・平安時代	24
(2) 掘立柱建物址	24
(3) 土坑	24
(4) 溝	25
2. 岡田町遺跡A区	
(1) 竪穴住居址	27
① 古墳時代	27
② 奈良・平安時代	28
(2) 竪穴状遺構	33
(3) 土坑・ピット	33
(4) 土師器焼成坑	35
(5) 溝	35
3. 岡田町遺跡B区	
(1) 竪穴住居址	36
① 古墳時代	36
② 奈良・平安時代	36

(2)掘立柱建物址	39
(3)土坑	41
(4)土師器焼成坑	41
(5)溝	42
4. 岡田町遺跡C区	
(1)竪穴住居址	44
①古墳時代	45
②奈良・平安時代	45
(2)掘立柱建物址	46
(3)土坑	47
5. 岡田町遺跡D区	
(1)竪穴住居址	49
(2)掘立柱建物址	55
(3)土坑	56
(4)溝	57
第3節 遺物	
1. 土器・陶器	70
(1)縄文時代晩期末葉前後	70
(2)弥生時代中期中葉	70
(3)古墳時代	71
(4)奈良・平安時代以降	72
2. 硯	88
3. 瓦	88
4. 土製品	91
5. 金属製品	91
6. 石器・石製品	93
第4章 調査のまとめ	
岡田町遺跡における奈良・平安時代の集落について	100

表 目 次

第1表	松本平における土器編年対応表	16
第2表	二反田・岡田町遺跡住居址一覧表	59
第3表	二反田・岡田町遺跡建物址一覧表	66
第4表	瓦一覧表	96
第5表	石器一覧表	97
第6表	銭一覧表	99
第7表	岡田町遺跡における奈良・平安時代の集落変遷表	104

挿 図 目 次

挿図1	遺跡の位置	6
挿図2	周辺遺跡	10
挿図3	調査地の範囲	17
挿図4	遺構配置全体図	19
挿図5	二反田遺跡遺構配置図	22
挿図6	岡田町遺跡A区遺構配置図	26
挿図7	岡田町遺跡B・C区遺構配置図	37
挿図8	岡田町遺跡D区遺構配置図	48
挿図9	岡田町遺跡D区第3005号住居址柱構造変遷模式図	51
挿図10	岡田町遺跡における奈良・平安時代の集落変遷図	101

第1章 調査経過

第1節 事業の経緯と文書記録

- 平成2年9月12日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 10月15日 平成3年度補助事業計画書提出。
- 平成3年5月1日 平成3年度県営ほ場整備事業本郷岡田地区二反田・寺北・中島遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約締結。
- 5月7日 二反田・寺北・中島遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 9月19日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 7月15日 二反田遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。
- 7月18日 二反田遺跡発掘調査終了届（通知）提出。
- 8月26日 二反田遺跡埋蔵物の文化財認定通知。
- 10月2日 平成4年度補助事業計画書提出。
- 10月9日 平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定。
- 10月26日 寺北遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。
寺北遺跡発掘調査終了届（通知）提出
- 10月15日 平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 11月1日 平成3年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 11月20日 平成3年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 12月27日 平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 平成4年
- 1月13日 中島遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。
中島遺跡発掘調査終了届（通知）提出。
平成4年度県営ほ場整備事業本郷岡田地区二反田・寺北・中島遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査変更委託契約締結。
- 1月23日 平成3年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 1月27日 平成3年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。
平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。
- 3月12日 平成3年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。
平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）変更交付決定通知。
- 3月31日 平成3年度文化財保護事業補助金（県費）確定通知。
平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）確定通知。
- 5月27日 平成4年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 7月9日 平成4年度文化財保護事業補助金（県費）内定。
- 7月17日 平成4年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 9月7日 平成4年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 9月11日 平成4年度文化財保護事業計画変更承認申請書提出。
- 9月17日 平成4年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。
- 9月24日 平成4年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 12月10日 平成4年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。
平成4年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。
- 平成5年3月12日 平成4年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。

第2節 調査体制

【平成3年度】発掘調査

調査団長 松村好雄（松本市教育長）

調査担当者 二反田道跡：直井雅尚、三村竜一、和田正雄（社会教育課）

岡田町遺跡A 区（寺北）：三村竜一、和田正雄

B・C区（中島）：竹内靖長、市川温（社会教育課）

D 区（中島）：木下守、和田正雄（社会教育課）

調査員 森義直、三村肇、太田守夫、新谷綾子、中島経夫、松尾明恵、西沢寿晃

協力者 赤羽包子、赤羽今朝博、赤羽紀子、赤間紀子、浅輪敬二、牧森弘子、天野雅代、荒木潮彦、飯田三男、飯沼重子、飯沼忠、五十嵐周子、池田穂積、石合英子、石川未四郎、石原博之、井上優、因幡美津子、内澤紀代子、内田造、内田和子、浦沢たか子、浦田長、大久保喜代子、大久保たつ子、大澤武子、大澤ちか子、大下恵二、太田千尋、大谷成嘉、大塚袈裟六、大月育英子、大堀一男、岡部登喜子、岡村行夫、尾澤とみ子、開嶋八重子、加藤貴光、上條ため子、上條尚美、河村陽一、北沢達二、北村洋、窪田由美、小池愛子、小池直人、小岩井美代子、奥喜義、小林孝宏、小松正子、斎藤政雄、坂本孝之、塩原久和、須澤久、須藤武、瀬川長廣、袖山勝美、滝沢龍一、田口喜重、武田睦恵、田多井亘、谷本達治、田原一勇、田村かつよ、田村幸子、堤加代子、鶴川登、寺島貞友、寺島タケ、中澤剛志、中島新綱、中村恵子、中村文一、中村頼三、南葉徹、西村好、野沢稔、長谷川智子、服部寛、林昭雄、林和男、林原和秀、原田賢一、原とみ、平林薫、深井美登利、深澤正一、藤井源吾、藤井久子、藤井マツエ、藤井道明、藤沢ハツ、藤沢ミツ、洞沢文江、本澤香、松尾さだ子、丸山恵子、三浦節子、三沢元太郎、宮下和子、明神功、村松到子、村山牧枝、百瀬二三子、森井柳三郎、矢崎寛子、矢沢うめ子、山口幸子、横山小夜子、横山恒雄、横山真理、横山保子、吉江園子、吉江孝子、吉沢克彦、吉田勝、與曾井尋由、米山禎興、米山泰正、塩元美智子

事務局 荒井寛（社会教育課長）、田口勝（課長補佐）、熊谷康治（課係長）、直井雅尚、関沢聡、木下守、竹内靖長（主事）、久保田剛（事務員）、荒井由美、山岸弥生

【平成4年度】報告書作成

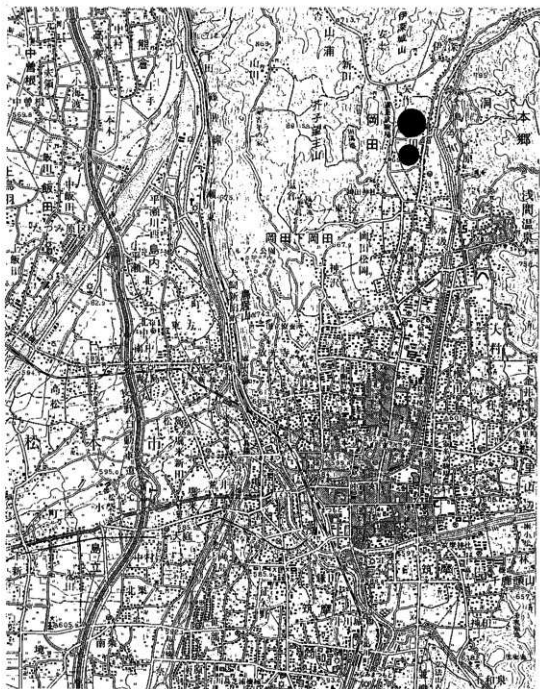
協力者 上條尚美、倉科祥恵、小松正子、高山一恵、滝沢龍一、竹平悦子、土橋幸子、堤加代子、直井由加里、中村朝香、林和子、林雄一、洞沢文江、松尾さだ子、丸山恵子、水野桂子、三村康子、村松恵美子、村山牧枝、百瀬二三子、横山真理

教育委員会事務局：島村昌代（社会教育課長）、田口勝（課長補佐）、窪田雅之（主任）

財団法人松本市教育文化振興財団

事務局 深澤豊（事務局長）、牟禮弘（事務局次長）、青木孝文（事務局次長補佐）

松本市立考古博物館 神澤昌二郎（館長）、直井雅尚、関沢聡（主任）、久保田剛（主事）、荒井由美、藤原美智子



- 岡田町遺跡
- 二反田遺跡

1:50,000



挿図1 遺跡の位置

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と地形・地質

地形と地質の概観 二反田・岡田町遺跡は松本市北方の岡田地区にあり、女鳥羽川が第三紀層の山地を南に開ききして形成した細長い扇状地の扇頂寄り、先年調査した扇頂付近にある塩辛遺跡の南に位置している。標高は690m～710mの間に細長く分布し、現女鳥羽川の右岸・第2段丘面上にある。女鳥羽川は武石峠(1810m)付近から流れ出す中の沢と、三才山峠(1500m)から流れ出す本沢、袴越山(1752m)から流れ舟ヶ沢が三才山の一の瀬で合流し西へ向かって流れ、稲倉から流路を120°くらい向きをかえて南に流れ、松本市内に入って90°流路を西に変え、白板付近で田川と合流している。延長は17.3km、高度差は約1200mあり稲倉より上流は120/1000の勾配をもつ急流で、下流は21/1000の勾配である。そのため稲倉付近を扇頂として、本郷や岡田に広い扇状地を形成し、湯川の線を境として薄川の扇状地と接している。この扇状地堆積物は第三紀層の内村層および玢岩、各種安山岩の碎屑物により形成されている。現在稲倉付近で急角度に曲がっているこの川も、同様な堆積物が城山一帯に見られ波田ロームを載せていることから更新世末頃は南西方向に流れていたことがわかる。その後城山一帯の山地の隆起により流路を次第に東にとり、稲倉→岡田西→大門沢へと流れを変え、岡田西の南北性の低地は女鳥羽川の自然流路のあとで、岡田町付近が少し高くなっているのは、女鳥羽川がつくった自然堤防と推定される。

今回発掘の二反田・岡田町遺跡は上述した岡田町西の低地付近に当たり、本遺跡が生活の舞台であった平安時代初め頃は、女鳥羽川の流路は稲倉付近で現在より右岸寄りに進み、伊深付近から本遺跡に向け西の山際を南流していた事が今回の発掘でわかった。平安時代後半に起きた洪水時に稲倉付近の急カーブの所で流速が少し落ち、その結果運搬力を失い、大量の土砂を伊深以南に堆積させ、川自身が堆積させた土砂に阻まれ、流路を更に東にとらざるを得なくなったものと推定される。**女鳥羽川扇状地地形の特殊性** 松本市北部の遺跡群を考える上で女鳥羽川の果たした役割は極めて重要であるので、他の扇状地と異なる特徴をあげると第1に出水率・河況係数(年間の最小流量に対する最大流量の比)共に極めて大である。即ち荒れ川であること。第2に扇頂付近の稲倉で流路が120°位曲がっていること。これは、前述した如く城山一帯が西側程激しく傾動したためであるが、更に加えてカーブする付近の左岸は硬い玢岩が露出し、護岸の働きをして侵食されにくい急カーブが永く維持されている。第3に本来流路の首振りにより貝殻を伏せたように滑らかな扇状地地形ができるはずであるのに、扇頂付近で流路が急カーブで曲がっているため、洪水時には稲倉→伊深間で勢い余って曲がり切れず、西の山麓寄り(本遺跡付近)を流れることもあり、その時の自己

堆積物（自然堤防）により東の山麓（現在）を流れることもあるなど、扇状地の両端を流路がしばしば繰り返されたため、扇状地の中央部が高く両側が低い変則的な扇状地を形成するに至ったものと考えられる。しかし、西側からの地形の傾動は引き続き継続されているらしく、西側を流れたのは9C頃を最後にして以後東側に移り現在に至っている。このため段丘も西側（右岸）にのみ認められる。

遺跡付近の段丘について この扇状地は形成後地盤の隆起により河岸段丘を形成し、現女鳥羽川の右岸に三段の河岸段丘が認められる。この地盤の隆起は断定はできないが、上述した如く一様なものではなく、西側の方が東側より大きく傾動した可能性があり、上段から矢作・神沢の第1面、伊深・岡田・反目・中原に至る第2面、現在の氾濫原の第3の段丘面におよそ区別することができる。特に今回発掘された岡田町・二反田遺跡は、第2段丘面を開き流れており、亜段丘面とみられるものが第2段丘面に存在している。当時この西側の低地を女鳥羽川が流れ、その付近に集落が営まれていたが平安中期の洪水により、巨礫を含むふい分けの悪い洪水性の堆積物を、本遺跡付近から岡田町付近に厚く堆積させ流路を現在の位置に移している。現岡田町の直ぐ東の水田では9C頃の巨礫を含むふい分けの悪い黒色の礫土が堆積している。

二反田・岡田町遺跡の土層について この遺跡の検出面は、第2段丘面の水はけの悪い黄色シルト質粘土層であるが、9C頃の生活面は、住居址内の土層からみて、これより上に堆積していたとみられる黒褐色土層であったと推定される。上流のD地区は9C頃の洪水をまともに受け、当時の表土は押し流され、その後にはふい分けの極めて悪い含礫黒色～暗褐色土層が厚く堆積しており、この時の洪水で古女鳥羽川は、その機能を失ったものとみられる。B地区はこの洪水の影響を受けながらも、なお湿地帯となって河川の跡は残り、この中へ巨礫や不用となった瓦や土器などを投入している。B地区の西側にあるC地区は、前述してあるように同じ第2段丘面でありながら、この亜段丘的などところでやや高く、この時の洪水の影響は殆ど受けていない。一番下流に当たるA地区は洪水の直撃は免れたらしく幅2m程の用水路の断面を検討した結果、次第に流量を減じて川幅が狭くなり遂に湿地となって、漆黒色土が堆積していることから推定することができる。この洪水の後、主として西部山地からローム質混じりの安山岩の風化粘土が、降雨の度に少しずつ遺跡付近の凹地帯に押し流されて厚く堆積し、褐色～暗褐色のシルト質粘土層となり、上部15～20cmは耕土のため黒色を呈している。以上を整理すると、①第2段丘面の細紋構構の基盤となす礫を含む黄色シルト質粘土層、②9C頃の洪水によるふい分けの悪い暗褐色礫土層、③洪水後主として西部山地から運ばれた細粒のシルト質粘土層となり、土色に関しては堆積後の地下水の多寡により、還元溶脱して灰色を帯びたり、還元溶脱後その上の層から金属酸化物（主として鉄分）が溶脱して灰色土層に沈澱して赤褐色～褐色の斑紋をつくるなど、堆積後の微環境の違いにより同時代の土層でも当時の色を残すものもあれば、大きく変色するものもあって一定せず、特に本遺跡ではその変化が著しいので注意を要する。

第2節 周辺遺跡

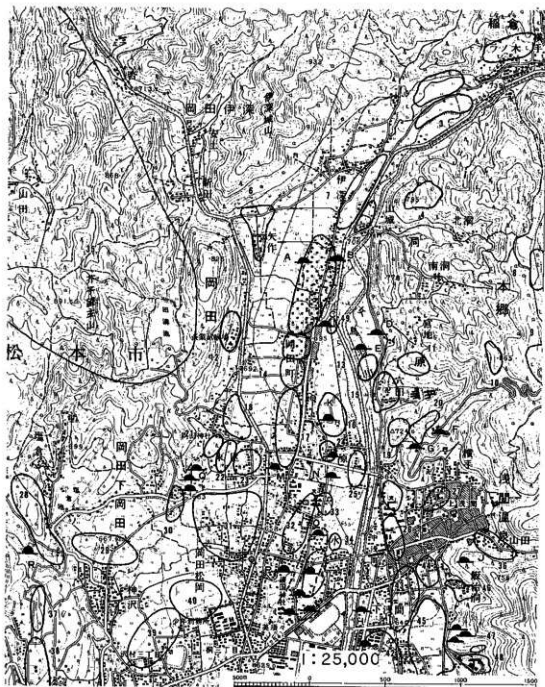
二反田・岡田町遺跡は松本市北部山麓一帯に属する遺跡であり、周辺には旧石器時代～中世にかけて多数の遺跡が分布している。近年のほ場整備事業や宅地化に伴って、発掘調査が数多く実施され、地区の歴史もわずかではあるが次第に明らかになりつつある。一方では表面採集によって遺物散布地として把握されている遺跡も多い。ここでは近年の発掘成果を加えて時代別に岡田地区、及び女鳥羽川流域の本郷地区の遺跡を中心に概観して見たい。

旧石器時代 本郷三才山山腹の渋池より晩期の切出形石器が採集されているだけである。

縄文時代 女鳥羽川の両岸に多くの遺跡が展開している他に、城山の東側山麓・袴腰山の中腹付近等に分布している。早期では、渋池のみが散布地として知られていたが、岡田伊深にある矢作（H3年度発掘調査実施）では土坑より土器片が出土している。前期では、本郷三才山に渋池・袴腰、洞に不澄池、原に下屋敷、浅間温泉に柳田等がある。中期になると、遺跡数は増え、本郷三才山に芦の田池（美鈴湖）・本村、岡田に田溝池・塩倉池・神沢・峰ノ平、稲倉に和田・鎮守、洞に橋渡し・栗和田、原に下屋敷・五反田、浅間温泉に高田等多数の遺物散布地が、確認されている。最近の主な発掘調査は、岡田・洞・稲倉の3地籍にかかる塩辛遺跡（H3～4年度発掘調査実施）、岡田では西裏（S54・58・60・H1～4年度発掘調査実施）・矢作、浅間温泉では柳田（S54・H2年度発掘調査実施）、大村では塚田（H2・4年度発掘調査実施）・立石（H1年度大村VIとして発掘調査実施）等で実施されている。このうち塚田では47軒の竪穴住居址を確認しており、注目される。後期になると数は減少し、浅間温泉には柳田・立石、原に板利尾がある。晩期には大村に原畑（H4年度発掘調査実施）・浅間温泉に柳田の2遺跡が確認されている。

弥生時代 松本市東部山地の標高800～1000mに点在する小規模な池の周囲と、山麓～平地に見られる。前者には本郷三才山に渋池・中の沢・一の瀬、洞に栗和田・雨堤があり、後者には浅間温泉に柳田・鳥居前・大音寺・柴田、原に西原・五反田、大村に大村遺跡がある。発掘調査では、大村の古屋敷（H3年度発掘調査実施）より後期の竪穴住居址17軒が確認されている。

古墳時代 集落址をみると浅間温泉に柳田・真観寺・高田が遺物散布地として知られていたが、発掘調査によって確認された竪穴住居址は岡田の西裏で前期1、中期1、大村の古屋敷で中期17、後期9、前田（H3年度発掘調査実施）で前期2をそれぞれ検出した。この地区の古墳は松本市東山山麓の尾根上、女鳥羽川両岸に分布し、西側の城山山麓にも見られる。浅間温泉～大村の東に迫る山中の尾根上には多数の古墳があり、いままでも発掘調査も行われている。妙義山の丘頂には妙義山1～3号があり、人骨とともに装身具、馬具等が、桜ヶ丘の尾根上にある桜ヶ丘からは金銅製の天冠がそれぞれ出土している。また、浅間温泉の北側には本社峯、茶臼山がある。女鳥羽川両岸には北から山城、中島、高根塚、土取場、塚田、西原、下屋敷、猫塚、塚畑、水汲1～5号、松岡、



二反田、岡田町遺跡

挿図2 周辺遺跡

周辺遺跡名と主要時期

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1. 鎮守 (縄文) | 26. 高田 (縄文・古墳・平安) |
| 2. 和田 (縄文) | 27. 鳥居前 (弥生・古墳) |
| 3. 桜田 (縄文) | 28. 塩倉 (縄文) |
| 4. 高山 (縄文) | 29. 丸山 (平安) |
| 5. 竹之上 (縄文) | 30. 天神の木 (平安) |
| 6. 矢作 (縄文・中世) | 31. 松岡 (古墳・奈良・平安) |
| 7. 塩辛 (古墳・奈良・平安・中世) | 32. 七日市場 (平安) |
| 8. 栗和田 (縄文・弥生・古墳) | 33. 杵坂 (縄文・平安) |
| 9. 雨堤 (縄文・弥生・古墳) | 34. たて (縄文・平安) |
| 10. 小河清水 (縄文・古墳・平安) | 35. 北部古窯址群 (奈良・平安) |
| 11. 穴田峯 (古墳・奈良・平安) | 36. 大音寺 (縄文・弥生) |
| 12. 向山 (平安) | 37. 神沢 (縄文) |
| 13. 塚田 (縄文・平安) | 38. 峰の平 (縄文) |
| 14. 下出口 (古墳・奈良・平安) | 39. 狐塚 (平安) |
| 15. 穴田前 (古墳・奈良・平安) | 40. トウコン原 (縄文・弥生・奈良・平安) |
| 16. 宮の上 (平安) | 41. 西原 (縄文・弥生・古墳) |
| 17. 西裏 (縄文・古墳・奈良・平安) | 42. 大輪原 (縄文・平安) |
| 18. 宮の前 (奈良・平安・鎌倉) | 43. 柳田 (縄文・奈良・平安) |
| 19. 北ノ久保 (縄文) | 44. 新潟南裏 (縄文) |
| 20. 根利尾 (縄文) | 45. 大村 (奈良・平安) |
| 21. 岡田神社裏 (平安) | 46. 真観寺 (古墳・平安) |
| 22. 堀ノ内 (平安) | 47. 新切古窯址群 (古墳) |
| 23. 田中 (平安) | 48. 新切 (古墳・奈良・平安) |
| 24. 下屋敷 (縄文・平安) | 49. 原畑 (平安) |
| 25. 五反田 (弥生・古墳・平安) | |

古墳名

- | | | |
|-------|-----------|----------|
| A 中島 | G 茶白山 | M 猫塚 |
| B 山城 | H 大屋敷1・2号 | N 塚畑 |
| C 高根塚 | I 妙義山1～3号 | O 水汲1～5号 |
| D 土取場 | J 桜ヶ丘 | P 松岡 |
| E 塚田 | K 西原 | Q 矢崎 |
| F 本社峯 | L 下屋敷 | R 塚山 |

大屋敷がある。このうち、水汲1～5号は円形の積石塚である。積石塚としては市内尾山辺の薄町にある古墳群に於いて方形のものが多くとされており、朝鮮からの渡来人の墓と考えられている。水汲1～5号は円形ではあるが、その構築方法がいずれも土石混合であることから関連性が指摘されている。西側の城山山麓には、矢崎古墳、塚山古墳等がある。古窯址は、東山山麓妙義山中に新切古窯址があり、後期の須恵器が出土している。

奈良・平安時代 奈良・平安時代集落址の遺跡数は多く、女鳥羽川東側に穴田峯、高田、大村、柳田、大輔原、古屋敷等がある。発掘調査に於いて柳田では奈良時代の竪穴住居址1軒を確認し、大輔原(H1年度大村Vとして調査実施)では、奈良時代の大型住居址1軒を検出し円面硯を得ている。また大村では、S40年からH1年の間7回に及ぶ発掘調査が行われ、合計50に及ぶ竪穴住居址を確認した。女鳥羽川の西側には岡田町、二反田、下出口、岡田神社、向山、西裏、宮の前、宮の上、松岡、トウコン原、狐塚等があるが、近年の圃場整備事業や宅地化に伴って、発掘調査が数多く実施されている。確認された竪穴住居址は塩辛27、西裏58、宮の前(H2年度発掘調査実施)31、宮の上(H3～4年度発掘調査実施)13、原畑(H4年度発掘調査実施)21を数える。宮の前では大形1を含め建物址6を検出した。ここで注目されるのは西裏、宮の前で検出された土師器焼成坑と、大村、古屋敷、宮の前、塩辛、原畑から古瓦が出土した事である。西裏では竪穴住居址の近くに土師器焼成坑が多数確認された。住居址のピット内に粘土が貯蔵されていた例も多く、土師器製作集団の集落址と推定される。また宮の上でも粘土貯蔵用ピットが検出された。松本市内で最も多量の古瓦が出土する大村は、古くより注目されていた。寺院に関連のある地名が残っている事もあり、犬飼氏等の氏族の寺院・官衙があったのではないかと考えられているが、古瓦を葺いていた建造物は検出されていない。また岡田、原地区からも多数の出土例があり、近年の発掘調査の大きな成果の1つに掲げられる。しかし大村と同様に古瓦と直接結びつく遺構ははまだ検出されておらず、今後の調査に期待したい。古窯址には西に北部古窯址群があり、豊科町の上の山・菖蒲平古窯址群とは一連のものと考えられている。地形的には山中丘陵の緩斜面に位置し、付近には第3紀層の良質な粘土が露出し、水にも恵まれている。遮那藤麻呂、中島豊晴、河西清光氏らにより調査が行われ、須恵器・土師器・瓦などが出土した。奈良時代末～平安時代前半にかけての須恵器を中心とした生産地と考えられている。

主要参考文献

- 長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編 全一卷(1) 遺跡地名表』
東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌(二) 歴史(上)』
長野県企画局・松本市教育委員会 1979 『松本市大村遺跡群柳田遺跡 分布確認調査報告書』

第3章 調査

第1節 調査の概要

1. 調査方法

(1) 二反田遺跡

調査地の設定 ほ場整備事業用地内で、遺跡にかかる範囲があまりに広いため、遺物の表面採集調査と重機によるトレンチの試掘調査を行い、遺構・遺物の確認された地点を中心に、調査地を決定した。

表土の除去 遺構検出面までD区を除いて、重機を使用し除去した。D区については、その搬入・使用が難しく、人力で行った。

調査地区 検出が終了した地区より、便宜上A, B, C, Dとした。実質面積はA区 972㎡、B区 593㎡、C区 1,435㎡、D区 162㎡、合計 3,162㎡となる。

遺構の命名 各地区の遺構検出終了時に、その性格を推定して1号より順に付けた。本遺跡では竪穴住居址、掘立柱建物址、土坑・ピット、溝がある。

掘り下げ 全て人力で行った。竪穴住居址は土層観察用のベルト（畦）とカマド部分を残して床面下迄掘り下げ、土層観察後ベルトを除去した。出土遺物は小片以外は出土地点にとどめ、出土状況の写真撮影・測図を行ない取り上げた。その後、住居址に伴うピット・炉・カマド等の施設を検出した。ピットは全体を5～10cm程掘り下げ、柱痕の観察を行ってから半分を掘り、土層観察後全掘した。炉・カマドは半分を掘り、土層観察後全掘した。掘立柱建物址は竪穴住居址と同様に全体を浅く掘り、柱痕を観察した後半分を掘り、土層図を作成して全掘した。土坑は約半分を掘り、土層観察後に全掘、ピットは初めから全掘した。

測量 平面の測量については調査地全体を3×3mの方眼で覆い、各交点に基準となる釘を打った。調査地の1点は方眼の座標によって求められる。標高については各調査区に木杭を埋設して基準とした。

埋め戻し 全ての発掘調査終了後に、重機を使用し埋め戻した。

(2) 岡田町遺跡

調査地の設定 岡田町遺跡は従来、寺北遺跡と中島遺跡の2つの遺跡とされてきた。しかし発掘調査が進むにつれ、いずれも北方の伊深地籍から南方へ伸びる舌状台地と、その東側の浅い谷状の底地を中心として拡がる1つの遺跡と分かり、寺北・中島の名称を岡田町遺跡と変更した。今回のほ場整備事業用地は全て遺跡の範囲にあたる為、あまりに広大で、その工区も3つに区分されていた。

この工区毎に調査可能な期間が異なるので、発掘調査もこれに合わせて遺跡を3つに分け、それぞれに調査担当者を決めた。各担当者はそれぞれの工区の範囲にトレンチを設定して、重機を使って試掘調査を行なった。その結果ほとんど全域に遺構が確認されたが、特に密度の濃い範囲を中心に可能な限り広く調査地を設定した。南の工区よりA区、B・C区、D区としたが、それぞれの実質調査面積はA区 4,992㎡、B区 4,088㎡、C区 3,766㎡、D区 3,968㎡、合計では16,814㎡に及ぶ。ほ場整備事業は南から北上して実施されるので、A区、B・C区、D区の順に調査を開始した。しかし許された調査期間は各地区ともほとんど重複しており、発掘人員と調査期間の不足は、深刻な問題であった。

遺構の命名 岡田町遺跡は1つの遺跡であり、遺構Noについても連続した番号を付けるのが望ましい。しかし、各地区同時に進行していく為に、調査中に連続した番号を付けるのは不可能であった。仮の番号を付け、調査終了後に番号を整理し繰り替える事も可能ではあるが、大変な作業と混乱が予想される。そこで仕方なくA区は0001号、B区は1001号、C区は2001号、D区は3001号から順にNoを付けた。しかし、今回検出した大形の1001溝、3001溝は本来1つの遺構として考えられるが、地区毎に2つの異なるNoを付ける結果になってしまった。尚、本遺跡で検出した遺構には竪穴住居址、掘立柱建物址、土坑・ピット、土師器焼成坑、溝がある。

遺構の掘り下げ 二反田遺跡と共通するものについては、全く同じ方法をとった。ただし溝については調査期間の制約等があり、部分的に底面を確認したのみで全掘していない。またピットはほとんどが未掘である。竪穴状遺構については竪穴住居址、土師器焼成坑については土坑と同じ方法で調査した。

測量・埋め戻し 二反田遺跡と同じ方法である。

2. 調査結果

(1)二反田遺跡

①遺構 今回の調査で確認された遺構は、下記の通りである。

- ・竪穴住居址 7軒（古墳時代前期6、平安時代1）
- ・掘立柱建物址 1棟（中世以降）
- ・土坑 5個（不明）
- ・ピット 282個（時期不明）
- ・溝 3本（奈良～平安時代?）

②遺物 竪穴住居址を中心として、下記のものが出土した。

- ・土師器 ・須恵器 ・灰釉陶器 ・緑釉陶器 ・石器 ・鉄器

③成果

- ・古墳時代の竪穴住居址6軒を調査したこと。

- ・平安時代の竪穴住居址を調査したこと（岡田町遺跡の続きと考えるべきかもしれない）。
- ・中世以降と見られる掘立柱建物址を調査したこと。

(2)岡田町遺跡

①遺構 A～D区全体で確認された遺構は以下の通りである。

- ・竪穴住居址 110軒（古墳時代前期4、奈良時代～平安時代99、不明7）
- ・掘立柱建物址 21棟（9世紀以降のものが多い）
- ・竪穴状遺構 2個（中世以降）
- ・土坑 384個（古墳時代、奈良時代、平安時代、中世以降）
- ・ピット 1454個（古墳時代～中世以降）
- ・土師器焼成坑 2個（平安時代2）
- ・溝 14本（奈良～平安時代、中世以降）

②遺物 竪穴住居址・溝を中心として各種の遺構から、下記のものが出土している。混入した遺物も少なくない。

- ・縄文土器
- ・弥生土器
- ・土師器
- ・須恵器
- ・灰釉陶器
- ・円面硯
- ・瓦
- ・土製品
- ・石器
- ・鉄器
- ・銭

③成果

- ・古墳時代の住居址4軒を調査したこと。
- ・奈良～平安時代と思われる竪穴住居址106軒、掘立柱建物址21棟を調査したこと。
- ・河岸に焼土を伴い、約800m以上の規模をもつ自然流路（溝）を調査したこと。
- ・平安時代の土師器焼成坑2個を調査したこと。
- ・中世以降の火葬墓6個を調査したこと。
- ・円面硯、瓦等の特殊な遺物を得たこと。

3. 提示の方法

遺構の記述は、二反田遺跡と岡田町遺跡A～D区の地区毎に分け、更に種類別に行なった。岡田町遺跡の住居址・建物址は遺跡を構成する最も代表的な遺構であるが、それぞれ総数110軒・21棟に及ぶ為、紙面の都合上代表的・特徴的な47軒・16棟のみを扱った。それ以外のものについては一覧表を参照願いたい。遺物の記述は、最も出土量の多い土器についてのみ、遺跡と調査区毎に時代別・遺構別に行なった。その他の遺物は、遺跡・調査区の枠を越えて種類別に行なった。

文中の遺構名は下記のように略した。

- | | | | |
|-----------|------|----------|------|
| 第○号竪穴住居址 | → ○住 | 第○号竪穴状遺構 | → ○竪 |
| 第○号掘立柱建物址 | → ○建 | 第○号土坑 | → ○土 |
| 第○号溝址 | → ○溝 | | |

奈良・平安時代の時期区分については、**縄長野県埋蔵文化財センター**『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－総論編1990』に従った。

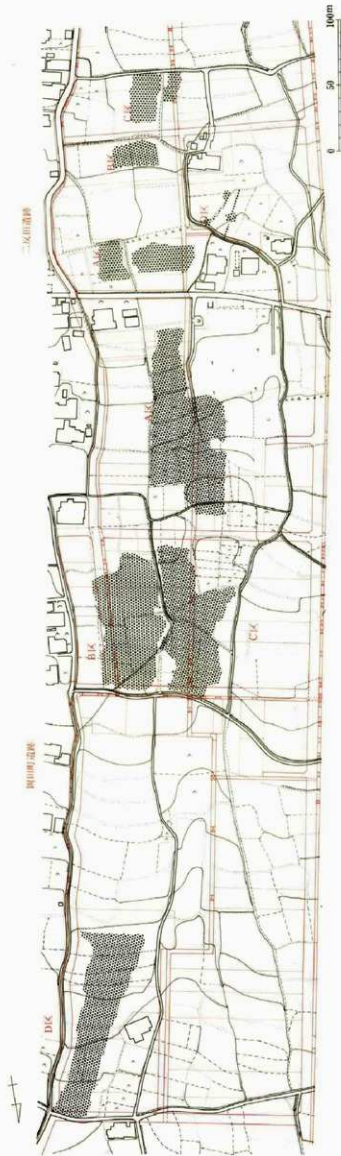
実年代	実年代比定の根拠	縄長野県埋蔵文化財センター	松本市教育委員会(註1)
700			I
	畿内系暗文土器 飛鳥Ⅲ・Ⅳ	1 期	II
	「美濃国」刻印須恵器	2 期	III・IV
		3 期	V
	4 期		
800	万年通寶・神功開寶	5 期	VI
		6 期	VII VIII
900	灰釉陶器 黒笹14号窯式・光ヶ丘1号窯式	7 期	IX・X
	灰釉陶器 光ヶ丘1号窯式	8 期	XI
	灰釉陶器 光ヶ丘1号窯式・大原2号窯式	9 期	
	灰釉陶器 大原2号窯式・虎溪山1号窯式	10 期	
	灰釉陶器 虎溪山1号窯式・丸石2号窯式	11 期	
1000	灰釉陶器 虎溪山1号窯式・丸石2号窯式	12 期	XII
	灰釉陶器 虎溪山1号窯式・丸石2号窯式	13 期	
	灰釉陶器 丸石2号窯式・大原10号窯式	14 期	
1100	灰釉・山茶碗 大原10号窯式・西坂1号窯式	15 期	

第1表 松本平における土器編年対応表

※縄長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4の第16表実年代の比定と松本盆地における土器編年の対応を改変して使用。

(註1) 山下泰永 1985「土器」松本市島立南栗・北栗遺跡 松本市教育委員会

廣井雅尚 1988「土器」松本市島立桑里的遺構 松本市教育委員会



神田 3 調査地の地図

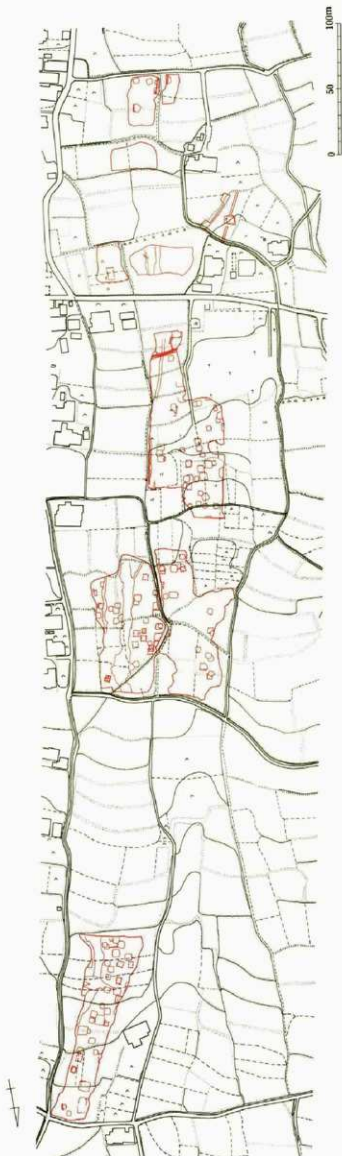


插图4 遗址位置总体图

第2節 遺構

1. 二反田遺跡

(1) 竪穴住居址

① 古墳時代

第1号住居址 (第1図)

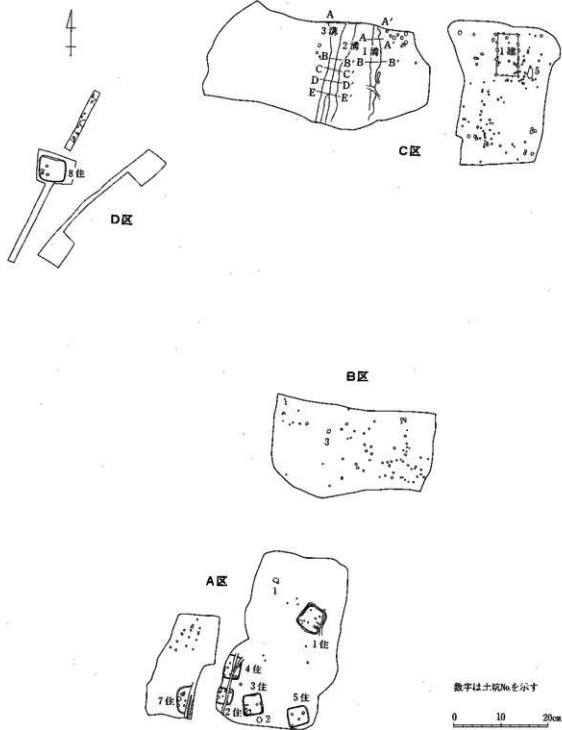
検出：A区北東部に位置する。暗渠排水路が本址の北壁東側から東壁北側を横切っている。このため調査時にはここから絶え間なく水が染みだし、掘り下げは困難を伴った。黄褐色粘質土の地山に暗褐色土の落ち込みとして明瞭に検出された。平面形は南壁中央がやや膨らむ隅丸方形を呈する。炉： $P_1 \cdot P_2$ の支柱穴間にある。28×23cmの楕円形を呈する地床炉で、内部は被熱層が確認された。床：平坦・堅固で、礫は含まれない。ピット：8個検出された。 $P_1 \cdot P_4$ は規模・位置からして支柱穴、 P_3 (92×76×30cm) は貯蔵穴と考えられる。諸施設：周溝は南西隅～東壁中程と、西壁南側～北壁東側の壁直下に巡り、このうち西壁南側～北西隅では二重になっている。溝はいずれも80cm程の長さを東西方向に測るもので、南半分に3本ある。遺物出土状況：比較的多い。南西部からは、床面に接して甕の口縁部片が出土している。時期：遺物より本址は古墳時代前期に属する。

第2号住居址 (第2図)

検出：A区南側に位置する。西側は調査区域外となり、暗渠排水路が東側を南北に横切っている。平面形は隅丸方形を呈すると思われる。炉：検出されなかった。床：北→南へ傾斜がある。堅固な2次堆積ロームで、礫を含まない。ピット：8個検出された。支柱穴と推定されるものはない。遺物出土状況：非常に少ないが、中央北寄りに床面に接して土師器壺片が出土している。時期：遺物より本址は古墳時代前期に属する。

第3号住居址 (第3図)

検出：A区南側に位置する。検出時には炭化物が壁の立ち上がりに沿って確認できた。炉：中央東寄りに確認された。46×43×8cmの大きさのほぼ円形の地床炉で、内部は被熱し焼土化している。床：平坦・堅固な黄褐色粘質土であり、東側は小礫が混入している。ピット： $P_1 \sim P_4$ が検出されたが、支柱穴と考えられるものはない。このうち P_4 は南西隅という位置及び規模から貯蔵用のピットの可能性がある。諸施設：周溝は北壁東側～東壁北側・南壁東側の一部で途切れるだけで、ほぼ住居址全体の壁の真下を巡る。西壁南半分ではやや内側を巡り2重になる。溝は住居址の軸に合わせて2本ある。このうち南北に走る溝は P_4 に切られて検出した。覆土：黒褐色土の単層であ



挿図5 二反田遺跡遺構配置図

った。本址には下層～床面にかけてコナラの炭化材(註)が放射状に見られた。北西部には焼土の拡がりが見られ、炭化物の遺存状況からみて住居の廃絶後に焼失したものと考えられる。遺物出土状況：礫が北西部と中央東に確認され、覆土上層～床面にかけて古墳時代前期の土師器を得ている。石器には砥石がある。時期：遺物より本址の廃絶時期もそこに求めたい。

(註)炭化材の材質については、県立松本深志高校の森義直氏に調査と鑑定をしていただいた。

第4号住居址(第2図)

検出：A区の南側に位置する。西側は区域外にかかり、東側はY字形を呈する暗渠に切られている。炉：中央やや西寄りに設置されており、26×21×8cmの楕円形を呈する。底面が被熱焼土化した地床炉である。床：平坦・堅固な黄褐色粘質土である。ピット：10個確認された。P₁～P₄・P₅は壁下にあるが、性格は不明である。覆土：単層で黒褐色土である。遺物出土状況：僅かに土師器が出土した。時期：古墳時代前期に帰属すると考えられる。

第5号住居址(第4図)

検出：本址が位置するA区南東部は、礫が多量に混入する茶褐色～黒褐色土の地山で、遺物が若干見られるものの炉・周溝等の遺構の確認ができなかった。このためサブトレンチを十字に設定し、土層断面観察の結果と遺物や礫の有無から本址のプランを推定した。床：自然地形に合わせて北から南へ緩やかな傾斜をもつ。ピット：P₁～P₅まで検出されたが主柱穴とは考え難く、性格も不明である。覆土：小礫が含まれていた。遺物出土状況：比較的少なかったが、P₁より土師器の器台が出土した(第93図)。時期：遺物より本址は古墳時代前期となろう。

第7号住居址(第4図)

検出：A区南側に位置し、東側は調査区域外となる。暗渠排水路が中央部を北から南に横切り、床面下まで破壊していた。この一帯は調査区内で最も低地にあたるので、いつも水が染みだしており、水溜りさながらのなかで調査が進められた。炉：P₁・P₂の主柱穴間のやや内側に位置し、27×25×8cmのほぼ円形を呈する地床炉である。内部は被熱し焼土化が確認された。床：床面の状態は明らかではないが、傾きのない黄褐色粘土のおそらく堅固なものと考えられる。ピット：P₁～P₅まで検出した。このうちP₁・P₂は主柱穴と考えられる。他の4個は性格等は不明である。諸施設：周溝が壁直下に巡る。覆土：黒褐色土の単層であった。遺物出土状況：少量の土師器が見られた。時期：古墳時代前期と考えられる。

②奈良・平安時代

第8号住居址 (第5図)

検出：本址はD区に位置する。D区は北側の河田町遺跡から続いて延びる尾根状台地の先端にあたる。ここから地形は南・東・西はそれぞれ段をもって低くなっている。他の遺構との切り合い関係はない。カマド：西壁の南側に設けられ、煙道は検出されなかったが燃焼部が壁下に存在するカマドである。袖を地山の黄褐色粘質土を用いて築き、奥壁は緩やかに立ち上がっている。内部は被熱焼土化している。床：黄褐色粘質土で堅く、やや起伏があり、南側が僅かに深くなっている。ピット：西側に1.8m程の間隔をあけて2個検出され、2本の主柱構造をもつと考えられる。覆土：暗褐色～黒褐色土であった。遺物出土状況：土師器・須恵器・緑釉陶器など比較的多くのものが出土した。時期：本址は8期に属すると考えられる。

(2)掘立柱建物址

第1号建物址 (第6図)

検出：C区東に位置する。砂質の黄褐色2次堆積ロームの中に掘り込まれ、他遺構との切り合い関係はない。周囲にはピットが多数確認されたが、竪穴住居址、他の建物址等は検出していない。柱配置：南北5間(8.7m)×東西4間(4.6m)・東西3間(4.2m)の御柱の建物である。柱穴：掘り方は円形～楕円形を呈し、そのほとんどに柱痕がみられた。土層断面図C-C'とD-D'を合わせてみると、桁行の柱間寸法にはばらつきがあるものの、各柱穴がほぼ重なっている。埋土は明褐色～暗褐色土を用いている。遺物出土状況：非常に少ない。時期：中世以降と思われる。

(3)土坑 (第7図)

二反田遺跡の調査では多数の穴が検出された。この中で竪穴住居址や建物址等に伴わない穴のうち直径が100cmを越すものを土坑とし、それ未満をピットとして扱った。土坑はA区2個、B区1個、C区2個、D区1個があり総計は6個である。ピットはB区とC区東側に集中してみられた。

第1号土坑

検出：A区南側に位置する。平面形は不整形円形を呈し、南北118cm、東西82cmを測る。断面は半円形を呈し、壁と底面との区別がつきにくい。覆土：底面より褐色土→黒褐色土の順で堆積している。遺物：非常に少なく、土師器片がある。時期：所屬時期はわからない。

第2号土坑

検出：A区北側に位置する。112cm×110cm円形を呈している。覆土：単層で礫を含んでいる。底面には起伏が認められた。遺物：非常に少ない。時期：不明である。

第3号土坑

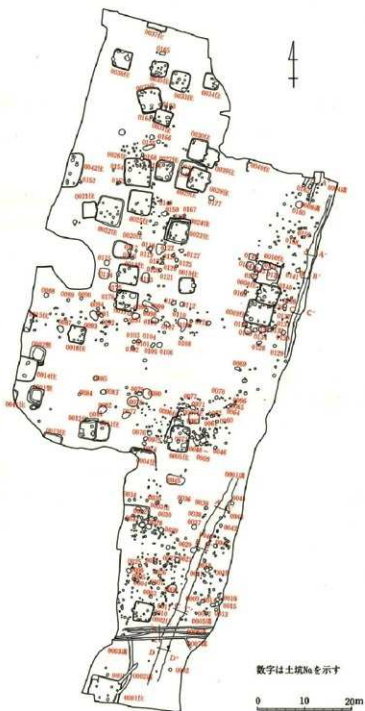
検出：B区北西部に位置する。東西100cm、南北64cmの不整楕円形を呈する。覆土：単層の覆土には暗褐色土が堆積していた。遺物：全く出土しなかった。

第5号土坑

検出：C区東側に位置する。切り合い関係には北側でP0021に底面下迄破壊されていた。西壁南側で大きな突出部をもつ不整楕円形を呈し、南北216cm、東西112cmの規模をもつ。覆土：褐色土の単層であった。遺物：全く出土していない。

(4)溝 (第8図)

検出：D区東側に検出面から3本が検出された。いずれも北から南へ並行して走るもので、南に下がるにつれ幅・深さが次第に減じている。東から1溝・2溝・3溝と命名した。2溝と3溝は切り合い関係がある。2溝は北側で3溝を切り、南側では離れている。今回は3本の溝として扱ったが、あるいは1本の溝の流路の変化をとらえたものかもしれない。溝1は幅0～2.4m、長さ約17.4m、溝2は幅0.9～4.0m、長さ22.0m、溝3は幅0.9～2.4m、長さ22.0mを測るが2溝と3溝については南側は区域外へ続いている。地山：いずれも黄褐色の2次堆積ロームを地山としている。断面形：幅の広い北側では凹凸が激しく複雑で一様ではなく、幅の狭い南側では幅広のV字形に近い。覆土：最下層は砂層もしくは砂礫を含む。遺物出土状況：土師器・須恵器の小破片のみ出土した。又、覆土上層～底面にかけては拳大～40cm大の礫が認められた。時期：土器は古墳時代～平安時代のものであるが、本址は平安時代に属すると思われる。



挿図6 岡田町遺跡A区遺構配置図

2. 岡田町遺跡A区

(1) 竪穴住居址

竪穴住居址は、0001住～0042住の41軒がある（0038住は欠番である）。このうち0032住、0042住の2軒は古墳時代前期のもので、他の39軒は2～8期に属するものである。分布は舌状台地上に多くみられるが、調査地を設定するための試掘調査では、西・東共に住居址の分布は続くことが判明している。規模をみると1辺が7mを超える大形住居址は認められず、小形のものが多く、代表的・特徴的な竪穴住居址についてのみ記述していく。

① 古墳時代

第0032号住居址（第23図）

検出：調査区北側に位置する。南壁東側を0031住に貼られ、壁は南側を除き凹凸があり、やや不整な隅丸方形を呈している。現代の耕作畝が覆土上層を破壊していた。炉：はっきりとした掘り込みは認められなかったが、中央南寄りに70×50cmの楕円形の焼土の拡がりが見出され、これは被熱焼土化した地床炉の痕と考えられる。床：礫を多量に含む2次堆積ローム（黄褐色土）で、細かな起伏があるが傾きは無く堅固である。壁面にも礫が露出していた。ピット：P₁～P₁₁が見出された。P₉は2段に掘り込まれており、貯蔵穴として使用されていたものと思われる。P₂・P₁₁・P₁₀・P₇は位置的に主柱穴とも考えられるが、比較的浅いものもあり柱痕も確認できなかった。覆土：礫を多く含む黄褐色土→黒褐色土→黒色土の順に堆積している。最下層の黄褐色土は特殊なものであるが地山に礫が多量に混入しているために、床を貼ったものなのか或いは住居址の埋没に伴うものなのかは判断できなかった。諸施設：周溝は南西隅～南東隅と東壁中央の2ヶ所に見出された。遺物出土状況：比較的多く、覆土上層から床面にかけては高杯・壺等の土師器が出土した。時期：遺物より本址は古墳時代前期と思われる。

第0042号住居址（第25図）

検出：本址は北東に位置し、西側の半分は調査区域外となる。検出面は現況の地表面から約20cmと非常に浅く、現代の耕作の畝が床面まで掘られていた。炉：主柱穴間に位置する。内部被熱のある62×56×6cmのほぼ円形の地床炉である。床：2次堆積ローム層。礫を多量に含み、露出して平坦ではない。壁：床面にほぼ直に掘り込まれていた。ピット：9個見出され、P₁・P₂・P₉には柱痕がある。P₁は深さが13cmと浅いが位置的にみてP₁・P₂あるいはP₁・P₉が主柱穴と考えられる。覆土：暗褐色土が堆積していた。遺物出土状況：比較的少ない。時期：古墳時代前期のものとなろう。

②奈良・平安時代

第0001号住居址 (第9図)

検出：調査区南端に位置する。本址の南側は調査区域外に入っている。北西隅もほ場整備事業の測量用の杭が設けられていたため調査できなかった。切り合い関係は0002溝・0003溝に貼られている。カマド：西壁中央に壁を若干掘り込んで構築されていた。袖は残っておらず燃焼部は被熱がみられる。おそらく住居廃絶時に破壊したのであろう。床：2次堆積ロームの黄褐色土。平坦・堅固である。西側は礫が混入し、東側は礫が混入していない。礫を取り除く等の整地をした様子はみられない。ピット： $P_1 \sim P_{10}$ があり、床面東側の $P_8 \cdot P_9 \cdot P_2 \cdot P_6 \cdot P_1$ は柱痕が確認された。 $P_8 \cdot P_9$ が支柱穴なので2本支柱建ちであろう。 P_1 は柱痕の形状から住居の中心に向けて斜めに立っていたものだろう。覆土：暗褐色土の単層。自然堆積し、河原石が混入していた。遺物出土状況：少量の須恵器・土師器等が出土した。時期：本址は5期になると考えられる。

第0002号住居址 (第10図)

検出：本址は調査区北側に位置し他の遺構との切り合い関係は無い。カマド：西壁中央にあり、方形をした壁掘り込みカマドである。北側の袖は長い袖石はなく、段を作って掘ってカマドの袖としていた。奥壁は急傾斜で、煙道は確認できなかった。床：堅固な礫を含まない黄褐色土であった。北側は平坦で、南側は起伏が認められた。ピット：比較的多く12個検出されたが、支柱穴はなかった。覆土：自然堆積であり、東側は地山と同じ黄褐色土の堆積がみられた。遺物出土状況：非常に少なかった。時期：5～6期に属するであろう。

第0003号住居址 (第10図)

検出：調査区北側に位置し、本址の西側は調査区域外となる。耕作による攪乱を受けて床面下まで削平されており、また多くの住居址・土坑・ピットに切られている。カマド：カマドの存在は認められなかった。床：北から南に傾斜をもつ、黄褐色土であった。ピット：16個検出した。本址に伴うものとして扱ったが、単独のピットのように本址以外のものも含まれている可能性が高い。覆土：暗褐色土の単層である。遺物出土状況：少なかった。時期：5～6期に相当すると考えられる。

第0005号住居址 (第11図)

検出：本址は中央部南に位置する。0073土・0007住に切られ、0006住を切る。しかし検出時には0007住の覆土が0～5cmと浅く、切り合い関係が判断できなかった。カマド：西壁下中央北寄りに検出されたが残存度が悪く、燃焼部の被熱が認められるのみであった。床：厚さ3cmの黄色→黄褐色の貼床がほぼ全面になされていたが、一部は掘り下げ時にそれとは気付かず掘り抜いてしまった。また北側には焼土の拡がり認められた。全体的に堅固であるが、やや起伏があり北東隅には段差があった。ピット：14個検出された。 $P_2 \cdot P_9 \cdot P_{10} \cdot P_{13}$ あるいは $P_2 \cdot P_6 \cdot P_{10} \cdot P_{11} \cdot P_{12} \cdot P_{13}$ が支柱穴の可能性がある。覆土：暗褐色土である。遺物出土状況：カマド付近と北側から土師器と須恵器が出土している。時期：本址は5期のものとなろう。

第0007号住居址（第11図）

検出：調査区の中央部南に位置している。本址は東側半分程は床面下まで耕作による削平を受け、0005住・0006住を切り、P0011に切られる。0005住との切り合い関係は、本址の覆土が0～5cm浅いため検出時には判断できず、本址の南側のプランは明らかにできなかった。カマド：西壁に壁掘り込みカマドが確認された。しかし残存度が悪く、燃焼部は窪んで被熱・焼土化していた。床面：黄褐色土で堅く、中央がやや浅かった。ピット：P₁～P₃が検出されたが性格は不明で、主柱穴はなかった。覆土：暗褐色土である。遺物出土状況：量的には少なかったが、土師器・須恵器・瓦が出土した。カマドの火床底面とP₃から被熱した平瓦片も出土しているが、カマドの構築材として再利用されていた可能性もある。時期：遺物より本址は6期と思われる。

第0008号住居址（第12図）

検出：調査区の中央東に位置する。本址の南側で0009住を貼る形になっている。カマド：西壁中央を半円形に大きく掘り込んで構築していた。袖全体に芯の材料として礫を埋設している。燃焼部の奥壁は急傾斜に掘られ底部はよく焼けている。本址完掘後にカマドの断ち割りを行ったが底面は8cm下まで焼土化していた。床：調査時にはIV層（灰褐色～黄褐色土）まで掘り下げた時点で床面だと考えられたが、IV層を8cmほど更に掘り下げると黄褐色土の平坦で堅い床面が確認された。この灰褐色～黄褐色土は自然堆積とは考え難い。東壁下中央南寄りの床面には、平坦な面を上にした礫が埋設されていた。ピット：P₁～P₁₈を検出したが、主柱穴にあたるものはなかった。P₁₃からは多量の須恵器・土師器が出土しており貯蔵穴の可能性が考えられる。遺物出土状況：比較的多く土師器の黒色土器杯、須恵器の甕等が出土した。時期：7期に相当すると考えられる。

第0009号住居址（第12図）

検出：本址は中央東に位置し、0008住に北側を貼られる。カマド：西壁中央下に確認したが破壊されていて残存度が悪い。奥壁はほぼ直に掘り込まれ、北側の袖は芯材として礫を立て黄褐色粘土を用いて作られている。床：礫を含まない黄褐色土。北から南へ緩やかな傾斜をもつ。ピット：14個検出された。P₁・P₃・P₄・P₆が四本主柱穴、P₅・P₈は支柱穴と考えられる。諸施設：周溝がほぼ全周している。覆土：暗褐色～黒褐色土、自然堆積だと思われる。遺物出土状況：南西隅の壁際より須恵器の壺片などが出土したが、量的には非常に少なかった。時期：本址は3～4期のものであろう。

第0012号住居址（第14図）

検出：調査区中央南寄りに位置し、東側で軸を同じくして0011住を切っている。床面の深さもほぼ同じである。カマド：西壁下中央やや南寄りで、残存度は良好であったが、煙道は検出できなかった。袖は両袖とも礫を2列に立てて芯材にしてあり、燃焼部には支脚石も残されていた。内部は被熱し、奥壁は急傾斜していた。床：礫を含む黄褐色土で、やや凹凸があり堅固であった。ピット：3個検出されたが、いずれも柱痕は確認できず性格も不明である。覆土：黒褐色土→暗褐色土→褐

色土の順に堆積していた。上層～床面にかけて人為的に投げ込まれていたと思われる多量の礫と、多量の土器がみられた。遺物出土状況：須恵器・土師器・鉄器等が多量出土した。時期：8期に該当するようである。

第0016号住居址（第16図）

検出：中央西寄りにあり、本址の一带は地山に5～20cm大の礫が大量に混入している。カマド：西壁中央に壁を半円形に掘り込んで構築されていた。残存度が悪く、カマドの袖の芯材として利用されたと思われる10cm大の被熱した礫が散乱していた。カマド燃焼部はよく被熱している。床：礫を混入する黄褐色の2次堆積ローム。起伏があり、中央部は浅い。若干礫が露出するが、ある程度取り除いた様子が窺える。ピット：P₁～P₈を検出した。P₂の底面には礫を埋設してある。これを主柱穴の礎石と考えると、柱痕も残らず、深さの点にも問題があるが、P₁・P₇・P₈が位置的に他の主柱穴ではないかと思われる。覆土：検出面より18cmと浅いが褐色土と暗褐色土が堆積していた。遺物出土状況：土師器が中心であったが須恵器も多く見られた。またカマド内より銭1点も出土したが混入品であろう。時期：遺物より本址は6期のものとなろう。

第0017号住居址（第16図）

検出：本址は中央に位置し、0096土坑に南壁東側を切られる。カマド：西壁中央に壁掘りカマドが確認されたが、破壊されており残存度が悪く、燃焼部に僅かに焼土がみられる程度である。床：比較的軟質な礫混入砂質黄褐色土で、部分的に礫が露出しているので凹凸がある。ピット：18個ありP₃・P₄はカマドのある西側の主柱穴と考えられる。10～13cm程の浅い掘り方の中に平石が埋設してあった。平石は上面が水平になり、床面より5cm程度高くなるようになっていた。P₁からは多量の炭化物が認められ、貯蔵穴ではないかと思われる。覆土：褐色～暗褐色土が堆積していた。遺物出土状況：土師器を中心に須恵器もみられたが、量的には少なかった。時期：本址は8期のものと考えられよう。

第0020号住居址（第18図）

検出：調査区の中央やや西寄りにある。カマド：東壁下中央にあるが破壊されており、残存度が悪かった。燃焼部は直径60cm程の範囲が窪んでいる。芯材として利用された石が残り、火床は被熱焼土化していた。床：礫の混入する砂質2次堆積ロームで軟弱であった。中央部は周囲よりも深くなっている。壁：やや傾きをもって掘り込まれる。覆土：黒褐色土と暗褐色土が堆積している。地山に類似するが、礫がほとんど含まれない黄褐色土が、約30cmの幅で壁に沿ってL字形に確認された。遺物出土状況：西壁・北壁下を除く中層～床面にかけて10～40cm大の多量の礫が人為的に投げ込まれていた。礫に混じって土師器・須恵器が出土していた。時期：7～8期に属するであろう。

第0023号住居址（第19図）

検出：調査区の中央北側に位置する。本址全体が0024住をすっぽりと切っている。カマド：東壁中央下に石芯粘土袖カマドが確認されていた。破壊されておらず残存度は良好である。検出面には

板状の河原石があり、両袖に渡されていたものかもしれない。奥壁は直角に掘り込まれている。煙道は認められなかったが、おそらく検出面より上部にあったのであろう。床：2次堆積ロームの黄褐色土であり、平坦・堅固。僅かに北から南へ傾斜をもっていた。ピット：6個ありP₁・P₂・P₃・P₄・P₅は長方形に配置されている。掘り込みが浅く、柱痕が見られないという問題があるが4本主柱建ちであると考えられる。諸施設：周溝は北壁から西壁北側までと西壁南側から南壁の2本が見られ、東西の主軸で線対称となる。カマド正面の西側中央では56cm途切れているが出入り口であろうか。覆土：礫を多量に含む暗褐色～黒褐色土が堆積し、北壁際から西壁際にかけては0020住に類似して、礫を含まない黄褐色土が30cmの幅で帯状に堆積していた。この帯状の覆土が認められた部分では周溝もかなり壁から内側にあるが、何か関係があるのであろうか。遺物出土状況：多量の礫に混ざって多くの土師器・須恵器・鉄器がみられ、南東隅の床面からは杯等が出土した。時期：遺物より5期に該当すると考えられる。

第0029号住居址（第21図）

検出：本址は中央北側に位置する。東側は0028住全体に床面下まで切られ、北西中央寄りでは0001号土師器焼成坑に床面下まで切られる。カマド：0028住の床面下に検出した。奥壁は0028住に壊されていたが、東壁中央やや南寄りを掘り込んで構築した石組みカマドと思われる。燃焼部の窪みは1.8×1.4m程と規模が大きく、火床の北側半分は焼けていた。床：黄褐色砂質土でやや起伏があり、一部は礫が露出していた。壁：西壁が緩やかでその他はほぼ直であった。ピット：0001号土師器焼成坑の底面下で検出されたP₁のみである。覆土：暗褐色土。遺物出土状況：カマド内部から多量の土師器片が出土した。時期：本址は7期のものと考えられる。

第0030号住居址（第22図）

検出：調査区の北部にあり、東側で0039住を切っている。カマド：東壁中央南寄りの壁を半円形に掘り込んでいる。燃焼部はその中に収まる。円礫を芯材として、暗褐色土を用いて袖を構築している。内部（火床）は被熱して支脚石らしい礫が立ち、奥壁は直角に立ち上がっていた。煙道は認められなかった。床：堅固で傾斜・起伏がなく、小礫が多量に含まれる黄褐色土であった。周囲の地山にはφ10cm大の礫が多くみられるが、床面には大きくともφ5cm程の礫しか確認できなかった。大きな礫は抜き取ってあるのではないかと考えられる。壁：南壁が緩やかで他はほぼ直に掘り込まれる。ピット：5個検出された。北西隅・南東隅に配置されているが性格は不明である。覆土：上層の暗褐色土から底面まで河原石を多く含んでいた。遺物出土状況：土師器・須恵器・石器があったが、石器は打製石斧であり混入品であると考えられる。時期：6～7期に属するであろう。

第0033号住居址（第23図）

検出：本址は調査区の北端にあり、他の遺構との切り合い関係は無い。カマド：東壁中央に確認したが破壊されていて袖等は残っていなかった。床面より10cm程浮いた状態で壁際に芯材として利用されただろう礫と、焼土の堆積が見られた。床：2次堆積ロームで、平坦・堅固であった。砂質

で小礫を含んでいるが周囲の状況から、礫を抜いて整地していると考えられる。壁：礫が露出していた。ピット：P₁～P₈まで検出されたが、性格は不明である。覆土：暗褐色土→褐色土の順で堆積しており、自然堆積と思われる。遺物出土状況：床面上に土師器・須恵器の小片がみられた。時期：本址は5期と考えられる。

第0034号住居址（第23図）

検出：調査区北端に位置し、北東部は調査区外になる。カマド：東壁中央下に確認したが残存度が悪く、燃焼部の深い窪みを確認するのみであった。床：小～大礫が露出している黄褐色土の床である。北東部には炭化材を伴った焼土の拡がり認められた。壁：なだらかに掘り込まれ、礫が露出していた。ピット：床面西側に4個検出されたが、性格は不明である。覆土：暗褐色土と黒褐色土であった。遺物出土状況：土師器・須恵器があったが量的には少なかった。時期：6期に相当すると思われる。

第0035号住居址（第24図）

検出：本址は北端にあり、P0021に西壁を切られている。カマド：西壁中央に位置し、壁を丸く掘り込んでいる。残存度が悪く、礫が散乱し袖は残っていない。燃焼部が浅く窪み、火床は被熱していた。床：起伏があり大きな礫はみられず、小礫を含む2次堆積ロームの黄褐色土であった。ピット：P₁～P₁₃が検出された。P₂・P₈・P₁₁には柱痕がみられたが、主柱穴は認められなかった。覆土：カマド部分を除き暗褐色土の単層であった。遺物出土状況：カマド内部とその周辺に土師器・須恵器がある。時期：2期と考えられる。

第0036号住居址（第24図）

検出：本址は調査区の北端に位置し、現代の2本の耕作畝が床面まで破壊している。北壁中央の壁下にはあたかもカマドの様に半円形に掘り込みが見られるが、袖や焼土等はなく、礫が散乱したりとカマドとは断定しかねる。この窪みは床面より15cmほど深くなっている。床：起伏があり、2次堆積ロームの黄褐色砂質土である。礫を多量に含むので、床面からは数cmも露出している。南西隅に焼土塊を多量に含む86×56×6cmを測る茶褐色土のマウンドがあった。ピット：P₁～P₈が検出されたが、主柱穴に該当するものは無い。覆土：黒褐色～暗褐色土である。遺物出土状況：非常に少なく土師器小片が数点出土したのみである。時期：所属時期は推定できない。本址は住居址として扱ったが整穴状遺構とするべきであったかもしれない。

第0039号住居址（第22図）

検出：調査区北部に位置する。西側の $\frac{1}{2}$ は0030住に床面下まで切られており、北壁をP0020に壊されている。カマド：東壁北寄りに半円形の壁掘り込みカマドを検出した。残存度が悪く、支脚・袖等は破壊されている。燃焼部は床面より5cm程浅いところにあり、小礫を含んでいて火床は被熱している。床：僅かに北から南へ傾斜をもつ。2次堆積ローム層の黄褐色土。礫が露出し、堅固。壁：床面にほぼ直に掘り込まれていた。ピット：2個検出されたが主柱穴ではない。覆土：暗褐色

土であった。遺物出土状況：非常に少なく土師器少量と磁石、馬歯が出土した。馬歯（註）は白歯のエナメル質が薄く剥落した細片数点である。時期：本址は遺物より8期に属する。

（註）馬歯については、信州大学西沢寿晃氏に調査と鑑定をしていただいた。

（2）竪穴状遺構

第0002号竪穴状遺構（第26図）

検出：中央西側に位置し、0001竪の8m程南にあり南壁を0014住に貼られている。平面プランはやや不整な隅丸方形（南北3.3m×東西2.5m）を呈し、南壁東側に大きな突出部が付く。覆土：底面より褐色土→茶褐色土→暗褐色土の順で堆積している。壁：北・南・東壁は傾きをもち90～110cm程掘り込まれている。西壁～南西隅にかけては5～40cm大の河原石を使用して、ほぼ垂直の壁を構築している。西壁～南西隅は茶褐色土の埋土が詰め込まれていた。諸施設：南壁東側につく突出部は3段の階段状の構造を有し出入口と考えられ、長さは116cm、幅は132cmを測る。底面：地山と同じ黄褐色2次堆積ロームで、底面に伴うピット・周溝等の施設は検出できなかった。遺物出土状況：縄文土器を中心に土師器・須恵器が認められた。いずれも混入品であろう。時期：中世以降と思われる。

第0001号竪穴状遺構（第26図）

検出：調査区の中央西側にあり、0002竪の8m程北に位置する。他遺構との切り合い関係はない。平面は方形で0002竪に比べて大きな突出部がつくものである。平面プランは0002竪に類似しており、南北2.9m×東西2.8mの規模をもち0002竪と同様に南壁東側に突出部がつく。覆土：底面より黒色土→黒褐色土の順で堆積しており、中央部には10～30cm大の河原石が覆土上層より底面にかけて多量にみられた。壁：緩やかな傾きをもち80cm程掘り込まれている。掘り方：北壁～西壁～南壁西側にかけて検出され、黄褐色土の埋土が行われていた。図化せずに取り上げてしまったが、西側底面上には石積み最下段と思われる河原石が並べられていた。黄褐色土の埋土は石積みのある部分に限ってみられることから、本址には東壁を除く壁面には石積みがあっただろうと思われる。遺物出土状況：土師器の甕や杯があるが、混入品であろう。時期：本址は中世以降に属するであろう。

（3）土坑・ピット（第28～30図）

A地区では土坑179個、ピット730個を検出した。便宜上長径が1m以上のものを土坑、それ未満のものをピットとして扱った。調査期間が限られていたため、これら全てを調査する事はできず、一部の土坑とほとんどのピットは未掘である。

土坑の分布は調査区中央部に集中し、次いで調査区東側（0004溝の西側周辺）に多い。平面形

は円形・方形・楕円形の順に多く、不整形のものも若干認められる。

ピットの分布は調査区南側（0001溝周辺）に最も多くみられ、中央部南寄り（0005住周辺）と調査区東側（0004溝の西側周辺）にも集中している。平面形は円形がそのほとんどを占め、楕円形のものもわずかに検出された。

以下、特徴的な土坑のみ述べてみたい。尚、土坑出土の骨については信州大学西沢寿晃氏に発掘現場での指導～調査・鑑定迄を行っていただいた。

第0176号土坑（第30図）

検出：調査区中央に位置し、0017住に貼られる。規模は東西 134cm×南北 114cmを測り、楕円形を呈する。砂質黄褐色土中に緩やかな傾きをもって掘り込まれている。覆土：底面より黒褐色土→暗褐色土が堆積していた。遺物：黒褐色土中より拳大の礫と共に、土師器片が多量に出土した。時期：本址は8期に属する。

第0088号土坑（第30図）

検出：調査区中央西側に位置し、他遺構との切り合い関係はない。2次堆積の砂質ローム層に検出した。直径約100cmのやや不整な円形を呈する。掘り込みが検出面より7cm程と浅いため明らかではないが、断面は台形を呈する。覆土：暗褐色土が堆積していた。底面：起伏があり、中央が僅かに被熱・焼土化していた。遺物：本址の時期を推定できる遺物はないが、男性的な形態をもつ人頭骨片・上腕骨・小臼歯が被熱した状態で多量に認められた。時期：中世以降と思われる。

第0078号土坑（第28図）

検出：調査区中央南寄りに位置する。地形的には南北に伸びる舌状台地の東端上にあたり、これより東側は谷状の凹みに向かう東斜面となる。楕円形のプランを呈し、東西 230cm×南北 206cmの規模を測る。覆土：黄褐色2次堆積ローム層中に緩やかな傾きをもって掘り込まれ、黒褐色土と褐色土が堆積していた。底面：軟弱で礫が露出していた。遺物：本址に伴う遺物には銭がある。いずれも東側の上層～下層にかけて6枚が出土した（第149図）。時期：遺物よりみて中世以降の墓址と考えられる。本址のように銭が出土した土坑は他に0143土・0144土がある。

第0149号土坑（第30図）

検出：調査区中央北側、地形的には舌状台地の東端上にあたる。規模は南北 104cm、東西 112cm、深さ32cmを測る。平面形は南北に長い隅丸方形を呈し、西側中央南寄りには半円形に大きな突出部がつく。突出部には1つ段があり、先端は検出面からの深さが5cmと浅くなっている。底面：底・壁面は全面が若干被熱するが、特に突出部は顕著に焼土化していた。覆土：褐色土→暗褐色土→黒褐色土の順に堆積している。遺物：下層～底面にかけて焼けた頭骨片・四肢長骨片が出土した。時期：中世以降の火葬墓と考えたい。焼土と共に、焼けた人骨片が出土する土坑はA区では合計6個ある。本址と前述した0088土の他に、0012土・0037土・0063土・0112土である。これらは地形的には舌状台地上にあたり、いずれも調査区中央部周辺にまとまって分布する。

第0175号土坑 (第29図)

検出：調査区西側に位置する。地形的には舌状台地上にあたる。規模は南北 182cm、東西 162cm、深さ35cmを測る。平面形は長方形を呈している。覆土：底面より黒褐色土→暗褐色土が堆積している。底面：中央北寄り底面より10～20cm程浮いて河原石が検出された。中心に最も大きい60cm程の礫を配し、それを囲うように小礫がある。一部に被熱したものが認められた。遺物：内耳鍋片を中心に陶器片も出土した。時期：本址の所属時期は中世以降と考えられる。

(4)土師器焼成坑

第0001号土師器焼成坑 (第28図)

検出：本址は調査区北側中央に位置している。0029住の覆土中に焼土塊を含む落ち込みとして検出され、0029住の床面下迄掘り込まれていた。規模・形状：プランは方形を呈し南北 168cm×東西 164cmの規模をもつ。底面・壁面は全体的に若干被熱していた。底面：部分的に顕著な焼土化がみられ、平坦であった。壁：ほぼ直に掘り込まれていた。覆土：焼土塊を含む褐色～黒褐色土が複雑に堆積していた。下層～底面にかけては10～20cm大の礫が9個みられた。遺物出土状況：土師器の小破片が多量に出土した他、焼けた粘土の塊も確認された。時期：本址は7～8期に属する。

(5)溝

A区では0001～0008溝の合計8本を検出し、土層確認地点のみ掘り下げを実施した。このうち0002・0003・0005・0006・0007号溝は暗渠排水路と考えられる。また本調査地の選定の為に行った重機による試掘トレンチ調査では、A区東端から約15mに北から南へ通過する幅6mの溝を確認している。調査区北方にあるB区の1001溝から続くものと考えて間違いない。

第0001号溝址 (第27図)

検出：調査区北側に北北東～南南西にのびる。長さ約41m、幅0～160cmを測り、南側で0005・0006・0007号溝に横切られる。南端・北端はいずれも削平の為途切れているが、位置的に北側は0002号溝に続くものと考えられた。断面形：断面は幅広のU字形を呈していた。覆土：下層には礫の混入する砂質の黄褐色～灰褐色土が上層には砂粒を混入する黒褐色土が堆積していた。底面のレベルから北→南へ流れていたとわかる。遺物：ほとんど出土しなかった。時期：本址は6～7期に属すると考えられる。

第0004号溝址 (第27図)

検出：調査区東端に検出された。北北東～南南西へ走り、長さ約34m、幅0～150cmを測る。断面形：断面は幅広のV字形を呈していた。覆土：上層には礫を多量に含む砂質の暗褐色土、下層に

は地山である黄褐色土の土粒が多量に混入する砂質の暗褐色土が堆積していた。底面レベルから北→南へ流れていたとわかる。北端・南端とも削平によって途切れており、北端はB区1002溝に、南端は0001溝に続く1本の溝であろう。

第0008号溝址（第27図）

検出：0004溝の西側約3mを並行して検出された。北側は調査区域外となる。長さ約6.4m、幅0～72cmを測る。深さは8cmと非常に浅く、溝の底面を検出したようなものである。覆土：小礫を含む。0001・0004溝と一連のものだろう。

3. 岡田町遺跡B区

(1) 竪穴住居址

本調査区では、古墳時代前期1軒・奈良、平安時代19軒の計20軒を検出している。分布状況では、粗密が明瞭に認められる。主に密集するのは、調査区中央付近である。住居址の規模は、特に大形のもののみみられない。各住居址は1001溝の方向を意識し、計画的に整然と配置されていると考えられる。

①古墳時代

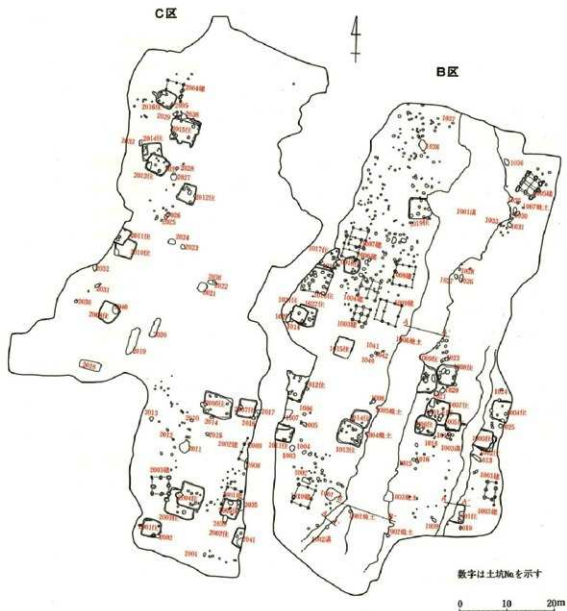
第1019号住居址（第40図）

検出：調査区北側中央部に位置する。本址東側は、第1001号溝に切られる。炉：40cm×32cmを測る地床炉で、床面中央やや東寄りに設けられている。床：地山の二次堆積ロームをそのまま用い、壁際以外は堅くたたきしめられていた。ピット：8個検出されている。位置からみて、P4・P6・P7・P8を主柱穴と想定する。また、P1・P2・P3は補助柱穴と考えられる。P7の覆土には、炭化材が多量に混入していた。覆土：覆土は単層で、黒褐色土に炭化物・焼土が混入している。自然埋没と考えられる。遺物出土状況：床面～覆土にかけて、コナラの炭化材が多量に出土している。これらのことから本址はコナラを建築部材に使用した住居址で、焼失により廃絶されたものと考えられる。土器等の遺物は、少量であった。時期：古墳時代前期と考えられる。

②奈良・平安時代

第1002号住居址（第31図）

検出：調査区東端中央付近に位置する。西側弱以上は、1003住に切られる。カマド：東壁中央部に焼土が認められたが、袖・煙道等は認められなかった。床：地山面を床として使用している。壁は感じられない。ピット：南側で3個検出している。P1からは、ほぼ完形に近い土師器甕が出土している。口縁部は上方に向いており、ピット内に人為的に納められたまま埋没したものと考え



挿図7 岡田町遺跡B・C区遺構配置図

られる。位置的には、カマドの横にあたり貯蔵穴的な性格が考えられよう。柱穴と考えられるピットは、認められなかった。覆土：褐色土の単層である。遺物出土状況：出土量は少ないが、主に床面上からまとまって出土している。時期：遺物の様相や切り合い関係から7期と考えられる。

第1004号住居址（第32図）

検出：調査区東端中央部付近に位置する。本址の約¼が、調査区域外にかかる。カマド：焼土やカマドの施設と考えられるものは、検出されなかった。床：薄い貼床が確認され、平坦で堅緻である。ピット：12個検出された。このうち、柱穴と考えられるのはP₄・P₇・P₁₀・P₁₃である。いずれも壁際や壁中に位置している。覆土：褐色土の単層である。遺物出土状況：覆土下層及び床面に比較的まとまっている。時期：遺物の様相から7期と考えられる。

第1008号住居址（第34図）

検出：調査区中央やや東寄りにおいて、1009住を切って検出された。カマド：東壁やや南よりに位置する。左右両袖と燃焼部が残存している。火床の遺存状況は良好であるが、天井部は崩落している。支脚は残存していない。袖部は、拳大から人頭大の垂円礫を芯材として立てている。左袖の際には、炭化材がまとまって出土している。床：地山を床として利用しており、軟弱である。ピット：7個検出されている。支柱穴は、P₃・P₆と考えられる。P₃は、支柱穴あるいはカマド横の脇柱と考えられる。P₆は、位置的にみて脇柱か。覆土：3層に分かれるが、基本的には同質層である。I・III層には、焼土粒が混入する。II層中には、拳大の礫が多量に投棄されていた。遺物出土状況：覆土上層から下層まで多量の遺物が出土した。I層中には、鉄滓・羽口が多量に混入していた。III層・床面上からは、土器類が多量に出土している。覆土中の遺物は、自然埋没中の投棄と考えられる。時期：床面上の遺物などの様相から、6期と考えられる。

第1012号住居址（第35図）

検出：調査区西端南寄りに位置する。本址西側半分は、調査区域外にのびる。また北側は、試掘坑に壊されている。カマド：検出した範囲内ではみられない。床：拳大の礫が多量に混入する地山面を、床として捉えた。堅さはあまり感じられない。ピット：総数13個検出されている。支柱穴は、P₁・P₂・P₁₂と考えられる。P₃～P₆の4個は、壁内に設置された柱の痕跡と考えられる。諸施設：東壁南側と南壁中央部の一部に、周溝が検出されている。深さ8cmでU字状に掘り込まれ、壁に接している。覆土：褐色土の単層である。覆土が薄いため、埋没状況は不明である。遺物出土状況：出土量は非常に少ない。主として床面上から須恵器・黒色土器Aが出土している。時期：遺物量が少ないため判然としないが、6～7期と考えられる。

第1013号住居址（第36図）

検出：調査区南側中央部において、1014住を切って検出された。カマド：東壁中央部に位置する。煙道はみられない。袖部の石組は、遺存状態が良好である。両袖ともに、平石・角礫を縦方向に立てて設置している。支脚は、遺存していなかった。床：堅緻な面が確認されず、地山面を床として

捉えた。地山は拳大の礫が多量に露出する暗黄褐色土で、起伏に富んでいる。ピット：15個検出されている。主柱穴は、 $P_3 \cdot P_4 \cdot P_{11} \cdot P_{13}$ と考えられる。 P_3 は、位置的にみて脇柱か。覆土：2層に分けられる。I層は暗褐色土、II層は黒褐色土で、いずれも自然埋没を示している。遺物出土状況：覆土中位と床面から少量出土している。時期：出土量が少なく判然としないが、7～8期と考えられる。

第1016号住居址（第38図）

検出：調査区中央西端で検出された。北西部約 $\frac{1}{4}$ が調査区域外に延びる。特に南壁の遺存状況が悪く、検出時に床面が露出していた。カマド：西壁中央部に位置する。袖は残存していない。火床部分には、焼土面が認められる。燃焼部内には、カマド構築材とみられる礫が数点散乱している。床：地山面を床面として捉えた。全体に軟弱で、東半部は小礫が露出している。ピット：24個検出している。柱穴は $P_1 \sim P_9 \cdot P_{11} \cdot P_{21} \cdot P_{23} \cdot P_{24}$ と考えられ、壁際を全周するように設置されている。東壁際には、 $P_1 \cdot P_4 \cdot P_6 \cdot P_8$ と $P_2 \cdot P_5 \cdot P_7 \cdot P_9$ の2つの柱列が確認できる。これらの柱列は東側の柱穴列が新しく、両列とも同配列であるため建て替えの痕跡と考えられる。カマド北側の $P_{12} \sim P_{15}$ は重複が多い。 $P_{13} \cdot P_{15}$ は、床面下35～44cmと特に深い。位置的なことも加味すると、貯蔵穴などの性格が考えられる。覆土：3層に分けられる。III層には、黄色土ブロックが混入する。自然埋没と考えられる。遺物出土状況：主にカマド周辺部から、土器器壁が出土している。時期：6期と考えられる。

(2) 掘立柱建物址

B区の掘立柱建物址の分布は、住居址同様に明瞭な粗密が認められる。特に、中央から北側に密集しており、竪穴住居址との切り合い関係も少ない。さらに、建物址として捉えられなかったが、多数のピット群も検出している。この部分には竪穴住居址がみられず、建物址とピット群で占められるため、計画的に建物址が配置されたとも考えられる。各建物址の平面形状は、側柱式7棟・総柱式3棟と側柱式建物址が多い。規模は、2間×2間と3間×3間の2種類がみられる。3間×3間は、調査区中央部に集中している。特に1009建は、2間×2間に1間分の庇をもつ大形のものである。

第1003号建物址（第41図）

検出：調査区中央やや西よりに位置する。柱配置：2間×2間の総柱の建物址である。柱穴は、規則的にほぼ方形に配列される。柱間寸法は桁行、梁間とも130～160cm程度である。柱穴：掘り方は円形で、規模は長径50～60cmを測る。柱痕は、すべての掘り方に確認された。埋土は柱痕に黒褐色土、周囲には黄色ブロックが混入する暗褐色土が埋め戻されている。時期：遺物が全く出土していないため、不明である。

第1004号建物址 (第42図)

検出：調査区中央やや西よりに位置する。柱配置：2間×2間の総柱の建物址である。柱は規則的に配列され、方形を呈する。柱間寸法は、桁行・梁間とも1.8～2.2m程度である。柱穴：掘り方は円形を基本とするが、方形や楕円形も混在している。柱痕は、すべての掘り方に確認されており、15～24cm程度の太さをもつ。埋土は柱痕に黒褐色土、周囲に黄色ブロックが多量に混入する褐色土を埋め戻している。時期：遺物は土師器小片を得ているだけで、時期の特定が困難である。

第1005号建物址 (第42図)

検出：調査区北東隅に検出された。柱配置：2間×2間の側柱の建物で、建て替えられた痕跡が窺える。古段階は $P_2 \cdot P_4 \cdot P_6 \cdot P_8 \cdot P_{10} \cdot P_{12} \cdot P_{14}$ 、新段階は $P_1 \sim P_3 \cdot P_5 \cdot P_7 \cdot P_9 \cdot P_{11} \cdot P_{13}$ として捉えられる。新旧関係は、 P_3 が P_4 を切ることで、 P_{12} が P_{13} を切ることなどから前述のとおり判断した。規模は、南北にやや長い。柱間寸法は、桁行1.0～2.5m・梁間1.5～2.1mと一定でない。柱穴：掘り方は円形を基本としているが、重複が多い。柱痕は15箇所確認されている。埋土は柱痕が黒褐色土、周囲を黄褐色ブロックが多量に混入する褐色土で埋め戻している。時期：遺物がなく、時期の特定が困難であった。

第1006号建物址 (第43図)

検出：調査区中央西端において、1018住を切って検出された。 $P_{10} \cdot P_{11}$ は、1018住の床面で検出された。柱配置：3間×2間で、入側柱を1本(P_9)持つ。柱間寸法は、桁行120～210cm・梁間120～160cm程度となる。柱穴：掘り方は円形・楕円形を基本としているが、方形もみられる。柱痕は、7個($P_1 \sim P_5 \cdot P_9 \cdot P_{11}$)の掘り方から確認されている。埋土は、柱痕に黒褐色土が落込み、周囲は暗褐色土で埋め戻している。時期：遺物の出土がなく、時期は不明である。

第1007号建物址 (第43図)

検出：調査区中央西寄りに検出された。柱配置：2間×2間の側柱建物址である。ほぼ方形に配列される。柱間寸法は、桁行1.7～2.1m・梁間1.6～1.8mと一定でない。柱穴：掘り方は、円形または楕円形であるが、規模には規格性がない。柱痕は、 $P_2 \cdot P_3$ から確認している。埋土は、柱痕は黒褐色土、周囲は黄褐色ブロックが多量に混入する暗褐色土で埋め戻されている。遺物出土状況：遺物からの時期の特定は困難である。

第1008号建物址 (第44図)

検出：調査区のほぼ中央に位置する。柱配置：3間×3間で、柱はほぼ方形に配列される。柱間寸法は、桁行で1.6m前後、梁間で1.4m前後と僅かに桁行が長い。柱穴：掘り方は円形を基本としている。西側の梁方向の掘り方が、やや大きくなっている。柱痕は、2個の掘り方から確認されている。柱痕は13～22cmと細い。遺物出土状況：遺物からは時期決定が難しい。1016・1018住などと主軸方向が類似しているため、6～7期と考えられる。

第1009号建物址（第45図）

検出：調査区のほぼ中央に位置する。柱配置：2間×2間の主屋に、2間×1間の庇がつく。庇を含めると桁行4.8m・梁間4.8mを測り、方形に柱が配置される。柱穴：円形の掘り方を基本としている。主屋の柱穴は40～64cmを測るが、庇は26～42cmと規模が小さい。柱痕跡は、9個の掘り方から確認された。埋土は、柱痕が黒褐色土、周囲はブロックを含む黄褐色土が埋め戻されている。遺物出土状況：埋土中から、須恵器・土師器片が少量出土している。時期：出土遺物が小片で判然としないが、5～6期と考えられる。

(3)土坑

本調査区からは、計41個の土坑が検出されている。規模は、60cm以下の小形のもものが80%以上を占める。これらの土坑が集中するのは、調査区南側と北側で中央付近は希薄である。特に調査区北側西半部は、小規模なピットとともに密集する。これらの土坑は、柱穴やそれに類似する性格が考えられ、墓址と考えられるものはほとんどない。以下、特徴的な土坑についてのみ記述する。

第1001号土坑（第46図）

検出：調査区南側やや西寄りに単独で検出された。規模・形状：平面形は、不整形を呈する。規模は、長軸330cm・短軸261cmを測る大形のものである。層位：暗褐色土の単層である。遺物出土状況：土師器甕が2点（甕B・C）出土している。

第1031号土坑（第47図）

検出：調査区北東に、単独で検出された。規模・形状：長軸108cm・短軸84cmの不整形を呈する。壁は、北側が直に立ち上がる。層位：3層に分けられる。上層から下層まで焼土粒・焼土塊が多量に混入している。第II層は、4～9cm堆積している炭化物層である。遺物出土状況：第I層からは、0.5～1cm大の鉄滓が多量に出土している。時期：遺物がなく、不明である。所見：鉄滓粒の出土状況などから、鍛冶址に関連した遺構と考えられる。

第1038号土坑（第46図）

検出：調査区北側やや西寄りに検出された。規模・形状：長軸240cm・短軸153cmの不整形円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。底面は、南端が段状に高くなっている。層位：2層に分けたが、基本的には同質の土層である。埋土中には、黄色土ブロックが顕著に観察できるため、人為的な堆積とも考えられる。遺物出土状況：軟質須恵器杯A・黒色土器片・土師器片が出土している。時期：7～8期と考えられる。

(4)土師器焼成坑

第1001号土師器焼成坑 (第46図)

検出：調査区中央やや南東寄りに、1007住を切って検出された。規模・形状：長軸114cm、短軸111cm、深さ3～5cmのやや不整な隅丸方形を呈する。全体に遺存状態が悪く、僅かに残る壁面は緩やかに立ち上がる。層位：暗褐色土の単層である。焼土・炭化物が多量に混入する。底面から壁面にかけては被熱により赤変し、硬化している。遺物出土状況：埋土中から、黒色土器Aの器形でありながら、黒色処理されていない杯・皿が出土している。他遺跡で検出された土師器焼成坑からは、ほとんど遺物が出土していないのに対して、黒色処理を施していない黒色土器Aが出土している。黒色土器の製作技法を考える上で、貴重な資料となるであろう。土師器製の小片が出土している。所見：遺存状態が悪く判然としませんが、岡田町遺跡A区・宮の前遺跡・岡田西裏遺跡(未報告)などの類例から、土師器焼成坑と考えられる。

(5)溝

第1001号溝 (第49～54図)

検出：非常に大形で不整形な流路である。調査所見では、自然流路と考えたが人為的な係わりが強い。また本址縁辺には、性格不明の焼土面が広範囲に点々と存在する。中央付近では、1009住を切る。本址は、規模が大きいため掘り下げ作業は遺物の廃棄が認められるⅠ・Ⅱ層のみ行い、部分的なトレンチ調査により底面を確認した。規模・形状：本址は北側のD区・南側のA区・二反田遺跡でも検出されており、少なくとも総延長約800m以上は延びる。このうち、本調査区では北東から南西にかけて僅かに蛇行しながら流れる104mを検出している。溝の幅は4.2～14.8m、深さは約0.9～1.0mを測る。溝底は不規則な凹凸があり、部分的な深みがある。層位：大きく6層に分かれるが、Ⅰ～Ⅲ層は全域共通にみられる。遺物はⅠ・Ⅱ層に集中するが、特にⅠ層からまとまって出土している。Ⅲ～Ⅵ層は、水流の痕跡が窺える堆積層である。これらの層には、0.5～2.0cm大の小礫・砂粒が多量にみられる。Ⅰ層は、水流による堆積は認められない。遺物出土状況：遺物は、拳大から人頭大の礫と土器・瓦が多量に出土した。大部分の遺物がⅠ層から出土していることから、本址が埋没する段階で人為的に投棄されたと考えられる。土器の出土量は非常に多く、本調査区の住居址約20軒分に相当する量が出土した。また土器の構成は食器類が非常に多く、個体数比では60%を超える。遺物が特に集中するのは、北側の蛇行している部分である(第49・51図)。ここでは、特に東側に礫・土器類が集中している。このことから、主として本址東側から投棄行為が行われたのではないかと考えられる。

焼土面

1001溝の縁辺に9ヶ所みられる。明らかに1001溝を意識しており、D区においても検出されてお

り、広範囲にわたっている。どの焼土面も、1001溝の埋土を切って検出している。埋土上面には被熱底が認められ、掘り方は溝の埋土を掘り込んでいる。このことは、1001溝がある程度埋没した段階で、火が焚かれていることを示している。以下、個別に記述する。

第1001号焼土（第54図）

検出：調査区南側中央部で、1001溝の右岸を切っている。溝の対岸には、1002号焼土が位置する。規模・形状：焼土面は、176～116cmの範囲に広がっている。掘り方は、長径48cm・短径32cm・深さ16cmの楕円形を呈し、溝の縁より外側へ突出する。層位：1層である。1層の下面が、火床である。II層は、溝1001の覆土第I層が被熱により赤変したものである。遺物出土状況：遺物の出土は、全くなかった。所見：1001溝の埋没過程、あるいは埋没後に掘り込まれて火が焚かれたと考えられる。

第1002号焼土（第54図）

検出：調査区南側で中央部で、1001号焼土の対岸に位置する。規模・形状：検出面に径76×42cmの楕円形の被熱面がみられる。本址は、溝の外側に突出する。周囲には、比較的広範囲に焼土が認められる。層位：基本的に堆積層はなく、被熱層のみみられる。I層は、ビット状の穴に暗灰褐色土が埋没したと考えられる。II～IV層は、比較的高い熱をうけており、非常に硬くしまっている。V層は、1001溝の埋土が赤色に被熱したものである。遺物出土状況：遺物は全く出土しなかった。所見：本址の被熱層は、非常に硬く変質しており、比較的高い温度の火が焚かれたと考えられる。また1001溝の埋土を切っているため、溝がある程度埋没してから、火が焚かれたと考えられる。

第1003号焼土（第54図）

検出：調査区南側、1002号焼土の北側約5mに位置する。1001溝を切っている。規模・形状：116×64cmの楕円形の被熱面がみられる。形状は、溝の外側へ突出する。層位：6層に分けられる。火床は、IV層の下面とI層上面の2面みられる。I～III層は、最終的な被熱面である。高温な火を受けて、硬化している。IV層の下面は、古段階の被熱面である。ほとんど硬く変質していないため、さほど高火度というわけではない。遺物出土状況：本址からは、遺物が出土していない。所見：本址は、被熱面が切り合った形で2面検出されている。このことは、ほぼ同じ場所に少なくとも2回火を焚いていることが窺える。

第1004号焼土（第54図）

検出：調査区中央南側で、1001溝の右岸に溝を切って検出された。規模・形状：92×68cmの被熱面がみられる。層位：堆積層はみられず、被熱層のみ。火床面は、焼土塊・炭化物が混入する黒色土である。II・III層は、被熱により硬く変質した層である。比較的高い温度の影響が窺える。遺物出土状況：II層から須恵器片1点、IV層から須恵器杯2点が出土しているが、いずれも被熱層からの出土で本址には伴わない。所見：火床は1面のみ確認される。時期は、1001溝の埋土が被熱していることから溝が埋没した以後と考えられる。

第1005号焼土 (第54図)

検出：調査区中央やや南寄りに位置する。規模・形状：72×80cmの楕円形の被熱面がみられる。周囲には焼土粒が広範囲にみられる。層位：火床は2面観察される。IV層上面とそれを切るI層下面と考えられる。IV層は、被熱の結果黄色に硬化している。I層はピット状に穴が掘られた後に、火が焚かれたと考えられる。遺物出土状況：遺物は、全く出土していない。所見：2面の火床が観察できるため、同位置で2回は火が焚かれたことになる。

第1008号焼土 (第54図)

検出：調査区中央付近に位置する。規模・形状：112×117cmの楕円形の被熱面がみられる。周囲には、焼土粒が広がっている。層位：II層の下面が、火床と考えられる。III・V層は、1001溝の埋土が被熱したものである。遺物出土状況：遺物の出土は全くない。所見：火床は、1面のみみられる。

第1007号焼土 (第54図)

検出：調査区北側東寄りに位置する。溝址との切り合い関係はなく、前述した6個の焼土面とやや立地条件が違う。規模・形状：径40cmの円形の被熱面である。層位：検出面では、掘り込みはみられない。遺物出土状況：遺物は全く出土していない。

第1002号溝 (第48図)

検出：調査区南側で、1001溝から分岐する。本址は、南側の岡田町遺跡A区の0001・0004・0008溝に続く溝と考えられる。規模・形状：本調査区では、約16mを検出している。主軸をほぼ南西方向にとる。幅は、1.5～1.6mを測る。深さは、0.36～0.40mで断面は逆台形を呈する。傾斜は、わずかに南西方向に向かって低くなる。1001溝から逆Y字形に分岐しており、人工的に掘り込まれた水路的な性格が考えられる。層位：大きく5層に分けられ、2時期の流水面を確認した。時期：出土遺物がなく時期は不明であるが、1001溝とほぼ同時期と考えられる。

第1003号溝 (第48図)

検出：調査区南東部で、やや蛇行しながら1001溝とほぼ並行すように延びる。北側は、攪乱などにより十分確認することができなかった。南側で1001住、中央付近で1003住を切る。規模・形状：確認したのは長さ21m、幅1.2～3.1m、掘り込みはU字状で溝幅に比べて深くなっている。層位：8層に分けられる。すべて砂質で小礫が混入し、水流の痕跡が窺える。土層からは、人為的な痕跡が認められないため、自然流路と考えられる。時期：出土遺物が全くないが、切り合い関係から7期以降と考えられる。

4. 岡田町C区

(1) 竪穴住居址

本調査区では、竪穴住居址は計16軒（古墳時代前期1軒・奈良～平安時代15軒）検出されている。

古墳時代前期は、2014住の1軒のみである。この住居址は焼失住居で、多量の炭化材と良好な土器セットが出土している。住居址の分布は、北西隅と南西隅に集中しており、それ以外は全くみられない。

①古墳時代

第2014号住居址（第61図）

検出：調査区北側西端において2013住に貼られて検出された。炉：48×44cmを測る地床炉で、床面中央やや南よりに設けられている。床：地山の二次堆積ロームを用い、堅くたたきしめられている。北西隅には、212×100cmの不整長方形の高まりがある。いわゆる、「ベット状遺構」「屋内高床部」とよばれているものと考えられる。床面からは8～10cmほど高くなっており、北側と中央にピットが設けられている。ピット：12個検出されている。位置からみて、P₉・P₁₂を支柱穴と想定する。高まり部分のP₉からは、土器器杯・壺の良好なセットを得ている。壺はピット内から正位で出土しており、人為的に設置されていたと考えられる。床面南側中央部には8個のピットが集中しているが、柱痕等は確認されていない。覆土：4層に分けられる。基本的には褐色土と暗褐色土の2層で、混入物等により細かく分かれる。断面観察から、自然埋没と考えられる。遺物出土状況：床面～覆土にかけて、コナラの炭化材が多量に出土している。これらの炭化材は、住居址構築材が火災等により焼け落ちたものと推定される。炭化材は、P₉・P₁₂を結んだラインから放射状に出土しており、屋根材がそのまま焼け落ちたと考えられる。土器等の遺物は、焼失住居にしては出土量が少ない。特に北西部の高まり部分とP₉からは、集中して出土している。北西隅では、壺が正位に置かれた状態で出土している。時期：古墳時代前期と考えられる。

②奈良・平安時代

第2001号住居址（第55図）

検出：調査区南西隅に位置する。南東部を2002土坑に切られる。壁の遺存状況が悪く、覆土も薄い。カマド：東壁中央部に位置する。袖部は残存していない。煙道が壁外側へ張り出す。火床部分には、焼土が認められる。床：地山面を床として使用している。堅さは感じられない。ピット：合計5個検出された。P₃はカマドの横に位置し、貯蔵穴的な性格が考えられよう。柱穴と考えられるピットは、認められなかった。覆土：黒褐色土の単層である。遺物出土状況：カマド内、及び南西隅の床面からまとまった量が出土している。時期：遺物の様相から8期と考えられる。

第2003号住居址（第56図）

検出：調査区南側中央付近に位置する。2004住・2003建に切られる。カマド：西壁中央部に位置し、壁を掘り込んで構築している。遺存状況が悪く、袖部は残存していない。燃焼部内には、カマドの構築材と考えられる石が散乱していた。床：地山面を床として捉えた。堅さは感じられない。ピット：3個検出しているが、柱痕はみられない。諸施設：床面北東隅に、僅かに周溝が巡る。深

さは20～25cmを測り、断面はU字状を呈する。覆土：2層に分けられる。1層は暗褐色土、2層は黒褐色土である。自然堆積と考えられる。遺物出土状況：出土量は少ない。主として床面から須恵器盤・横瓶などが出土している。時期：出土量が少なく判然としないが、2～3期と考えられる。

第2004号住居址（第56図）

検出：調査区南側中央付近で、1004住を切って検出された。カマド：東壁中央やや南よりに位置する。壁を掘り込み、やや外側へ突出する。遺存状態は悪く、袖は残存していない。燃焼部には、構築材とみられる10～20cm大の石材が散乱していた。床：貼床等は見られず、地山面を床としている。堅さは感じられない。ピット：9個検出されている。主柱穴は位置的にみてP₁・P₄・P₅で、P₃・P₆は補助柱穴と考えられる。覆土：暗褐色土の単層である。遺物出土状況：埋土中には、拳大から人頭大の礫が混入する。土器は、カマドおよび覆土中より出土した。時期：土器様相などから7期と考えられる。

第2013号住居址（第60図）

検出：調査区北側西寄り2013住を貼り、P2134を切って検出された。カマド：西壁中央やや北よりに位置する。壁をやや掘り込んで構築している。袖は、袖石が3個残るだけで遺存状態は悪い。構築材と考えられる他の石材や支脚は見られず、人為的に破壊されて持ち去られた可能性も考えられる。火床には、焼土が厚く堆積している。床：全面に貼床が認められたが、それほど堅緻でない。覆土：4層に分けられるが、基本的には同質層である。黄色土ブロックの混入が顕著にみられ、人為的に埋め戻された可能性がある。遺物出土状況：覆土下層及び床面に比較的まとまっている。時期：出土遺物の様相から、3期と考えられる。

第2016号住居址（第62図）

検出：調査区北西隅に、2004建を切るように検出した。カマド：西壁中央やや南よりに位置する。遺存状態は、比較的良好である。構築は、粘土と小ぶりの河川礫からなる。火床部には、天井部の構築材と考えられる小礫が散乱していた。火床部中央に支脚抜き取り痕と考えられる小ピットがある。床：貼床は認められないが、全面的に堅緻である。諸施設：床面の南東隅には、僅かに周溝が確認された。深さは10～15cmで、断面はU字状を呈する。層位：2層みられる。埋土中には黄褐色土ブロックが混入しており、人為的な堆積状況を示す。遺物出土状況：覆土下層・床面から主に出土している。床面では、カマド内及び周辺からまとまって出土している。時期：土器様相などから、4期と考えられる。

(2)掘立柱建物址

本調査区では、4棟の建物址を検出している。いずれも、2×2（3）間の側柱式の建物である。分布状況を見ると、住居址の近隣に位置しており住居址とともに意図的に配置された様子が窺える。

第2001号建物址（第63図）

検出：調査区南側東端に位置する。東側は、調査区域外へ延び、2005号住居址に切られる。柱配置：検出した規模は2間×2間の側柱建物址であるが、梁間が東側へ延びる可能性がある。柱間寸法は、桁行1.9～2.0m・梁間1.4～1.6mである。柱穴：掘り方は円形を基本とする。柱痕は、すべての掘り方に確認されており、20～24cm程度の太さをもつ。埋土は柱痕に黒褐色土、周囲に黄色ブロックが多量に混入する黒褐色土を埋め戻している。時期：遺物は土師器小片を得ているだけで、時期の特定が困難である。

第2002号建物址（第63図）

検出：調査区南側東端に位置する。2008号土坑を切り、東側は調査区域外へ延びる。柱配置：3間×1間以上の建物址である。梁間は、東側へ延びる。柱間寸法は、桁行1.4～1.6m・梁間2.0mを測る。柱穴：掘り方は、円形・楕円形・方形と一定しない。柱痕は全ての掘り方にみられ、20～28cmの太さを持つ。埋土は、柱痕に黒褐色土、周囲は黄色土ブロックが混入する黒褐色土か暗褐色土で埋め戻している。時期：遺物が出土していないため、時期は不明である。

第2003号建物址（第64図）

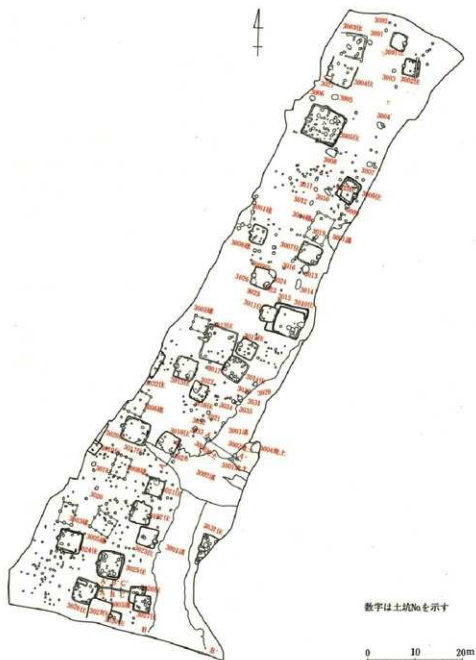
検出：調査区南側やや西よりに、2003住を切って検出した。柱配置：2間×2間の側柱の建物址である。柱は規則的に配列され、方形を呈する。柱間寸法は、桁行1.4～2.1m・梁間1.5～1.8m程度である。柱穴：掘り方は円形・楕円形・方形と一定していない。柱痕は、すべての掘り方に確認されている。P₄・P₆・P₇は、柱痕が2本確認されている。埋土は柱痕に黒褐色土、周囲に黄色土ブロックが多量に混入する黒褐色土を埋め戻している。時期：遺物は土師器小片を得ているだけで、時期の特定が困難である。

第2004号建物址（第64図）

検出：調査区北西隅に位置する。本址南西部は、2016号住に切られる。柱配置：3（2）間×2間の南北に長い建物址であるが、西側の桁行は2間と考えられる。基本的には2間×2間とみられ、東側に何等かの施設が付帯したため柱を1本加えたと考えられる。柱間寸法は、東側桁行が1.1～1.3m、西側は1.8mであり、梁間は1.5～1.8m程度である。柱穴：掘り方は、円形・楕円形・方形のものが混在している。柱痕はすべての柱穴に確認されており、P₄には2本検出している。埋土は、柱痕に黒褐色土、周囲に黄色土ブロックが混入する黒褐色土を埋め戻している。時期：遺物がなく時期の特定は難しいが、2016住に切られることから4期以前と考えられる。

(3)土坑

本調査区からは、計41個の土坑が検出されている。規模は、60cm以上の大形のものが60%以上を占める。これらの大形の土坑は、遺構が希薄になる中央部に多くみられ、60cm以下の小形のものは



挿図8 岡田町遺跡D区遺構配置図

遺構が集中する北西・南側に多くみられる。以下、特徴的な土坑についてのみ記述する。

第2018号土坑（第65図）

検出：調査区中央やや西寄りに単独で検出された。規模・形状：平面形は、不整長方形を呈する。規模は、長軸444cm・短軸186cmを測る大形のものである。層位：黒褐色土の単層である。遺物出土状況：須恵器・土師器の小片が出土している。

第2019号土坑（第65図）

検出：調査区中央やや西寄りに、単独で検出された。主軸を、隣接する2020号土坑とそろえている。規模・形状：規模は、長軸598cm・短軸174cmを測る大形のものである。平面形は、不整長方形を呈する。層位：黒褐色土の単層である。遺物出土状況：須恵器杯・土師器甕片が出土している。

第2020号土坑（第65図）

検出：調査区中央やや西よりに単独で検出された。規模・形状：平面形は、不整長方形を呈する。規模は大形で、長軸420cm・短軸168cmを測る。層位：黒褐色土の単層である。遺物出土状況：須恵器小片が少量出土している。

5. 岡田町遺跡D区

(1) 竪穴住居址

竪穴住居址はD区では33軒見つかっており、時期はすべて奈良・平安時代（2～8期）に属する。これらの住居址を含め3001溝の西に位置する遺構は、覆土層において中島古墳のある尾根筋からの短期間による埋没が見られ、検出作業は困難で掘り下げ時に西側プランが延びるものがあつた。また、1辺が7mを超える大型住居址が3軒あり、そのうち2軒では拡張が行われ礎石建になっていたことが確認されている。以下、代表的な住居址について記述しておく。

第3001号住居址（第66図）

検出：調査区北端中央に検出した。3.16m×3.8m本調査区最小の平面規模である。カマド：東壁中央を掘り込み構築されており、袖部分の残存状況は悪い。床：小礫を含む黄褐色粘質土で南に僅かに傾斜する。ピット：主柱穴は4隅につき、P₁・P₂では暗灰褐色の柱痕を残す。カマド脇のP₃は浅く用途は不明である。遺物出土状況：土器はカマド周辺で床からやや浮いた形で破片が出土している程度で量的には少ない。また、北西隅では床面直上からこもて石と考えられる石が14個まとまって出土している。時期：これらの土器から見て本址は2～3期と考える。

第3003号住居址（第67図）

検出：調査区北西隅に南端を試掘時のトレンチで削平し、西側を重機により削平してしまった。南端部で3004住と切られているものと推定する。床：わずかに小礫を含む黄褐色粘質土で平坦かつ堅固である。ピット：主柱穴は位置・断面形からP₁・P₂・P₃・P₄と想定するが柱痕は判然とし

ない。P₇・P₈・P₉・P₈についても主柱穴の可能性があり、黄褐色土塊を混入する覆土から建替え時に人為的に埋没された様子が窺える。諸施設：残存部分では北・東の壁際に周溝が回る。トレンチ際南側へ延びる溝は建替え前の周溝であろう。主柱穴と合わせ南西方向に拡張が行われたものとする。遺物出土状況・時期：遺物は少なく時期は不明である。

第3004号住居址（第68図）

検出：調査区北西隅に北端を試掘時のトレンチで削平し、3027土坑に切られ北端部で3003住を切っているものと推定する。カマド：西壁中央を掘り込み構築されており、袖部分の残存状況は悪い。火床・奥壁はともによく被熱している。床：わずかに南東隅で小礫を含む黄褐色土で平坦かつ堅固で、北西から南東に向け傾斜をする。ピット：主柱穴は配置からP₁～P₄と考える。P₄にはやや小さめではあるが、平坦な石が置かれている。覆土に黄褐色土塊・焼土粒・炭化物そして栗石と見られる礫を混入する点から礎石建の住居址を想定する。南壁につく壁柱穴P₈・P₉がある。また、P₈は支柱穴であろうか。これらのピットには対応するものが想定されるが確認はできなかった。諸施設：P₁・P₂間の中央やや内よりに61cm×42cmの焼土面が確認された。D区内でも大型住居址を中心に3005住・3010住・3028住と本址に4例確認している。遺物出土状況：カマド内からメノウの垂飾りが出土しているが、混入品であろう。その他には全体的に量は少ない。時期：須恵器の杯、内面黒色の杯などから5～6期と考える。

第3005号住居址（第69・70図）

検出：調査区北側西半に検出し、南東隅に一部攪乱を受ける。7.2m×7.12mと本調査区最大規模を誇る。また、住居址の四隅にピット（P₆₁～P₆₄）が検出された。

掘立期

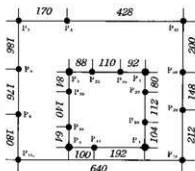
カマド：西壁中央やや南よりを掘り込み、石芯に粘土を用いて袖を構築した様子が窺える。付近の西側は壁高40cm程度と比較的残存状況がよく、奥壁側の高架石を残す。床：小礫を含む黄褐色土で平坦かつ堅固で北西から南東に向け傾斜をする。ピット：主柱穴はP₁～P₄である。覆土から建替え時の人為的埋設の様子が窺える。主柱穴間のP₂₀・P₂₂・P₂₃・P₂₅・P₃₀・P₃₄・P₄₁は支柱穴であろうか。壁際に位置するP₆・P₇・P₈・P₉・P₁₁・P₃₇・P₃₇等は部分的に残る周溝と合わせ壁構築のための遺構と考えられる。

礎石期

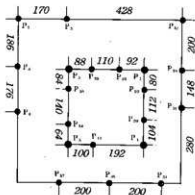
カマド：掘立期から引き続き使用されていたものと推定する。礎石：主柱の礎石は掘立期の主柱穴に栗石を詰め、平坦な面をもつ河原石を埋設している。P₄には持ち去られたのか確認できなかった。壁際には、カマド脇を含め小振りな14個の礎石がある。礎石建に建替を行った時の東壁はこれらの礎石が回る、掘立期と同規模の住居だったと考えられる。ピット：掘立期も含め65個のピットを検出したが性格の判然としないものが多い。張り出した東壁際にP₁₅～P₁₇の6つの柱礎をもつピットがある。床面より高い位置に回る溝があることから壁構築用のピットと考える。東側の小さ

い礎石列から壁際のピット列までは、礎石建に建替えた時（または建替えた後）に何等かの理由で拡張されたのであろう。住居址外側の四隅のピットは当初住居址関連の施設として意識していなかったため十分な調査をしていないが、その位置からは棟の支柱等最終段階の住居址との関連をも考慮する必要がある。諸施設：周溝についてはピットの項で考察した。中央部にある堅い被熱した落ち込みは炉であろうか。また、北壁中央やや西よりに段をもつ張り出しが確認されているが性格は不明である。覆土：暗褐色土の単層であるが、西半を中心に礫の投げ込みが見られた。遺物出土状況：出土量はD区内としては極めて多く、礫の投げ込みの中からと床面直上からの出土割合は半々程度である。所見：本址は2度の建替えを経ているものと考えられる（挿図9）。東方向への拡張が見られ掘立期1の段階ではプランは P_{45} に残る変化点から P_{11} と P_{18} を結ぶラインを想定する。つぎの掘立期2の段階は P_{37} ・ P_{40} ・ P_{51} を結ぶラインを想定する。 P_{51} は柱痕をもち壁柱穴と考えられる。最終の礎石期の段階は支柱穴に栗石を込め、大きな偏平な面をもつ河原石を礎石として埋設しており、壁際も前段階の柱穴とほぼ同位置に礎石が配されている。東壁は何等かの理由でさらに東へ1mあまり延び、床面より高い位置に壁構築のための周溝が回る。壁柱穴は1.20~1.36m間隔で柱痕をもつ P_{12} ~ P_{17} が検出されている。床面より高い位置に回る周溝は部分的にはあるが北・西・南すべての壁際に確認されており、壁柱穴も間隔が広がるが柱痕をもつ点は同様である。周溝、壁柱穴とも東壁は際立って残存状況が良く、拡張にともない新たに構築された様子が窺え、他の壁面は前段階からの存在と考えられる。時期：須恵器を主体とし少量の黒色土器、土師器を伴うことから5期に掘立柱

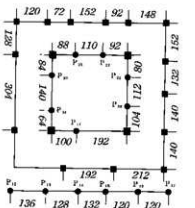
掘立期 1



掘立期 2



礎石期



挿図9 岡田町遺跡D区第3005号住居址柱構造変遷模式図 (cm)

により建築され、6期までに礎石建に建替えられたものと考えられる。

第3006号住居址（第66図）

検出：当初西側のプランは判然としなかったが、調査区北半中央東りに検出し、南西隅に攪乱を受ける。東壁際にコナラの炭化材が多量に見られた。掘り下げ後本址より一回り小さな3033住を貼っていることを遺物から確認した。カマド：東壁中央に僅かに壁を掘り込み石芯を用い袖を構築している。カマド部分が床面より若干低くなり、3033住にカマドが確認できなかったことから、ほぼ同位置にあった3033住のカマドまで同時に掘り下げってしまった可能性がある。床：周辺部は平垣で黄褐色を呈し、西から東に傾斜する。3033住を貼る部分は貼り床の痕跡は見られず、覆土にも明瞭な違いはない。ピット：四隅につくP₁～P₄があるがともに浅く柱痕は確認できない。北西部にP₅～P₆が集中するがこれらも性格は不明である。また、北東隅に炭化材の下から少量の炭化物を含むP₁₀を検出した。灰捨て場の可能性が考えられる。遺物出土状況：遺物は東半分床面に集中してみられた。なお、南東隅覆土中から火打ち金具を得ている。時期：本址の時期は7期と考える。

第3008号住居址（第71図）

検出：調査区中央北の西りに検出した。地形上、調査区全体に西から東への短期間の土の移動が見られるため、当初プランが判然としなかった。カマド：西壁中央に壁を掘り込み石芯に粘土を用い袖を構築した様子が窺える。2つの支脚石がある。火床は小礫を多量に含みよく被熱している。土師器片が敷き詰められるように多量に出土している。床：判然としないが、南西部で遺物がまつまって出土した、礫を多量に含む明黄褐色土の面を床とした。ピット：主柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄とするが柱痕は確認できず、覆土に炭化物が混じる共通点がある。また、P₃・P₄については深さも不十分である。その他については性格不明である。覆土：2層からなる。調査区西側の周囲の地山と類似する小礫と多量の黄褐色土粒を含むII層の堆積は短期間にされたものであろう。遺物出土状況：全長30cm程度の角柱形に加工した焼け石が2点、遺物が集中する南西部から出土している。時期：本址の時期は6期と考える。

第3010号住居址（第72図）

検出：調査区中央東側に3011住に切られる形で検出した。重機により覆土をほとんど削平してしまい検出は困難を極めた。3011住との切り合いは最終的には中央部のトレンチによった。周溝が2重に回ること、礎石が確認されたことから、ある時期に拡張・建替えされた住居址として扱った。

掘立期

カマド：東壁中央部にわずかに掘り込まれて位置する。重機による削平で遺存状況は極めて悪い。被熱した火床と袖の芯石の一部をもってカマドとした。ピット：P₁・P₃は主柱穴とした。特に、P₃の覆土は人為的に埋没した形跡があり、拡張時に主柱を移動し埋めたものであろう。P₂・P₄め、性格は不明であるが掘立期のピットとする。諸施設：内側に回る周溝は掘立期のものであろう。北側部分では2隅とカマド脇に上部の偏平な石が置かれているのを確認したが用途は不明である。

礎石期

カマド：東側はわずかに拡張されたにすぎず、掘立期の位置から大きな変化はない。床：褐色土で北側部分で細かい礫と黄褐色土粒を多量に含む。南半部でやや起伏があり、おおむね北から南に傾斜する。礎石：北側部分に2つの支柱を支えたと思われる礎石があった。周りに穴もなく床面に直接設置している。南側の対応する位置にも存在したであろうが覆土のほとんどを削平してしまったため痕跡等も確認できなかった。また、北側周溝ぞいにおよそ2mの間隔で4つの偏平な河原石が並ぶ。周溝より内側に回る点から支柱を支えたものであろう。ピット：カマド南脇の大きなP₆は炭化物や焼土、灰が多量に含まれており、カマドの灰捨て場であろう。P₄・P₅は遺物を多量に含むが性格は不明である。諸施設：壁を構築するための周溝が確認された。南東隅部分は重機による削平が深く及んだため確認できなかった。西側中央の内側周溝脇床面上に、焼けた石とともに炭化物・焼土を多量に含む部分がある。炉であろうか。覆土：西半中央部分では多量の焼土、炭化物を含む暗褐色土が最下層を構成しており、東側と異なった様相を呈する。遺物出土状況：重機による削平が深く及んだため炉とピットからの出土がほとんどである。時期：本址の時期は5期と考える。

第3013号住居址（第74図）

検出：調査区ほぼ中央に3014住に切られ、3002建に接する形で検出した大型住居址。中央南より部分上層部を試掘時のトレンチで削平してしまっている。カマド：西壁中央部にわずかに掘り込まれ煙道が1.35mほど延びる。袖ははっきりしないが壁面はよく被熱している。床：小礫を含む暗黄褐色土で北から南へ傾斜する。ピット：支柱穴はP₁～P₄とするが柱痕は観察できない。黄褐色土塊を混入する埋土が観察される。カマド脇のP₆・P₇は焼土・炭化物を多量に含むためカマドの灰捨て場とした。その他は性格不明である。諸施設：壁構築のためと考えられる周溝が回る。カマド脇の部分は幅が広がり、遺物が集まる。覆土：多量に黄褐色土塊を混入しており人為的な埋没が想定される。この傾向は下層により強く現れる。遺物出土状況：中央西よりの床面上から提瓶形甕を得ているほかは遺物は少ない。時期：本址は2期と考える。

第3020号住居址（第78図）

検出：調査区中央南よりの西際に3019住に切られ、調査区外に延びる形で検出した。検出時はプランがはっきりせず、掘り上がりのプランよりも東側に暗褐色土の広がりが見られた。床：検出面からの深さはおよそ50cmを測るが堅さもなく判然としない。わずかながら、遺物が出土した面を床とした。覆土：3層に分かれ自然埋没の様相が窺える。第1層に少量の炭化物が混じる。遺物出土状況：遺物は極少量であるが1点完形の須恵器の杯が床面から出土している。所見：本址は住居址として調査したが、前述の須恵器を蓋と見るなら検出地点のほぼ真西に位置する中島古墳の周溝の可能性も考える必要があろう。つまり上層部のわずかな破片を得た部分のみが住居址で、下層部の古墳周溝を貼るという形である。中島古墳の今後の調査を待ちたい。時期：本址の時期は不明である。

第3021号住居址（第79図）

検出：調査区南半中央部に四隅にピットを伴う形で検出した。カマド：北壁中央に掘りこまれ石芯と粘土で袖を構築していたらしく、芯石の抜き取り痕を2か所確認した。中心部に支脚石が残り、火床はよく被熱している。床：明黄褐色土で北から南にわずかに傾斜する。ピット：住居址内には柱穴は確認できず、四隅のピットは $P_9 \sim P_{12}$ のうち P_{10} をのぞき垂直方向の柱痕を確認している。覆土：暗褐色土の単層であるが全体に炭化物を混入する。遺物出土状況：カマドと P_1 から遺物を得ている。時期：カマド内の遺物から7期と考える。

第3028号住居址（第82図）

検出：調査区南端中央に3029住を切る形を想定し調査を行ったが、遺物から判断して3029住に切られることが判明した。カマド：西壁中央にわずかに掘り込み、袖部は石芯と粘土で構築している。内側は総体に良く被熱している。床：黄褐色土で一部礫を含む部分がある。ピット：主柱穴は $P_1 \sim P_4$ で柱痕が確認される。 $P_1 \cdot P_2$ はカマドの両脇の壁面に傾斜を持ち掘り込まれている。D区では特異な柱構造を示している。北西隅の大きな P_7 は中央部分に焼土・炭化物を混入することからカマドの灰捨て場と考えられる。諸施設：北・東に壁際に周溝が回るのを確認したが、用途は不明である。 P_3 脇に焼土面を確認している。中型の住居址の炉は本址1例だけである。遺物出土状況：カマド脇の覆土中から土製の紡錘車を得ている。時期：本址の時期は5期と考える。

第3031号住居址（第83図）

検出：調査区南側3001溝の東に、調査区外に延びる形でおおよそ程度を検出した。カマド：西壁中央に掘り込まれ、内部は構築材と思われる加工痕のある破損した石が土器とともに多量に出土している。火床・奥壁はよく被熱している。床：黄褐色粘質土で北から南へ傾斜を見せる。ピット：全体の約1/3の調査範囲に19個のピットを検出した。この内 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot P_{15}$ に柱痕が観察され、 P_2 を主柱穴、 P_1 （または P_{15} ） $\cdot P_3 \cdot P_4$ を支柱穴と考える。また、 $P_9 \cdot P_{10}$ はカマドの灰捨て場であろう。これら以外にも焼土・炭化物が混入するピットはあるが小規模で性格は不明である。遺物出土状況：検出面から2～3枚が重なった銅板を得ている。北部の覆土中に樹皮が出土している。所見：3001溝の東側に調査できた住居址が本址1軒だけなのでなんともいえないが、ピットの在り方、出土遺物など他の住居址とはかなり異なった様相を呈している。時期：本址の時期は4期と考える。

第3033号住居址（第84図）

検出：3006住掘り下げ後に貼られる形で確認した。南西隅に攪乱を受ける。カマド：カマドの確認はできなかった。東側で3006住と床の高さがほぼ一致するため同位置にカマドが存在した可能性が考えられる。床：黄褐色土で起伏をもち、3006住より若干低く北から南に傾斜する。ピット： $P_9 \sim P_8$ を主柱穴と考える。覆土：黄褐色土塊を多量に混入する様子から人為的な埋没を想定させる。3006住構築のための人為的埋没であろう。遺物出土状況：床面から若干の遺物を得ている。時

期：本址の時期は5～6期と考える。

(2)掘立柱建物址

掘立柱建物址は当初8棟検出されたが、掘り下げの結果3007建を欠番とする7棟に落ち着いた。遺物が出土した遺構は4棟であるが、すべて古代に属する遺構と考えられ、形式もすべて側柱式である。総体的に柱痕の残りがよい。

第3002号建物址 (第84図)

検出：調査区中央西よりに3013住に接する形で検出した。柱配置：2間×2間の側柱式で方形を呈する。規模は3.1 m×3.0 mと小さい。柱穴：掘り方はほとんどが槽円形を呈し、暗褐色土の柱痕が認められる。深さは22～38cmを計り、柱痕周囲の埋土は黄褐色土塊を多量に混入する。遺物出土状況：P₇覆土中から須恵器の糸切りの杯を得ている。時期：本址の時期は5～6期と考える。

第3003号建物址 (第85図)

検出：調査区南西に検出した。柱配置：2間×2間の側柱式でわずかに西側が開く長方形を呈する。柱間は桁行2.1m～2.2m、梁行1.5m～1.6mを計る。柱穴：ほとんどが円形を呈しP₄をのぞき良好な暗褐色の柱痕を確認している。柱痕の深さは最大50cmに及ぶ。P₁・P₂・P₈の埋土には黄褐色土塊の混入を確認した。遺物出土状況：覆土中から須恵器の蓋の破片を得ている。時期：本址の時期は3～4期と考える。

第3004号建物址 (第85図)

検出：調査区北半中央東よりに、3001溝にわずかに切られ3007住に接する形で検出した。柱配置：3間×2間の側柱式で長方形を呈する。柱間は桁行、梁行とも2.0 m前後と一定している。柱穴：東側柱列で柱穴1つを3001溝に切られるようだが、検出した柱穴すべてに黒褐色の柱痕を確認した。検出面からの深さはほとんどが15cm前後と浅く、P₁・P₂・P₄・P₈・P₇・P₆では埋土に黄褐色土塊を混入する。遺物出土状況：検出面から須恵器の糸切りの杯、甕、美濃系の須恵の壺などの破片と、P₂覆土中から高台の低い須恵器の杯片を得ている。時期：本址の時期は6～7期と考える。

第3005号建物址 (第86図)

検出：調査区南側やや西よりに検出した。柱配置：3間×2間の側柱式で長方形を呈する。柱間は原則として桁行1.4m～1.6m、梁行1.9m～2.1mを測る。ただし東側柱列P₄・P₈間を2分する位置にP₃が配置される。柱痕：すべての柱穴で暗褐色土の柱痕を確認している。P₃にも柱痕が確認されていることから建物址に伴う柱穴と考え、この位置に何らかの施設の存在を想像させる。すべての柱穴の埋土には黄褐色土塊が多量に混入する。遺物出土状況：覆土中から須恵器の糸切りの杯片など若干の遺物を得ている。時期：本址の時期は6～7期と考える。

第3008号建物址（第87図）

検出：調査区南半中央西よりにP3001に切られ検出した。柱配置：P₁₁のありかたに問題を残すが、3間×3間の側柱式とする。平面形はやや西側に開く長方形を呈する。東西の柱列南側で柱穴が対応しないが、不規則になる西側に何等かの施設が付随していたのであろうか。柱穴：掘り方はP₁₃をのぞき円形もしくは楕円形を呈する。梁方向の対応するP₂・P₃がやや浅く規模も小さいが、すべての柱穴において暗褐色土の柱痕を確認している。特に4隅のP₁・P₄・P₇・P₁₀は柱穴も深く柱痕の残りもよい。埋土はすべてに黄褐色土塊を混入する。遺物出土状況・時期：遺物の出土は皆無で、本址の時期は不明である。

(3)土坑

D区では土坑は34個検出している。住居址周辺と溝の脇に集中して検出される傾向にある。遺物を得た土坑は7個ある。このうち特徴的なものについてのみ記述しておく。

第3021・3032～3034号土坑（第88図）

検出：調査区中央南よりの3001溝西側に、等間隔に一直線上に並んで検出した。覆土：3021土・3032土は黒褐色土の柱痕をもつ。覆土にも共通して人為的な埋没を示す黄褐色土塊の混入が見られる点から、4個の土坑でひとつのなんらかの遺構を構成したとするほうが相応しいのであろうか。遺物出土状況・時期：遺物の出土はなく時期は不明である。

第3026号土坑（第88図）

検出：3009住に貼られる。3009住掘り下げ後にやや西へ張り出す形で検出した。上面に貼り床は確認されなかった。覆土：黄褐色土粒を多量に含む暗褐色土の単層で3009住に比べ黒味を帯びる。遺物出土状況：覆土中より須恵器の壺などの破片と平瓦を1点得ている。時期：本址の時期は5期と考える。

第3029・3030・3031号土坑（第88図）

検出：3021・3032～3034土の北東に3001溝から20～30cm離れ、同溝と平行に並んで検出した。これらの土坑も間隔は異なるが、覆土に共通する点が見られるので一括して記述する。覆土：暗褐色土であるが、すべて下層は人為的な埋没を示す黄褐色土塊を混入し、上層は炭化物・焼土を混入する。柱痕が存在しないので前述の4土坑とは性格を異にすることが窺える。焼土の混入割合は少ないが、むしろ3003焼土との類似性も指摘できる。遺物出土状況・時期：本址も遺物の出土はなく時期は不明である。

(4)溝

D区において溝は3本検出している。調査区東側を南北に走る3001溝と、これを埋没後東から西に切る形で走る3002溝である。3001溝は二反田遺跡・岡田町遺跡をD区からA区まで縦断する自然流路と考えられる。3003溝は人為的な溝である。以下個別に見ていく。

第3001号溝址 (第89図)

検出：調査区東側に調査区を中央までほぼ南北に貫く形で検出した。調査区南半中央部で3002溝に切られる。幅は6 m内外で、急激に拡大される最下流部で最大12.5mを測る。中央付近でいったん調査区外に延び、一部再び調査区にかかってくる。覆土：検出面からの深さは最大80cmを測り、基本的に2層に分層できる。第I層は黒褐色土で遺物を多量に含む。第II層は礫を多量に含む暗褐色土で遺物はほとんど伴わない。中流部ではこの2層の間に砂層がサンドされる。実際には第I層のみ全面に掘り下げ、底の確認は中央部分と最下流部分の2か所のトレンチで行った。諸施設：両岸に焼土を覆土とする土坑が4個ある。この内3002焼土・3003焼土は対応する位置にある。また、3001焼土はやや離れ3002溝に切られて、3004焼土は3つの複合する焼土坑を包括する形で検出している。これらの焼土坑は3001焼土の存在から、おそらく焼成時期には3001溝とは独立して存在していたものと想定されるが、後に3001溝の幅が拡大された時期があり焼土坑を切ったのであろう。総じてかなりの被熱層と焼土粒の存在から、何らかの目的をもって継続的に火を焚いていた様子が窺える。個々の焼土坑については以下に別記する。本址は調査区内で見ると限り住居址・建物址と切り合うことはほとんどなく、本調査区内で確認した住居址が構成した集落址の発達期には取水源として機能していたものと考えられる。遺物出土状況：覆土第I層からは大甕の破片をはじめ、食器具を中心に須恵器、内面黒色土器が長期にわたって投棄された様子が窺える。第II層からは底部回転ヘラ削りの古い様相の須恵器の杯が見られるが第I層に比べ量は非常に少ない。特異な遺物としては第I層東側で2か所から馬の臼歯が出土している。時期：第II層は2～5期に属する遺物が、第I層は7～8期の遺物が主体を成しており、覆土の様相と考え合わせると本址が流路として機能していたのは2～5期で、7～8期にはすでに埋没の過程にあったことが分かる。

第3001号焼土 (第90図)

検出：3001溝東岸に3002溝に切られる形で検出した。長径は80cmで3002溝に切れ、短径は75cmを測る。覆土：検出面からの深さは20cmと浅く、緩やかな掘方で3層に分層できる。上層部に暗褐色土・黒褐色土の埋土を見せるが、第III層の焼土からは一度の焼成痕しか観察できなかった。遺物出土状況・時期：覆土中からわずかな遺物を得ているが時期は特定できない。

第3002号焼土 (第90図)

検出：3001焼土の北側に3001溝・P3013に両端を切られる形で検出した。短径は95cmを測る。覆土：検出面からの深さは15cmと浅い。緩やかな傾斜をもつ掘方で、3層に分層できる。中央部に黒色土・灰褐色土の埋土を見せ、大部分を占める第III層は焼土である。3001焼土同様焼成痕は一度し

か観察できなかった。遺物出土状況・時期：遺物は皆無であり時期は特定できない。

第3003号焼土（第90図）

検出：3001溝の西岸に3002焼土と対応する位置にわずかに3001溝に切られて検出した。規模は長径105cm、短径90cmを測る。覆土：検出面からの深さは40cm、3001溝に切られるのは上層部15cm程度である。複雑に混じり合う覆土から何度も掘り返された様子がうかがえる。上層中央部に焼土が集積するが、3001焼土・3002焼土とは様相を異にし、よく被熱した層はわずかである。遺物出土状況・時期：覆土中からわずかな遺物を得ているが時期は特定できない。

第3004号焼土（第90図）

検出：3001溝の東側9001焼土・3002焼土の北に広範囲にわたって焼土が点在し、東側が調査区外に延びる。径2mを越える規模で広がるものと想定する。覆土：検出面からの深さ15cm内外で地山と近似する覆土の浅い窪みが広がる中に2か所深く（50cm程度）落ち込む坑がある。これらの深い落ち込みの覆土は暗褐色土で上層部分に被熱による焼土層がのる。この深い部分のみが遺構となる可能性もあり、仮にそうだとすればこれらの上層部の状況は3003焼土と似た様子にも見える。遺物出土状況・時期：覆土中からナゲ調整の須恵器の杯、内面黒色土器などを得ており、本址の時期は6～7期と考えられる。

第3002号溝址（第89図）

検出：東側調査区内から流れ込み、3018住・3028土を切り3017住に流れ込む形で自然消滅している。覆土：検出面からの深さは総体に浅く、中央部分に5cm大の礫を混入し周辺に砂が堆積している。住居廃絶後に形成された氾濫原の末端部と解釈したい。遺物出土状況・時期：遺物は皆無であり時期は特定できない。

第3003号溝址（第89図）

検出：3026住・3028住間に幅25～30cm、長さ6.7mで検出した。覆土：検出面からの深さ20cmほどの方形の断面をもつ。覆土は暗褐色土であるが黄褐色土塊が多量に混入することから人為的なもので一時期に埋没した様子が窺える。埋設物の痕跡等は確認できなかったため性格は不明である。遺物出土状況・時期：本址も遺物は皆無であり時期は特定できない。

第2表 二反田・岡田町遺跡住居址一覧表

二反田遺跡

遺構 No.	平面形 No.	主軸方向	規		積		カマド			築 設		時 期	
			主軸×垂直軸m	床面積㎡	深さm	位置	構造	その他	柱穴数	柱間隔(m)	その他		
1	1	隅方	N-11°-W	5.36×3.40	23.71	0.26	住居中央やや西寄り	地床伊		4	2.32~2.48	2.40~2.52	古墳時代前期
2	2	隅方	N-13°-E	3.32×3.60	19.00	0.08		不明					古墳時代前期
3	3	隅方	N-83°-E	4.06×4.32	18.04	0.20	住居中央西寄り	地床伊					古墳時代前期
4	2		N-11°-E	×3.04		0.14	住居中央やや西寄り	地床伊					古墳時代前期
5	4	隅方	N-14°-W	4.12×4.40	15.63	0.24		不明					古墳時代前期
7	4	隅方	N-88°-W	×5.60		0.84	住居中央西寄り	地床伊		2	2.12		古墳時代前期
8	5	隅長	N-89°-W	5.6×5.2	23.62	0.22	西壁南側	壁内側	カマド	2	1.80		8

岡田町道路A区

区画 No.	平面形状	主軸方向	幅		積	サマ			構築		時期	
			主軸×垂直軸(m)	断面(m ²)		深さ(m)	位区	構築	その他	柱穴数		柱間隔(m)
0001 9	隅方	N-77-W	6.76×		0.22	西壁中央	不明		2×3	2.88	1.52~2.20	5
0002 10	隅方	N-78-W	3.96×3.96	14.32	0.16	西壁中央	壁趾込	有段				5~6
0003 10					0.04		不明					5~6
0004 11			×5.48		0.16		不明					5
0005 11	隅長	N-83-W	4.16×5.44	19.50	0.30	西壁中央北寄り	不明					5
0006 11					0.02		不明					不明
0007 11		N-77-W			0.10	西壁中央	壁趾込	瓦の継ぎ出し				6
0008 12	隅方	N-75-W	5.40×4.24	16.80	0.20	西壁中央	壁趾込					7
0009 12	隅長	N-76-W	5.60×4.96	(26.00)	0.18	西壁中央	壁内側		4	2.88~2.96	3.20~3.28	3~4
0010 13	隅方	N-16-E	4.66×5.00	(23.00)	0.06		不明					6~7
0011 14		N-84-W	4.12×		0.38	北壁中央	壁趾込					7
0012 14	隅長	N-4-E	3.56×4.08	10.06	0.40	西壁中央やや南寄り	壁内側	支脚石				8
0013 15		N-12-E	×4.04		0.42		不明					5~6
0014 15		N-13-E	5.20×		0.24		不明		2	2.8		3~4
0015 15		N-105-E	×4.64		0.32	東壁やや北寄り	壁内側					5
0016 16	隅方	N-81-W	3.36×3.52	10.66	0.18	西壁中央	壁趾込		4	1.56~1.60	2.40~2.76	6
0017 16	隅方	N-84-E	4.52×4.28	17.44	0.18	西壁中央	壁趾込		2	1.40		8
0018 17	隅方	N-80-W	4.36×4.04	16.36	0.40	西壁中央	壁趾込					5
0019 17	隅方	N-90-E	3.40×3.28	9.34	0.12	東壁中央	壁趾込		4	2.16~2.32		5~6
0020 18	隅方	N-113-E	3.76×3.60	10.26	0.44	東壁中央	壁内側					7~8
0021 18	隅長	N-0	3.08×3.40	8.68	0.18		不明					7
0022 18	隅長	N-74-W	5.24×5.80	27.33	0.26	西壁中央	壁趾込			2.08~2.16	2.88~3.00	3

測 点 No.	座 標 No.	平 面 座 標	主 軸 方 向	積 積		傾 斜 深さ(m)	カ マ ヲ			測 量 趣 意		時 期	
				主軸×垂直軸(m)	積積 [㎡]		位置	傾斜	柱穴数	柱間間隔(m)	その他		
0023	19	西 長	N-110°-E	4.24×4.76	16.62	0.34	東壁中央	壁内側	不明	4	2.08~2.40	2.95~3.40	5
0024	19	西 長	N-16°-E	5.24×4.84	23.90	0.68			不明				不明
0025	19	西 方	N-14°-E	5.00×4.92	21.90	0.16			不明				6
0026	20	西 方	N-4°-E	5.76×5.52	30.00	0.19			不明				7
0027	20	西 長	N-100°-E	3.56×4.32	12.22	0.36	東壁中央や南寄り	壁内側	不明				8
0028	21	西 方	N-104°-E	4.32×4.40	15.87	0.40	東壁中央	壁内側	不明				8
0029	21	西 方	N-107°-E	6.48×6.20	33.00	0.30	東壁中央や南寄り	不明	不明				7
0030	22	西 長	N-109°-E	3.68×4.72	14.58	0.28	東壁中央南寄り	壁内側	不明				6~7
0031	22	西 長	N-89°-E	3.68×3.12	10.30	0.68	東壁中央	壁内側	不明				7
0032	23	西 方	N-172°-E	5.36×4.96	20.78	0.26	住戸中央南寄り	不明	不明				5
0033	23	西 方	N-107°-E	4.00×4.06	12.67	0.26	東壁中央	不明	不明				6
0034	23	西 方	N-107°-E	3.20×3.32	6.00	0.20	東壁中央	不明	不明				2
0035	24	西 方	N-85°-W	3.40×3.36	10.38	0.16	西壁中央	壁内側	不明				不明
0036	24	西 方	N-76°-W	3.80×3.68	12.98	0.68	西壁中央や南寄り	不明	不明				不明
0037	24		N-20°-E	×4.24		0.14		不明	不明				8
0039	22	西 方	N-116°-E	4.20×3.68	(15.06)	0.18	東壁中央北寄り	壁内側	不明				6~7
0040	25					0.24	西壁	不明	不明				4~5
0041	25		N-24°-E			0.32		不明	不明				不明
0042	25		N-108°-E	×7.36		0.20	住戸中央東南寄り	不明	不明				古墳時代前期

岡田町遺跡白区

遺跡 No	座標 No	方位	土軸方向	規模		横 深さm	位置	構造		柱穴数	柱間距離 (m)	その他	時期
				主軸×高さ(m)	東西(m)			構築	その他				
1001	31	隅方	N-96°E	4.00	0.20	西壁中央	壁内堀						5~6
1002	31	隅方	N-108°E	3.20×3.40	0.10	東壁中央	壁内側					P, 貯蔵穴?	7
1003	31	隅方	N-105°E	3.30×3.44	0.32	東壁中央	壁縁込						6
1004	32	隅方	N-12°E	4.20×	0.16		不明			1+6	1.60~1.88	壁柱穴	7
1005	32	隅方	N-92°E	3.20×3.60	0.24	東壁中央やや南寄り	壁内側	粘土、支那産磁瓦				溝溝	2
1006	33	隅方	N-79°W	4.40×4.08	0.24	西壁中央やや南寄り	壁内側			2	2.56		8
1007	33	隅方	N-76°W	5.00×5.20	0.24	西壁中央	不明			3	2.20~2.28		2
1008	34	隅方	N-89°W	4.20×4.28	0.36	西壁中央やや南寄り	壁内側			2	2.44		6
1009	34	隅方	N-16°E	6.20×			不明			2	4.16		7~8
1011	35	隅方	N-73°W	×3.32	0.36	西壁中央	不明			3	1.20	壁柱穴	8
1012	35	隅方	N-19°E	6.20×			不明			2+4	4.02	1.00~1.62	壁柱穴、周溝
1013	36	隅方	N-108°E	5.00×5.00	0.31	東壁中央	壁内側			2+2	1.04~2.20	3.20	6~7
1014	36	隅方	N-107°E	4.00×3.60	0.24	東壁中央	不明						7~8
1015	37	隅方	N-71°W	3.60×4.12	0.10	西壁中央やや南寄り	壁縁込						8~9
1016	37	隅方	N-75°W	5.56×5.44	0.28	西壁中央	壁内側			9	1.32~1.68	1.20~1.80	礎て群え
1017	38	隅方	N-17°E	4.44×	0.36		不明			2	4.32	周溝	3~4
1018	39	隅方	N-16°E	3.44×3.56	0.24		不明			2	2.68		7
1019	40	隅方	N-90°E	×4.52	0.12	住居中央やや南寄り	炉			4	2.60~2.92	3.72	古溝時代遺跡
1021	39	隅方	N-68°W	3.28×3.28	0.36	西壁中央	壁縁込						6~7
1022	39	隅方	N-18°E	4.00×4.24	0.16		不明			4	1.74~1.96	1.80~1.92	不明

岡田町遺跡C区

遺構 No.	平面形	主軸方向	規模		積		カマド			溝 基 礎		時期	
			主軸×垂直軸m	坪数㎡	高さm	位置	構築	その造	柱穴数	柱間距離 (m)	その他		
2001 55	隅方	N-74°W	3.88×3.89	12.27	0.10	西壁中央	壁内側					8	
2002 55		N-22°E	4.20×		0.26		壁内側					2	
2003 56	隅長	N-71°W	6.20×5.56	(31.30)	0.20	西壁中央やや南寄り	壁跡凸		1		周溝	2~3	
2004 56	隅方	N 77°W	5.00×5.04	21.29	0.32	西壁中央やや南寄り	壁跡凸			2.10~2.22		7	
2005 57	隅方	N-19°E	3.84×3.69	12.51	0.22		不明		3			5	
2006 58	隅長	N-77°W	6.04×4.68	23.47	0.28	西壁中央やや南寄り	壁内側			2.04~3.28	3.84~4.28	7	
2007 57	隅方	N-79°W	3.56×3.72	10.86	0.38	西壁中央	壁内側		4			5~6	
2008 59	隅長	N-30°E	4.44×4.00	13.86	0.15		不明					不明	
2010 59	隅方	N-71°W	4.16×4.08	(15.00)	0.18		壁内側					4~5	
2011 59		N-31°E	3.89×		0.10		壁内側			2.94		8	
2012 60	長方形	N 112°E	3.48×4.08	12.12	0.16	東壁中央	壁内側		2			7~8	
2013 60	隅長	N-59°W	4.52×3.92	14.66	0.36	西壁中央やや北寄り	壁内側	右側部に石壁凸		1.76	2.08	周溝	
2014 61	隅長	N-175°E	3.48×4.24	12.85	0.34	住居中央南寄り	一	伊	3		ベッド状遺構	古墳時代前期	
2015 62	不整形	N-71°W	6.20×5.84	24.26	0.08		不明			2.88	3.42	周溝	不明
2015 62	隅長	N-61°W	3.56×3.36	11.08	0.44	西壁中央	壁内側	丸型抜き取付痕	3		周溝	周溝	
2017 62		N-79°W	5.84×		0.08		不明			5.22	周溝	周溝	不明

岡田町道線D区

道幅 No	平面形	主軸方向	横		幅	構造	カマド		溝		時期	
			主軸×垂直軸m	深さm			位置	構造	その他	柱次数		柱間距離(m)
3001	隅方	N 74°-E	3.16×3.28	8.95	0.14	東壁中央や北壁少	壁筋込		4	2.30~2.44	2.68~2.80	2~3
3002	隅方	N-22°-W	3.44×3.32	9.99	0.20	西壁中央	壁筋込	支脚石	6	3.00~3.15	2.96~3.20	2~3
3003	67	N-71°-E			0.24				4	2.80	2.80~3.00	5~6
3004	68	N-77°-W	5.68×		0.20	西壁中央	壁筋込		4+	2.92~3.08	2.88~3.00	5
3005	69	隅長	7.72×7.12	47.17		西壁中央	壁筋込	流石	4	3.24~3.60	4.36~4.56	7
3006	66	隅長	4.12×5.00	18.87	0.12		壁筋込		4			7
3007	71	隅方	4.44×4.36	15.77	0.40	東壁中央	壁筋込	支脚石	4	1.20~1.32	1.56~1.92	6
3008	71	隅長	3.32×3.92	10.87	0.18	西壁中央	壁筋込	支脚石2つ	4			6
3009	72	隅長	4.68×4.04	16.66	0.18	西壁中央	壁筋込		2	2.72		6~7
3010	72	隅方	7.94×6.76	(47.00)	0.10	東壁中央	壁内側		2		壁筋、壁石筋、川筋、伊	5
3011	73	隅方	3.36×3.40	9.41	0.22	西壁中央	壁筋込		2	1.76		7
3012	73	隅方	3.96×3.76	12.57	0.20	西壁中央	壁筋込		2			5
3013	74	隅長	6.72×7.52	(46.00)	0.40	西壁中央	壁内側	筋道	4	3.16~3.32	4.08	2
3014	75	隅方	4.72×4.76	19.28	0.24	西壁中央	壁筋込		4	2.00~2.12	2.52	3
3015	76	隅方	4.52×4.68	17.93	0.34	西壁中央	壁筋込		2+	1.96	4.32	5
3016	75	隅方	3.68×3.52	11.13	0.18							6
3017	77	隅長	5.56×5.12	24.50	0.32	西壁中央	壁筋込		4	2.48~2.80	2.64~2.72	3~4
3018	78	隅方	4.40×4.12	15.54	0.12	西壁中央	壁内側		4	1.92~2.08	2.00~2.40	3
3019	78		2.80×		0.16				3	1.32		3~4
3020	78		5.00×		0.64							右側の代前期

遺構 No.	平面形	主軸方向	規模		カマド			施設		時期		
			手廻×深×幅m	床面積㎡	深3m	位置	構造	柱の数	柱間隔(m)		その他	
3021	隅方	N-20°-E	3.66×3.56	11.51	0.16	北壁中央	壁組込	4	3.44~3.52	3.60~4.00	区役所	7
3022	隅方	N-111°-E	4.40×4.40	17.61	0.24	東壁中央	壁組込	3+2	1.84~2.00	1.32		6
3023	隅方	N-115°-E	4.00×4.12	15.47	0.18	東壁中央や北寄り	壁組込					4
3024	隅方	N-73°-W	5.06×4.80	22.21	0.26	西壁中央	壁組込	4	2.32~2.64	5.00	周溝	2
3025	隅方	N-77°-W	5.52×5.68	28.16	0.10	西壁中央	壁組込	4	2.72~2.80	3.12~3.20		3
3026	隅長	N-85°-E	3.20×3.64	(11.00)	0.24	東壁中央	壁内積					不明
3027	隅方	N-97°-E	3.46×3.62	10.96	0.24	東壁中央や北寄り	壁組込					5
3028	隅方	N-70°-W	4.96×5.04	21.59	0.26	西壁中央	壁組込	2	2.52		周溝、戸、灰階溝	2~4
3029	隅方	N-107°-E	4.76×4.76	(22.00)	0.20	東壁中央	壁組込					5
3030		N-17°-E	×3.68		0.20			2	2.84		周溝	不明
3031		N-70°-W	×6.80		0.24	西壁中央	壁組込					4
3032		N-33°-E	5.76×		0.22							7
3033	隅長	N-125°-E	3.36×3.60	12.54	0.24	東壁中央						5~6

第3表 二反田・岡田町遺跡建物址一覧表

二反田遺跡

No.	岡田 No.	平面形 柱記号	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模 (cm)			柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見	時期	
						No.	長径	短径					深さ
1	6	長方形	N-1°-W	5×4(3)間 8.7×4.6	桁 1.2~2.0 梁 1.0~1.8	1	32	30	18	円形	柱痕		不明
						2	42	38	32	円形	柱痕		
						3	28	26	10	円形	柱痕		
						4	72	48	18	長方形			
						5	48	44	28	円形			
						6	52	48	40	円形	柱痕		
						7	30	24	12	楕円形			
						8	50	48	34	円形	柱痕		
						9	40	38	12	円形			
						10	62	56	26	楕円形			
						11	48	44	30	円形	柱痕		
						12	28	26	14	円形	柱痕		
						13	32	30	16	円形	柱痕		
						14	28	24	20	円形	柱痕		
						15	50	48	30	円形	柱痕		
						16	80	48	20	不整形	柱痕		
						17	64	54	28	楕円形	柱痕		
						18	28	26	8	円形	柱痕		
						19	66	58	36	楕円形	柱痕		
						20	64	48	36	楕円形	柱痕		

岡田町遺跡B区

No.	岡田 No.	平面形 柱記号	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模 (cm)			柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見	時期	
						No.	長径	短径					深さ
1001	41	側柱式	N-9°-E	2間× 3.4×	桁 1.6~1.8 梁 1.6~1.8	1	44	44	8	円形		区域外にかかる	不明
						2	72	68	12	円形	柱痕		
						3	58	56	20	円形	柱痕		
						4	76	68	12	不整形円形	柱痕		
						5	62	56	12	楕円形	柱痕		
1002	41	側柱式	N-9°-E	2間× 3.6×	桁 1.6~1.8	1	64	60	8	円形		区域外にかかる	不明
						2	64	46	8	楕円形	柱痕		
						3	54	50	8	円形	柱痕		
1003	41	正方形	N 23°-E	2間×2間 3.1×3.1	桁 1.4~1.6 梁 1.3~1.6	1	48	42	36	円形	柱痕		4~5
						2	60	60	42	円形	柱痕		
						3	52	52	36	方形	柱痕		
						4	56	56	30	円形	柱痕		
						5	64	62	32	円形	柱痕		
						6	56	48	24	方形	柱痕		
						7	62	52	30	不整形円形	柱痕		
						8	60	60	28	円形	柱痕		
						9	60	52	20	楕円形	柱痕		
1004	42	正方形	N-17.5°-E	2間×2間 4.2×3.9	桁 1.8~2.2 梁 1.8~2.1	1	44	42	24	方形	柱痕		不明
						2	50	48	28	円形	柱痕		
						3	44	44	44	円形	柱痕		
						4	50	40	34	楕円形	柱痕		
						5	42	38	22	円形	柱痕		
						6	44	40	28	方形	柱痕		
						7	48	36	28	楕円形	柱痕		
						8	56	42	12	楕円形	柱痕		
						9	44	38	18	楕円形	柱痕		
						10	36	32	7	円形			
						11	48	36	18	楕円形	柱痕		
1005	42	長方形	N 34°-E	2間×2間 4.6×3.8	桁 1.0~2.5 梁 1.5~2.1	1	60	56	24	円形	柱痕	建て替え	不明
						2	96	72	36	楕円形	柱痕		
						3	60	56	32	円形	柱痕		
						4	126	72	32	楕円形	柱痕		
						5	72	68	34	楕円形	柱痕		

No	図 No	平面形 柱配り	主軸方向	規 模 (m)	柱 間 寸 法 (m)	柱穴規模 (cm)			柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見	時期	
						No	高さ	深さ					
1065	42	長方形	N-34'-E	2間×2間 4.6×3.8	桁 1.0~2.5 梁 1.5~2.1	6	86	64	28	楕円形	柱痕	建て替え	不明
						7	68	60	28	楕円形	柱痕		
						8	84	76	36	楕円形	柱痕		
						9	102	64	32	楕円形	柱痕		
						10	64	76	48	楕円形	柱痕		
						11	52	80	30	楕円形	柱痕		
						12	78	52	44	楕円形	柱痕		
						13	00	72	24	方形	柱痕		
						14	92	68	70	楕円形	柱痕		
						15	44	36	31	楕円形	柱痕		
						1	56	56	26	円形			
						2	46	32	24	楕円形			
						3	68	60	40	方形			
						4	50	46	24	円形	柱痕		
						5	38	36	26	円形			
1066	43	方 形	N-15'-E	2間×2間 3.3×3.0 庇 3.3×1.5	桁 1.2~2.1 梁 1.2~1.6 柱間 1.3~2.0	6	36	28	8	方形		1018柱に切られる P ₀ は入側柱	5~6
						7	44	44	20	円形			
						8	48	46	32	円形			
						9	44	42	22	方形			
						10	22	20	8	方形			
						11	40	34	28	方形	柱痕		
						12	30	24	4	楕円形	柱痕		
						1	48	38	28	楕円形			
						2	44	40	20	円形			
						3	50	50	32	円形			
						4	36	32	14	円形			
						5	58	46	28	不整形			
6	80	38	24	楕円形									
7	84	64	32	楕円形									
8	48	38	30	楕円形									
1067	43	長方形	N-14'-E	2間×2間 3.8×3.4	桁 1.7~2.0 梁 1.6~1.8	1	38	36	24	円形	柱痕	P1127に切られる	4~5
						2	44	40	20	円形			
						3	50	50	32	円形			
						4	36	32	14	円形			
						5	58	46	28	不整形			
						6	80	38	24	楕円形			
						7	84	64	32	楕円形			
						8	48	38	30	楕円形			
						1	38	36	24	円形	柱痕		
						2	32	28	8	円形			
						3	32	32	14	方形			
						4	50	46	34	円形			
5	42	38	22	円形									
6	44	32	26	楕円形									
7	60	44	26	楕円形									
8	40	34	10	楕円形									
9	44	42	24	円形									
10	28	26	6	円形									
11	36	36	6	円形									
12	32	30	6	円形	柱痕								
1068	44	長方形	N-9'-E	3間×3間 4.5×4.1	桁 1.3~1.6 梁 1.2~1.4	1	60	54	28	楕円形	柱痕		不明
						2	44	42	20	円形	柱痕		
						3	48	44	18	楕円形	柱痕		
						4	44	44	28	円形	柱痕		
						5	64	52	44	方形	柱痕		
						6	44	46	36	円形	柱痕		
						7	40	34	12	楕円形	柱痕		
						8	48	46	16	円形	柱痕		
						9	42	34	20	楕円形	柱痕		
						10	26	24	8	円形			
						11	30	28	12	円形			
						1	52	50	30	円形			
1069	45	長方形	N-75'-W	2間×2間 4.8×3.3 庇 4.4×1.5	桁 2.2~2.6 梁 1.5~1.8 柱間 1.8~2.5	1	60	54	28	楕円形	柱痕	庇有り	不明
						2	44	42	20	円形	柱痕		
						3	48	44	18	楕円形	柱痕		
						4	44	44	28	円形	柱痕		
						5	64	52	44	方形	柱痕		
						6	44	46	36	円形	柱痕		
						7	40	34	12	楕円形	柱痕		
						8	48	46	16	円形	柱痕		
						9	42	34	20	楕円形	柱痕		
						10	26	24	8	円形			
						11	30	28	12	円形			
						1	52	50	30	円形			
1070	44	方 形	N-21'-E	2×2(1)間 3.7×4.0	桁 2.0~4.0 梁 1.8~2.0	1	48	42	4	円形			不明
						2	48	42	4	円形			
						3	60	52	24	楕円形			
						4	48	46	32	方形			
						5	58	52	20	円形			
						6	56	50	24	円形			
						7	66	56	26	楕円形			

岡田町遺跡C区

No.	図No.	平面形 柱配り	主軸方向	規 模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模 (cm)			柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見	時期	
						No.	長さ	幅・深さ					
2001	63	長方形 側柱式	N-20°-E	2間×2間 3.0×4.0	桁 1.9~2.0 梁 1.4~1.6	1	54	52	34	円形	柱痕	2005住に切られる	2~4
						2	48	42	22	円形	柱痕		
						3	52	48	28	円形	柱痕		
						4	44	42	14	円形	柱痕		
						5	56	42	18	楕円形	柱痕		
2002	63	長方形	N-23°-E	3間× 4.6×	桁 1.4~1.6 梁 2.0	1	48	42	40	方形	柱痕	2008上に切られる	不明
						2	64	52	44	楕円形	柱痕		
						3	56	52	46	円形	柱痕		
						4	52	40	38	楕円形	柱痕		
						5	48	44	40	円形	柱痕		
2003	64	方 形 側柱式	N-0°	2間×2間 3.8×3.6	桁 1.4~2.1 梁 1.5~1.8	1	88	78	36	方形	柱痕	不明	不明
						2	74	64	20	方形	柱痕		
						3	82	44	24	楕円形	柱痕		
						4	92	68	12	楕円形	柱痕2ヶ		
						5	76	56	32	楕円形	柱痕		
						6	82	52	24	楕円形	柱痕2ヶ		
						7	72	76	36	円形	柱痕2ヶ		
						8	76	74	32	円形	柱痕		
2004	64	長方形 側柱式	N-10°-E	3間×2間 4.0×3.2	桁 1.1~1.8 梁 1.5~1.8	1	44	42	20	円形		2016住・P2122に 切られる	2~3
						2	62	52	32	楕円形			
						3	46	40	18	円形			
						4	56	56	26	楕円形	柱痕2ヶ		
						5	68	52	10	楕円形			
						6	116	64	16	楕円形			
						7	58	50	20	円形			

岡田町遺跡D区

No.	図No.	平面形 柱配り	主軸方向	規 模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模 (cm)			柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見	時期	
						No.	長さ	幅・深さ					
3001	84		N-13.5°-E	3間× 6.4×	桁 1.6~3.0	1	62	60	22	円形	柱痕	区域外にかかると	
						2	72	68	28	楕円形	柱痕		
						3	84	72	32	楕円形			
						4	66	64	38	円形	柱痕		
						5	76	74	28	円形	柱痕		
3002	84	正方形 側柱式	N-17°-E	2間×2間 3.1×3.0	桁 1.3~1.7 梁 1.2~1.6	1	54	46	32	楕円形	柱痕	3013住を切る	5
						2	52	40	28	楕円形	柱痕		
						3	52	44	24	円形	柱痕		
						4	48	36	30	楕円形	柱痕		
						5	44	36	44	楕円形	柱痕		
						6	48	36	44	楕円形	柱痕		
						7	44	32	20	楕円形	柱痕		
						8	50	44	30	楕円形	柱痕		
3003	85	長方形 側柱式	N-15°-E	2間×2間 4.5×3.1	桁 2.1~2.2 梁 1.5~1.6	1	44	44	36	円形	柱痕	3~4	
						2	62	46	28	楕円形	柱痕		
						3	44	42	30	円形	柱痕		
						4	40	36	20	円形	柱痕		
						5	68	66	38	円形	柱痕		
						6	64	60	50	円形	柱痕		
						7	56	52	36	円形	柱痕		
						8	64	58	32	方形	柱痕		
3004	85	長方形 側柱式	N-26°-E	3間×2間 6.0×4.0	桁 1.8~2.0 梁 1.8~2.2	1	60	52	14	楕円形	柱痕	3001溝に切られる	6~7
						2	50	50	16	円形	柱痕		
						3	52	48	14	円形	柱痕		
						4	50	44	14	楕円形	柱痕		
						5	62	46	14	楕円形	柱痕		
						6	56	52	28	円形	柱痕		
						7	56	48	30	楕円形	柱痕		
						8	68	68	18	円形	柱痕		
						9	60	56	14	円形	柱痕		

No	区 No	平面形 柱配り	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模 (cm)			柱穴平面形	柱穴備考	建物址所見	時期	
						No	長径	短径					深さ
3005	86	正方形 側柱式	N-31'-E	3×2(2間) 4.4×4.1	桁 1.4~1.6 梁 0.9~2.1	1	64	54	26	楕円形	柱痕	付属施設があるか	6~7
						2	46	44	28	方形	柱痕		
						3	50	44	32	楕円形	柱痕		
						4	36	34	24	円形	柱痕		
						5	36	32	16	円形	柱痕		
						6	34	30	12	円形	柱痕		
						7	46	44	28	円形	柱痕		
						8	38	36	18	方形	柱痕		
						9	52	42	20	楕円形	柱痕		
						10	64	52	18	楕円形	柱痕		
						11	46	42	14	楕円形	柱痕		
3006	86	長方形 側柱式	N-26'-E	3間×3間 4.9×4.0	桁 1.6~1.7 梁 0.9~1.7	1	38	36	16	方形	柱痕	区域外にかかる	
						2	30	28	10	円形	柱痕		
						3	46	40	14	楕円形	柱痕		
						4	44	44	14	円形	柱痕		
						5	40	38	8	円形	柱痕		
						6	38	36	10	円形	柱痕		
						7	48	46	16	円形	柱痕		
						8	52	44	14	楕円形	柱痕		
						9	40	30	14	楕円形	柱痕		
						10	36	32	9	円形	柱痕		
3008	87	長方形 側柱式	N 22'-E	3×4(3間) 4.8×3.4	桁 0.9~1.6 梁 1.0~1.3	1	56	56	30	円形	柱痕	P3001に切られる 付属施設があるか	
						2	44	44	38	円形	柱痕		
						3	46	28	12	楕円形	柱痕		
						4	48	46	34	円形	柱痕		
						5	38	36	16	円形	柱痕		
						6	48	42	18	円形	柱痕		
						7	56	52	30	円形	柱痕		
						8	28	26	12	円形	柱痕		
						9	40	40	28	円形	柱痕		
						10	36	34	32	円形	柱痕		
						11	40	36	18	楕円形	柱痕		
						12	56	44	32	楕円形	柱痕		
						13	48	28	20	方形	柱痕		

第3節 遺物

1. 土器・陶器

(1) 縄文晩期末葉前後 (第91図)

A区の中央西端、中世の0001号竪穴状遺構の覆土中より約70点の縄文土器が出土している。いずれも小破片のためわずか15点を拓影で図示し得たのみだが、時期的にはすべて縄文時代晩期末～弥生時代中期初頭に帰属するものである。

これらは小數ながら2群の土器により構成される。第1群は甕類を組成の主体とし、細密条痕あるいはそれに類する条痕を体部に施す在地系の土器群、第2群は大粒の長石粒を含む特徴的な胎土を示し、外面に貝殻によると思われる条痕を施す東海系の土器群である。

第1群(1～13)は大半が甕類の頸部～体部破片と考えられる。内外面ともケズリを施した後後面肩部以下に条痕を施している。条痕の方向は斜位ないし縦位がほとんどだが、横位のものもみられる(1・2・10)。条痕原体は各条の幅・深さが一定せず擦痕状をなすものが多いが、櫛歯状の工具によったと思われるもの(12)や、条が太く沈線状をなすもの(8)が小數見られる。甕類以外の器形では壺(13)を1点図示し得た。体部の調整は甕類に準じている。11は器厚等からみて小形の甕類あるいは壺であろう。

第2群(15)は1点を図示し得た。壺の体部上半の破片で、羽状に貝殻条痕を施す。水神平式に比定されよう。14は本群に含まれるのか不明だが、内外面ともに横位に太い条痕を施す。

以上、遺物の概要を記したが、今回の調査では残念ながら当該期の遺構、包含層等の検出には至らなかった。おそらく近在に当時の生活面が残っており、竪穴の埋土はそこからもたらされたものと考えられる。これまで女鳥羽川流域では縄文晩期末の遺跡は女鳥羽川遺跡・柳田遺跡が知られるだけであり、より上流の岡田方面での実態は不明であった。今回断片的ながら遺物の出土をみ、遺跡の存在が明かとなった。石行遺跡等田川流域の遺跡も含めさらなる資料の集積と依然不明な該期の生活址の追求が今後の課題となろう。

(2) 弥生時代中期中葉 (第92図)

2点の弥生土器を図化提示できた。1は小形の壺型土器で、口縁部が短く徳利形を呈す。太い沈線で横帯の区画を作り、同一原体で大きな二重V字を描いて隙間にLR縄文を充填している。A区0114土出土。2はやはり壺形土器と見られる破片の拓影で、間隔のまばらな櫛歯状原体でコンパス紋と斜行条痕らしい文様を描いている。A区検出面出土。いずれも弥生中期中葉に位置付けられる土器であろう。

(3)古墳時代

古墳時代前期の土器は二反田遺跡1～5・7号住居址、岡田町遺跡0032・0042・1019・2014号住居址から、同中期のものは二反田遺跡包含層、岡田町遺跡0001号住居址から出土している。ただし中期のものは遺構の時期に伴わない、混入品である。以下、前期の土器を中心に述べる。

器種は、高杯・鉢・小型丸底鉢・小型丸底埴・小型器台・壺・二重口縁壺・直口縁壺・甕・台付甕などが見られる。高杯の杯部には、稜をもって二段に外反するもの(21・22・23)と、内湾気味に開くもの(5・20・36・49)の2種があり、前者は脚柱部をもつ二段成形の脚と、後者は外反気味に円錐状に開く脚(1)と組み合わせると推定される。49は杯部・脚部ともにかわった形をしており、当地域ではあまり類例を見ない。鉢は24・50の2点で、24は端部が二段に屈曲する。小型丸底鉢は3・11・16・25・51の5点で、口縁部の内湾が強いもの(3・16)、そうでないもの(11・25・51)に分けられる。小型丸底埴は10・26・27の3点のみ。小型器台は6・12・17・28・30・35・48の7点を図示したが、全形がわかるのは48の1点のみである。器受け部はいずれも稜をもって外反する形態のもので、底面に台部への貫通孔がある。台部の側面には3つの円孔が穿たれるが、ただ1点全形を知りうる48のみは器受け部の貫通孔も三孔も持たない。30の外面と器受け部内面には赤彩が施されている。壺類で全形がわかるものは少ないが、口縁部形態にかなり多様性がある。単純口縁(53)、折り返し口縁(2)、二重口縁のうちでも頸・口縁部の双方が長く大きく外反するもの(4・52)、口縁端部が短く外反するもの(37・40)、単純口縁が長く拡大する直口縁(13・55)などを指摘することができる。52の口縁部外面には縦長の棒状浮紋が3本並列に貼り付けられており、おそらく4単位で巡っていたと考えられる。14・34・54・56は壺の胴部と底部である。42はおそらく二重口縁の壺になろう。53の胴部上半には焼成後の穿孔がある。甕は8・9・18・32・33・39の中形品と小形品(15)がみられる。頸部が「く」の字にくびれ、外面をハケメやナデで調整されるのが一般的なようだ。33は器面調整は甕に相当するが頸部が細く、壺として扱ったほうが適切かもしれない。7・38・41は甕の底部と考える。二反田遺跡1号住居址からはS字甕の出土もみたが破損摩滅が激しく図示できなかった。

今回報告する古墳時代前期の土器の中で、岡田町遺跡第0032号住居址と第2014号住居址出土品は非常によくまとまった資料と言える。0032号住居址出土品では、杯部に稜を持つ高杯とそうでない高杯、器受け部の端部に稜を有する小型器台、鉢・小型丸底埴・小型丸底鉢の共伴が認められた。杯部に稜を持つ高杯と小型丸底埴の当地域での出現を探る良好な資料になろう。2014号住居址では、胴部下半の形態などからおそらく当地域の弥生時代後期からの系譜を引く壺(53・56?)、東海西部に起源を求める小型器台(48)、東海東部系の壺(52)、北陸系の可能性のある高杯(49)などが、古墳時代前期を特徴づける器種とともに出土しており、地域間の対比に有効かもしれない。

古墳時代中期の土器は、高杯の脚部(19・43)と壺の口縁部(44)が出土しているのみである。

(4) 奈良・平安時代以降の土器・陶器

①奈良・平安時代の土器の概観

ア. 提示の方法

二反田・岡田町遺跡では、竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑・ピット・溝などの遺構や、遺構外の包含層などから膨大な量の土器が出土している。

本報告書では、この膨大な量の土器の事実提示を実測図と文章により提示している。文章では、図中に示せなかった情報と各遺構の土器群の様相を中心に記述した。また、土器の器種・器形・編年観については文献1に従った。(註₁)

イ. 二反田・岡田町遺跡の土器様相

二反田・岡田町遺跡では、古代2期から古代8期まで、それぞれの時期の遺構から多量の土器が出土した。ここでは、各期の土器様相について概要を述べる。

2期：2期の土器は、9軒の住居址から出土している。出土量は、全体に少なく、安定した土器様相を示す遺構に恵まれない。該期では、1007住・3013住・3014住の各土器群が比較的まとまっている。出土した土器は、須恵器杯A・高盤・横瓶・土師器杯C・甕A・小形甕Bである。須恵器杯Aは、回転ヘラ切り未調整と回転ヘラ切り後底部を手持ちヘラ削りするものの2通りがある。

3期：この時期の遺構が少なく、良好な土器様相に恵まれない。食膳具はほとんど須恵器で占められ、杯A・杯Bがみられる。杯Aは、底部回転ヘラ切りと回転糸切りが共存している。

4期：当該期も資料に恵まれないが、3031住が比較的まとまっている。食膳具は、ほとんど須恵器で占められるが、黒色土器A杯Aがこの時期から出現している。須恵器杯Aは、ヘラ切り調整より回転糸切り調整のものが多くなる。

5期：遺構・遺物ともに飛躍的に増加している。食膳具は、須恵器が主体で黒色土器Aが少量入る組合せとなる。須恵器は杯Aが主体で、回転糸切り調整されるもののみとなる。杯Bは、法量分化が明瞭になる。須恵器鉢Aは、法量分化が明瞭で各種法量がみられる。煮炊具は、土師器甕B・小形甕Dの組合せを軸に甕C・小形甕Bがみられる。

6期：基本的な土器様相は、5期とほぼ変わらない。食膳具では、黒色土器Aの量が増加し須恵器とほぼ同じ割合になる。須恵器杯Aの器形は、体部がより開くものへと形態を変化させている。杯Bは、量が減少する。煮炊具は、土師器甕Bと小形甕Dの組合せが主体となり、甕Cが少量混入する。D区3005住が良好な資料である。

7期：食膳具に大きな変化が認められる。黒色土器Aに有台の碗・皿があらわれ、食膳具における黒色土器Aの割合が増加する。須恵器は減少傾向にあり、杯Aの器形は体部がさらに開き、器壁が薄くクロロ目が目立つものになる。また、軟質須恵器も微量みられる。灰釉陶器は、他地域に比べて非常に量が少ない。煮炊具は、引き続き土師器甕Bと小形甕Dの組合せが主体である。

8期：7期におきた食膳具の碗・皿への指向がさらに進む。土師器杯A・碗類が新たに出現し、

須恵器はほとんど見られない。基本的には、黒色土器A・土師器・少量の軟質須恵器・微量の灰釉陶器で構成される。煮炊具は、7期と同様に土師器甕B・小形甕Dが主体となる。

二反田・岡田町遺跡における一般的な土器様相の変化は以上の通りであるが、遺構のあり方により、土器様相にも大きな変化がみられる。2期を萌芽期として、5～8期の爆発的な遺構数の増加にともない遺物量も膨大な量が出土している。特に岡田町遺跡D区において検出されている5期の大型住居址と、それ以外の遺構で土器様相に多少違いがみられる。大型住居出土土器群には、一般的な土器の他に須恵器盤・碗・ミニチュア製品など特殊な器形がみられる。これは、岡田町遺跡の性格を考える上で、非常に重要な内容を含んでいるものと考えられる。以下、各遺跡の遺構出土土器群の概要を述べる。

②二反田遺跡出土の土器

本遺跡からは、住居址・溝址・包含層などから古代の遺物を得ている。これらのうち、50点を図化・提示している。土器群として捉えられるのは、第8号住居址出土品だけである。以下、土器群の様相を記述する。

ア. 住居址出土土器群

第8号住居址 (第96図)

12点を図示している。食膳具は、黒色土器A杯A (3・5)、椀 (1・2)、土師器杯A (6・7)、椀 (4)、灰釉陶器椀 (8・9)、緑釉陶器椀 (12) で構成される。黒色土器A杯Aは、内面の磨きが粗く雑である。灰釉陶器椀は、8が刷毛塗り施釉、9が漬け掛け施釉される。緑釉陶器椀は、全面施釉され体部へラ磨きされる。煮炊具は、土師器甕 (11)、貯蔵具は須恵器甕 (10) が出土している。8期の様相である。

イ. その他の遺構出土土器群

第1号溝址 (第96図)

須恵器杯A (13)、杯B (14) の2点を図示している。13は底部回転糸切り、14は回転へラ削りされるが、中心部に回転糸切り痕が残る。

第2号溝址 (第96図)

須恵器鉢A (17)、蓋 (15)、横瓶 (16)、甕 (18) の4点を図化している。

③岡田町遺跡A区出土の土器・陶器

ア. 住居址出土土器群

0001号住居址 (第97図)

出土量は少ない。須恵器杯B (33)、須恵器短頸壺蓋 (32)、土師器甕B (34) が出土している。他に混入品として土師器甕・土師器高杯がある。5期の様相である。

0002号住居址 (第97図)

本址も出土量が少ない。図化できたのは、35の土師器甕1点のみである。時期は、不明である。

0003号住居址 (第97図)

須恵器杯A (36)、須恵器鉢A (37) が出土したのみである。36は底部回転糸切り。時期は5～6期と考えられる。

0004号住居址 (第97図)

須恵器杯A (38)、須恵器杯B (40)、須恵器盤 (39) が出土している。38は底部回転糸切り調整である。39の盤は、盤部から口縁部までまっすぐに伸び、口縁部は上方へ折り返されている。調整は、盤部下方から底部まで回転ヘラ削り調整のあとロクロナデにより再調整されている。脚部は欠損しており不明である。本址土器群は、5期と考えられる。

0005号住居址 (第97図)

12点を図化している。食膳具は、須恵器が主体で須恵器杯A (41～46)、須恵器杯B (50) が出土している。杯Aは、すべて回転糸切り調整である。煮炊具は、土師器甕B (49)・小形甕D (47・48) である。48は、底部静止糸切り調整である。5期の様相である。

0006号住居址

出土遺物がなく、様相は不明である。

0007号住居址 (第97図)

食膳具は、須恵器杯A (55・56・57)・黒色土器A杯A (53・54) で構成される。須恵器杯は、体部の開きが大きく、ロクロ目が明瞭に残る。煮炊具は、土師器甕B (59・60)・小形甕D (58) が出土している。6期の様相である。

0008号住居址 (第98・99図)

出土量は多く、23点を図化している。食膳具は、黒色土器Aが主体となる。須恵器杯A (71～74)・黒色土器A杯A (62～69)・黒色土器A皿B (61・70) が出土している。須恵器杯Aは、体部が大きく開きロクロ目が明瞭に残る。63の黒色土器A杯Aは、体部が緩く内彎して深い。煮炊具は、土師器甕B (79～81)・小形甕D (75～78) がある。貯蔵具は、須恵器甕A (82～84) を図化している。7期の様相と考えられる。

0009号住居址 (第99図)

遺物量が少ない。須恵器杯A (88)・須恵器鉢A (87)・黒色土器A杯A (86) が出土している。88は底部回転ヘラ切り、86は回転糸切りである。4期と考えられる。

0010号住居址

遺物の出土がなく様相は不明である。

0011号住居址 (第99図)

食膳具は、須恵器杯A (99)・軟質須恵器杯A (98)・黒色土器A杯A (91～97)・黒色土器A碗 (90)・黒色土器A皿B (89) が出土している。煮炊具は、土師器甕B (101・102)・土師器小形甕D (100) がある。7期の様相である。

0012号住居址 (第100図)

多量の遺物がみられ、25点を図化・提示している。食膳具は、黒色土器Aが主体となる。杯A (104～119)・碗 (103)・鉢A (122～124)を図化している。杯Aは、口径12.2～15.4cmと17.2～17.4cmの大小2法量のみられる。煮炊具は、小形甕D (127・128)のみ。8期の様相である。

0013号住居址 (第100図)

出土量が極めて少ない。須恵器杯A (129) 1点のみ図示できた。底部回転糸切り調整で、体部には墨書がみられる。時期は、判然としないが6～7期と考えられる。

0014号住居址 (第100図)

出土量は少ない。須恵器壺 (130)・土師器甕 (131)を図化している。時期は判然としないが4期に比定される。

0015号住居址 (第101図)

遺物は非常に少ない。須恵器が食膳具の主体となる構成である。須恵器杯A (132～136)・土師器甕B (137)がある。須恵器杯Aは、すべて回転糸切り調整である。5期の様相である。

0016号住居址 (第101図)

食膳具は、須恵器のみ。杯A (138～140)は、すべて回転糸切り調整である。139の体部には、墨書が見られる。煮炊具は、土師器甕B (143・144)・小形甕D (141・142)がある。6期と考えられる。

0017号住居址 (第101図)

食膳具は、すべて黒色土器Aである。杯A (147～149)・碗 (144・145)がある。144は口径19.0cmを測る大形品である。150・151は、土師器円筒形土器である。いずれも内面に粘土輪積痕が明瞭に残る。150は内外面ナデ調整、151はさらに外面にハケ目調整を施している。特殊品として円面硯が出土している。8期の様相である。

0018号住居址 (第101・102図)

食膳具は、須恵器で占められる。杯B (159)・蓋 (154～158)・鉢A (160)・鉢C (161)が出土している。159の底部は回転ヘラ削り調整である。煮炊具は、土師器甕B (166・167)・小形甕B (165)・小形甕C (164)がある。5期の様相と考えられる。

0019号住居址 (第102図)

出土遺物が少ない。図示できたのは、須恵器甕A (173)・須恵器甕D (171)・土師器甕B (174)のみである。173は、突帯が断面三角形を呈し耳部の孔が途中でとまっている。時期は5～6期と考えられる。

0020号住居址 (第102図)

食膳具は、黒色土器Aで占められる。杯A (169)・碗 (168)を図化している。煮炊具は、土師器小形甕D (172)のみられる。貯蔵具は、須恵器短頸壺C (175)のみ。8期の様相である。

0021号住居址 (第103図)

食膳具は、軟質須恵器(177~179)・黒色土器A(176)と灰釉陶器(180)で構成される。177~179は軟質須恵器の杯A、176は黒色土器A杯Aである。180の耳皿は、ハケ塗りて内外面に施釉される。高台は、断面三カ月状を呈する。黒笹14号窯式に属すると考えられる。煮炊具は、土師器甕B(183・184・188)・小形甕D(187)である。貯蔵具は、須恵器甕D(189)が出土している。本址土器群の時期は、7期と考えられる。

0022号住居址 (第103図)

須恵器杯A(190・191)・須恵器杯B(192)・須恵器甕E(194)・土師器甕C(195)がある。杯Aは回転ヘラ切り、杯Bは回転糸切り痕が残り、時期的に違う様相が窺える。須恵器甕・土師器甕などと併せてみると、192は混入品と考えられる。本址土器群の時期は、3期と考えられる。

0023号住居址 (第104図)

食膳具は、須恵器が主体となり僅かに黒色土器Aがみられる。須恵器杯A(199~204)・須恵器杯B(205~208)・須恵器蓋(196~198)・黒色土器A杯A(209・210)で構成される。杯Aは回転糸切り調整、杯Bは回転ヘラ削り調整である。煮炊具は、211の小形甕Dのみ。5期の様相である。

0024号住居址 (第104図)

出土量は少なく、土師器甕A(212)が1点出土しているのみである。底部に木葉の圧痕がみられる。時期は不明である。

0025号住居址 (第104図)

食膳具は、須恵器杯A(215・216)・須恵器杯B(214)・黒色土器A杯A(218)で構成される。須恵器杯の底部には、すべて回転糸切り痕が残る。煮炊具は、小形甕D(217)のみ。6期の様相である。

0026号住居址 (第104図)

出土量は少ない。食膳具は、須恵器杯A(219・220)・須恵器杯B(221)・黒色土器A杯A(218)が出土している。底部は、すべて回転糸切りである。煮炊具は、土師器甕B(222)のみ。7期の様相である。

0027号住居址 (第105図)

総数14点を図化している。食膳具は、黒色土器A杯A(223~227)・土師器杯A(228~230)で構成される。黒色土器A杯Aは、口径17.6cmと13.2~15.0cmの大小2法量が観察される。煮炊具は甕B(235)・小形甕(231・232・234)を図化している。231は、内面黒色処理されている。8期の様相である。

0028号住居址 (第105図)

食膳具は、黒色土器Aにより構成される。杯A(238・239)・皿B(237)・椀(240)がみられ

る。杯Aは、口径13.3cmと16.0cmの2法量がみられる。240の椀は、高台部分が高く盤との判別が難しい。煮炊具は、土師器甕(241・242)がある。8期の様相である。

0029号住居址 (第106図)

出土量は少ない。食膳具は須恵器杯A(246)・黒色土器A杯A(243)のみ。243の体部には、墨書がみられる。煮炊具は土師器甕B(244・247)・土師器甕D(246)である。7期の様相である。

0030号住居址 (第106図)

出土量は非常に少ない。図示できたのは、須恵器杯A(245)・土師器小形甕D(248)のみ。245の杯Aは、体部の開きがやや大きい。248は、外面をカキ目調整されるが、摩滅が著しい。6期の様相である。

0031号住居址 (第106図)

食膳具は軟質須恵器・黒色土器Aがある。主体は黒色土器Aである。251・252・254は杯Aで、大小2法量に分けられる。249は皿B、250は椀である。煮炊具は、甕B(256~258)・小形甕D(255)がある。7期の様相である。

0033号住居址 (第107図)

食膳具は、須恵器で構成され、杯A(262~265)・杯B(260・261)がある。須恵器杯Aはすべて回転糸切り調整、杯Bは口径12.9~13.4cmと16.3cmの大小2法量観察される。259の杯蓋Bは、口縁部が屈曲している。食膳具以外では、須恵器鉢A(266)・土師器甕B(267)が出土している。5期の様相である。

0034号住居址 (第107図)

遺物は少ない。食膳具のみ出土している。須恵器杯A(269・271)・須恵器杯B(270)・須恵器杯蓋B(268)を図化している。270の底部中心部に回転糸切り痕が残る。272の甕は、底部に木葉の圧痕が観察されるもので、本址出土土器群には伴わないと考えられる。6期の様相と考えられる。

0035号住居址 (第107図)

食膳具は273・274の須恵器杯Aのみ。底部はヘラ切りのちナデ調整を施している。276は須恵器甕E、275は土師器甕Cである。275の口縁部は、くの字状に屈曲しており古い様相を示している。2期の様相である。

0039号住居址 (第107図)

食膳具は、黒色土器A杯A(278)・土師器杯A(277)・盤B(281)がみられる。281は、盤Bの脚部で、他の出土土器とは时期的に合わないため混入品と考えられる。煮炊具は、土師器甕B(282・283)・小形甕D(279)が出土している。8期の様相である。

0041号住居址 (第108図)

遺物は小片のみで、図示できたのは2点のみである。284は須恵器杯B、285は土師器甕Bである。遺物量が少ないため、土器様相は不明である。

イ. その他の遺構出土土器群

0063・0078号土坑 (第108図)

301の内耳鍋は、別々の土坑から出土した破片が接合した。口縁部に2周のナデ調整痕が明瞭に残る。中世のものである。

0114号土坑 (第108図)

299は、内耳鍋の口縁部破片である。他に、弥生土器小形壺が出土している。

0175号土坑 (第108図)

4点出土している。297は古瀬戸系陶器花瓶である。外面は丸のみ状の工具で縦方向の沈線が施され、鉄釉がかけられている。296は古瀬戸系陶器の天目茶碗である。口縁部は緩く「く」の字状に屈曲する。300は、内耳鍋である。体部に径5mm大の孔があげられている。

0176号土坑 (第108図)

7点図化している。黒色土器Aが主体である。椀は2点(289・293)出土している。289は、口径19.6cm・器高8.7cmを測る大形品である。口縁部には片口がつくられ、椀というより鉢Aに低い高台を付けた形態をとる。杯Aは、290～292の3点出土している。298は、土師器円筒形土器である。内面は、明瞭な輪積み痕が観察される。

④岡田町遺跡B区出土土器・陶器

ア. 住居址出土土器群

第1001号住居址 (第109図)

底部回転糸切りの須恵器杯(313)・須恵器長頸壺(314)・土師器甕B(317)・甕C(318・319)を図化している。食器は、須恵器で占められる。5期の様相である。

第1002号住居址 (第109図)

食膳具は、須恵器が減少して黒色土器Aが主体となる。319は軟質須恵器杯A、318は高台部が剥落した黒色土器A椀である。煮炊具は、甕B(321・322)がみられる。7期の様相である。

第1003号住居址 (第110図)

食膳具は、須恵器杯A(325・326)・黒色土器A杯A(323・324)がある。底部の調整は、324が削り状の調整がなされているが、他はすべて回転糸切り痕がみられる。煮炊具は、土師器甕(328)が出土している。6期の様相である。

第1004号住居址 (第110図)

食膳具は須恵器杯A(332)・黒色土器A杯A(329・332)を図化している。貯蔵具は、須恵器長頸壺(333)が1点のみ出土している。7期の様相である。

第1005号住居址 (第110図)

全体に出土量が少ない。食膳具では、須恵器杯Aを図化している。底部は、回転ヘラ削り調整である。煮炊具は壺B(336・338)、貯蔵具は須恵器壺が出土している。2期の様相である。

第1006号住居址 (第110・111図)

土師器、黒色土器Bが主体の土器群である。食膳具は、黒色土器A杯A(339・340)を図化している。339・340は口径12.5～13.1cmの小形品、341は口径17.5cmの大形品である。煮炊具は、壺B(344・345)・小形壺D(343)がみられる。342は、円筒形土器の口縁部である。輪積み成形、内・外面ナデ調整した後、体部外面に細かなハケ目を施している。8期の様相である。

第1007号住居址 (第111図)

食膳具は須恵器、煮炊具は土師器で占められる。食膳具は、須恵器杯A(349・350)・須恵器蓋(346)・須恵器盤(347)を図化している。杯Aは、底部回転ヘラ削り調整である。煮炊具は、土師器壺A(352)・壺C(351)・小形壺(348)である。2期の様相である。

第1008号住居址 (第111・112図)

数量は多く、17点を図化している。食膳具は須恵器杯A(360～362)・黒色土器A杯A(353～359)が出土している。貯蔵具は、須恵器短頸壺(365)・須恵器小形の短頸壺B(366)・須恵器甌(364)、煮沸具は土師器壺B(367～369)を図化している。366の短頸壺は、底部断面に粘土板を4～5枚貼り重ねて、器壁を厚く成形していることが観察できる。364の甌は、胎土からみて美濃須恵産の可能性がある。363は、土師器の高杯である。363・364ともに混入品と考えられる。6期と考えられる。

第1009号住居址 (第112図)

出土量が非常に少ない。黒色土器B碗(370)・土師器壺B(371)の2点しか図示できなかった。本址土器群の時期は、遺物量が少なく判然としないが8期と考えられる。

第1011号住居址 (第112図)

8点図化している。食膳具は、軟質須恵器杯A(377)・黒色土器A杯A(373)・黒色土器A皿B(372・375)・黒色土器A高盤(374)・土師器杯A(376)・灰釉陶器碗(378)と多種にわたる。374は、須恵器の高盤の模倣品と考えられる。器形は、浅く平らな体部から口縁部がまっすぐぐらき、口縁端部が上方に折り返されている。脚部は剝落しているため不明である。須恵器高盤を模倣したと考えられる黒色土器A盤は、岡田地区では宮の上遺跡第2号住居址からも1点出土している。煮炊具は、小形壺D(379)がある。

第1012号住居址 (第112図)

出土量は非常に少ない。須恵器杯A(382)・須恵器蓋(380)・黒色土器A杯A(375)を図化している。本址土器群の時期は、6～7期と考えられる。

第1013号住居址 (第112図)

食膳具は、須恵器杯A(386)・黒色土器A杯A(383～385)・灰釉陶器碗(387)・土師器盤A

(388) が出土している。387の灰釉陶器椀は、ハケ塗りによって施釉されている。388は盤Aの脚部である。4単位の透かしが穿たれており、内外面に煤が付着している。貯蔵具は、389の須恵器壺類(四耳壺か?)を図化している。口縁部約1/4の破片であるが、片方の割れ口には自然釉が付着しており、すでに焼成時には割れていたものと考えられる。7～8期の様相である。

第1014号住居址 (第114図)

黒色土器A椀(390)・土師器杯A(301・392)・土師器甕B(393)が出土している。393の胴部下端は、ケズリが施されている。時期決定が難しいが、8～9期の様相と考えられる。

第1015号住居址 (第113図)

遺物が極端に少なく、須恵器杯蓋(394)1点のみ出土している。時期は不明である。

第1016号住居址 (第113図)

食膳具は、須恵器が主体で、若干量の黒色土器Aがみられる。器種は、須恵器杯A(399・400)・須恵器杯B(397)・須恵器杯蓋(395)・須恵器高盤(398)・鉢A(401・404)・黒色土器A杯A(396)と多岐にわたる。鉢Aは、小形品(401)と大形品(404)の2法量みられる。398は盤の脚部である。透かしはみられない。煮炊具は、土師器甕B(403)・甕C(402)が出土している。6期の様相である。

第1017号住居址 (第113図)

出土量は非常に少ない。図示できたのは、須恵器杯A(405)・土師器甕B(406)、土師器甕C(407)の3点のみである。405の杯は、底部回転ヘラ切りのちナデ調整を施されている。時期決定は難しいが、須恵器杯Aの形態、調整方法などから3～4期と推定される。

第1018号住居址 (第113図)

須恵器杯A(411・422)・須恵器杯蓋(408)・黒色土器A杯A(409・410)の5点が出土している。黒色土器Aは、大小2法量みられる。7期の様相である。

第1021号住居址 (第114図)

食膳具は須恵器と土師器で構成され、量的には両者が拮抗している。須恵器杯A(414・415)・黒色土器A杯A(413)を図示している。須恵器杯Aは、器壁が薄く、大きく外傾する。煮炊具は、土師器甕C(416)が出土している。遺物が少なく時期が判然としないが、須恵器杯Aの形態などから6期と考えられる。

第1022号住居址

遺物量は少ない。図化、提示できるものはないが、須恵器甕B・横瓶が出土している。本址土器群の時期は不明である。

イ、その他の遺構出土土器群

第1001溝 (第114～118図)

溝の覆土からは、多量の土器が出土した。可能な限り図示した結果80点を提示している。器種は、

多量の須恵器、少量の土師器・黒色土器A、微量の灰釉陶器で構成される。器形では食膳具が最も多く、少量の貯蔵具と煮炊具が混じる。これらのうち古い様相を示すものとしては、須恵器杯Aの回転ヘラ切り・ヘラ削り調整のもの、杯Bの回転ヘラ切り調整のものなどがあげられる。これらの土器は、時期的に集落の萌芽期である2～3期より古段階のものと、集落がほぼ消滅する8～9期より新段階のものがほとんどみられないことなどから集落存続期間とほぼ一致する。おそらく、本遺跡に居住していた人々が廃棄したものと考えてよいだろう。

⑤岡田町遺跡C区出土土器・陶器

ア. 住居址出土土器群

第2001号住居址 (第118図)

黒色土器Aが主体の食膳具構成である。黒色土器Aは、杯A (516・517・519・520)・碗 (518)・皿B (515) で、すべて底部に回転糸切り痕が残る。519は、口縁端部が強く外反する。灰釉陶器碗 (521) は、刷毛塗りによって施釉される。体部は八の字状に開き、口縁端部が僅かに外反する。煮炊具は、小形甕D (522) が出土している。貯蔵具は出土していない。8期の様相である。

第2002号住居址 (第119図)

遺物量がきわめて少ない。図示できたのは528の須恵器杯A 1点のみである。底部は、回転ヘラ削りの後に、一部ナデ調整されている。2期の様相である。

第2003号住居址 (第119図)

食膳具は須恵器盤 (524) が1点のみ出土している。胎土は灰白色を呈し、美濃須衛窯産の可能性がある。腰部から底部にかけて削り調整が施される。526・527は、横瓶の口縁部である。煮炊具は、土師器甕B (523・525) が出土している。2～3期の様相と考えられる。

2004号住居址 (第119図)

食膳具は黒色土器Aと須恵器で構成される。黒色土器は、杯A (530・531) が出土している。530は、体部が八の字状に大きく開く。531は、体部がやや内彎しながら立ち上がる。須恵器杯Aは、口縁目が顕著に目立ち、体部が大きく開く。貯蔵具は、533の須恵器短頸壺がある。口径9.4cm・器高11.2cmを測る小形品である。煮炊具は、土師器小形甕D (534)・甕B (529) が出土している。7期の様相である。

2005号住居址 (第119図)

食膳具は、須恵器が主体で構成される。杯A (538～545) は、すべて底部に回転糸切り痕が残る。杯Bは、底部回転ヘラ削り。537は、須恵器盤である。脚部には沈線状の文様が施される。沈線は、2本を1つの単位として計5単位みられる。536は、黒色土器A杯Aである。口径17.8cm、器高5.5cmを測る大形品である。5期の様相である。

2006号住居址 (第120図)

食膳具は、黒色土器Aと須恵器で構成される。黒色土器Aは、杯A (547・548)・碗 (546) が

ある。すべて底部に回転糸切り痕がみられる。須恵器杯A (549・550) は、体部が八の字状に大きく開き、ロクロ目が明瞭に残る。貯蔵形態は、551の須恵器甕のみ。7期の様相である。

2007号住居址 (第120図)

出土量は少ない。食器は須恵器・黒色土器Aで構成される。須恵器は、杯A (553) ・すり鉢 (554) がある。黒色土器Aは、杯A (552) が出土している。貯蔵具は、須恵器甕のみ。5～6期と考えられる。

2008号住居址 (第120図)

遺物量はきわめて少ない。須恵器蓋 (557) 1点のみ出土している。口縁端部が、やや屈曲している。時期は不明である。

2010号住居址 (第120図)

遺物量は少ない。3点のみ図示している。558は須恵器杯Bである。底部は、回転ヘラ削りである。559は土師器甕C、560は甕Bである。4～5期と考えられる。

2011号住居址 (第120図)

3点のみ図示している。黒色土器A杯A (561) ・土師器杯A (562) ・土師器小形甕D (563) が出土している。8期の様相である。

2012号住居址 (第121図)

食器は、黒色土器Aで占められる。杯A (565・566) ・椀 (564) が出土している。564は、体部が八の字状に開き、口縁端部が僅かに外反する。煮炊具は、土師器甕B (567) のみ。7～8期と考えられる。

2013号住居址 (第121図)

食器は、須恵器で構成される。杯Aは、底部回転ヘラ削り痕が残るもの (571～575) が主体であるが、底部回転糸切り痕が残るもの (570) もみられる。杯B (569) は、回転ヘラ削り痕が残る。煮炊具は土師器小形甕D (576)、貯蔵具は須恵器短頸壺 (577) のみ。3期の様相である。

2015号住居址

出土遺物がないため、本址の土器様相は不明である。

2016号住居址 (第121図)

食器は、須恵器で構成される。杯Aは、底部に、底部回転ヘラ削り痕が残るもの (582) と回転糸切り痕が残るもの (581) がある。杯Bは、すべて回転ヘラ削り調整であるが、583の中心部には回転糸切り痕が僅かに観察できる。煮炊具は、土師器甕C (579) のみ。貯蔵具は、須恵器長頸壺 (584) ・須恵器甕E (585) が出土している。また、図化できないが黒色土器A杯Aが少量混入している。4期の様相である。

イ. その他の遺構出土土器群

2024号土坑 (第122図)

黒色土器・土師器が出土している。黒色土器Aは、杯A(590)のみ。土師器は、杯A(591・595)・盤A(597・598)・甕B(599)が出土している。597と598は、同一個体の可能性がある。598には、長楕円形の透かしが穿たれている。8期の様相である。

2038号土坑 (第122図)

594は、土師器杯C(甲斐型杯)である。内外面に磨き調整が施されているが、摩滅が著しい。596は土師器甕Aである。5期の様相と考えられる。

⑥岡田町遺跡D区出土土器・陶器

A. 住居址出土土器群

第3001号住居址 (第123図)

出土量は、きわめて少ない。図化できたのは、607の土師器甕Aのみである。輪積み成形した後、内外面ハケメ調整される。時期は、2～3期と考えられるが出土点数が少なく様相は判然としない。

第3002号住居址 (第123図)

須恵器蓋(608)、土師器甕C(609)の2点を図化している。出土量が少なく様相は不明である。

第3003号住居址 (第123図)

土師器甕Aが3点出土している。積み上げ痕が明瞭で、612は底裏に木葉の圧痕が残る。時期は出土量が少なく判然としないが、甕Aの出土から2～3期が想定できる。

第3004号住居址 (第123図)

須恵器・黒色土器Aから構成される食膳具が、8点図化できた。須恵器杯A(613・614)、杯B(616・617)、蓋(618・619)、壺類(620)、黒色土器A杯A(615)が出土している。612の須恵器杯Aは、底部ヘラ切り調整される古い様相をもつもので、本址土器群の時期には伴わないものである。本調査地の南西に中島古墳が位置しており、これとの関連が目される。本址の時期は、5～6期と考えられる。

第3005号住居址 (第123・124図)

本址からは多量な遺物が出土しており、42点を図化している。須恵器が主体となり、少量の黒色土器A・土師器が伴う良好な資料である。食膳具は、須恵器杯A、杯B、蓋、盤、黒色土器A杯A・蓋で構成される。須恵器杯A(630～638・662)は、すべて右回りの回転糸切りで切り離されている。法量は、口径12.4～13.8cm・器高3.5～4.1cmの幅の中に入り、比較的まとまっている。662は口径15.2cmを測り、体部がやや内彎している。器面にはクロロ目が明瞭に残り、他とは様相を異にする。杯Bは、4点(626・627・629・658)図化している。628は、体部の立ち上がり部に稜をもたず、腰部が内彎して立ち上がる。また口縁端部は、玉縁状を呈している。器形上の特徴では、一般的な杯Bとは様相を異にしている。盤は、641～643の3点出土している。いずれも脚部に長方形の透かしをもつ。643は、透かしの中に2条の線刻が施されている。黒色土器A杯Aは、内面に丁寧な磨きがなされている。624の黒色土器A蓋は、内面に縦方向、口縁端部は横方向に丁寧に

磨かれている。貯蔵具は、須恵器短頸壺、長頸壺、甕で構成される。短頸壺は、12点（645～651）出土しており、法量も口径4.1～13.8cmと多種みられる。煮炊具は、小形甕B（654）・D（653）、甕B（652）がある。その他、特殊なものとしては644の蓋状のものがみられる。ロクロ調整で成形されるが、外面上半部は縦方向に削られている。本址土器群は、典型的な5期の様相を呈しており、本遺跡の該期の代表的な資料である。

第3006号住居址（第124・125図）

15点を図化している。須恵器・黒色土器A・土師器で構成される。食膳具は、須恵器杯A（667・668）、蓋（663・664）、鉢A（671）、盤（669）、黒色土器A碗（665）、皿（666）が出土している。須恵器杯Aの667は、体部が直線的に開いて底径が小さい。668は、体部がやや内湾ぎみに立ち上がる。665の黒色土器碗は、体部が大きくハの字状に開き、口縁端部がやや外反する。煮炊具は土師器甕B（673）、小形甕D（675）、円筒形土器（676・677）、貯蔵具は須恵器鉢A（671）、甕類（670）を図化している。時期は7期に比定される。

第3007号住居址（第125・126図）

食膳具は、須恵器杯A（685～689）、杯B（683・684）、蓋（678～682）、盤（692～694）、黒色土器A杯A（690・691）で構成される。杯Aは、すべて回転糸切り痕が見られる。煮炊具は、土師器甕B（695）、甕C（697）、甕D（699）、小形甕B（696）、小形甕D（698）が出土している。6期の様相である。

第3008号住居址（第126図）

出土量は少なく、8点のみ図化できた。食膳具は、須恵器杯A（702）、杯B（701）、黒色土器A杯A（700）が出土している。702は、体部が直線的に開く。701は、底裏に回転糸切り痕が残る。煮炊具では、土師器甕（707）、甕（708）が出土している。708は口径32cmを測る大形の甕である。ロクロにより成形され、指ナデと板状工具ナデで仕上げてある。口縁内面は、カキ目状にナデられている。体部上半部には突帯が一周巡り、耳部が2ヶ所に付く。耳部中央には、径6mm大の貫通していない穴がある。貯蔵具は、須恵器長頸壺（703～705）が出土している。本址土器群の時期は、出土点数が少ないため判然としないが、6期に想定される。

第3009号住居址（第126図）

遺物が極めて少ない。図化できたのは、須恵器杯A（710）、杯B（709）の2点のみである。710は、回転糸切り、709は回転ヘラケズリが残る。時期は6～7期が想定できるが、資料数が少ないため明言はできない。

第3010号住居址（第126・127図）

13点を図示している。食膳具は、須恵器杯A（716～720）、杯B（713～714）、蓋（711・712）、鉢A（715）が出土している。713の底裏中心部には、回転糸切り痕が残る。煮炊具は、土師器甕B（722）、小形甕B（721）の2点がみられる。5期の様相と考えられる。

第3011号住居址 (第127図)

出土数が少ない。食膳具は、須恵器杯A (725)、黒色土器A杯A (723・724)、煮炊具は須恵器短頸壺 (726)、貯蔵具は土師器甕B (727・728) の6点を図示している。須恵器杯Aは、体部の開きが大きく、ロクロ目が明瞭に残る。須恵器杯の特徴から、7期の様相と考えられる。

第3012号住居址 (第127図)

須恵器杯B (729)、土師器甕B (730) の2点のみ図化している。資料数が少なく、時期は言及できない。

第3013号住居址 (第128図)

7点提示できた。須恵器杯A (730)、土師器杯D (731・732)、甕A (736)、B (737)、小形甕A (734)、B (735) と特殊品として提瓶形硯が出土している。733の須恵器杯は、口径8.5cmと量目が小さく、体部下半から底部にかけて回転ヘラ削りされる。土師器杯Dは、非ロクロ調整で口縁部にヨコナデが施される。煮炊具では、甕A (736)、B (735・737) が出土している。737は、長胴で底部に木葉の圧痕が残っている。本址土器群の時期は、2期に想定できる。

第3014号住居址 (第128図)

8点図化している。食膳具は、須恵器杯C (741)、土師器杯D (738~740)、鉢 (743) が出土している。741は、底部回転ヘラ切りで切り離される。738から740は、非ロクロ調整の丸底の杯である。体部外面から底部にかけて手持ちのヘラ削り調整される。内外面にヘラ磨き調整され、内面は黒色処理される。煮炊具は、土師器甕A (744・745)、小形甕A (742) が出土している。時期は、2期と考えられる。

第3015号住居址 (第129図)

食膳具は、須恵器杯A (750~752)、杯B (747・748)、蓋 (746)、黒色土器A杯A (749) で構成される。須恵器杯Aは底部回転糸切り、杯Bはヘラ削りされる。煮炊具は、土師器甕B (753)、甕C (754)。貯蔵具は、甕E (755) のみ。5期の様相である。

第3016号住居址 (第129図)

須恵器杯A (757~759)、蓋 (756)、土師器小型甕 (760) の5点図化している。杯は底部回転糸切り調整される。6期の様相と考えられる。

第3017号住居址

出土遺物がほとんどないため、様相は不明である。

第3019号住居址 (第129図)

須恵器杯B (763)、高杯 (764) の2点のみ出土している。様相は判然としない。

第3021号住居址 (第130図)

出土量が少なく、須恵器杯A (767)、黒色土器A (766) の2点のみ提示できた。767は、体部が直線的に開き、底径が小さくなった杯である。7期の様相と考えられる。

第3022号住居址 (第130図)

食膳具では、須恵器杯A (768)、黒色土器A杯A (768・773) がみられる。すべて、底部回転糸切り痕が残る。煮炊具は、土師器甕B (776)、小形甕 (775)、貯蔵具は須恵器甕 (771・772) が出土している。6期の様相を呈している。

第3023号住居址 (第130図)

須恵器蓋 (777)、土師器甕C (780)、小形甕D (779) の3点が出土している。出土遺物が少ないため、4～7期の範囲でしか捉えられない。

第3024号住居址 (第130図)

須恵器杯A (782・783)、蓋 (781)、土師器甕A (786・787) の5点を図化している。杯Aの底部は、ヘラ切りされた後に板状工具によりナゲ調整されている。786・787の甕の底部には、木葉の圧痕が残っている。2期の様相と考えられる。

第3025号住居址 (第131図)

出土量は少ない。須恵器杯A (789)、杯B (788)、土師器甕A (790) の3点が図化できた。2の杯Aは底部回転糸切り、杯Bは底部回転ヘラ削りである。3期の様相と考えられる。

第3026号住居址 (第131図)

土師器杯 (791) 1点が出土しているのみである。様相は不明である。

第3027号住居址 (第131図)

8点を図化している。食膳具は、須恵器杯A (794・795・797)、杯B (798)、杯C (796)、蓋 (793) がみられる。796は杯Bの高台がない形態で、底部切り離した後底部全面に回転ヘラ削りが施される。煮炊具は土師器甕B (800)、小形甕B (799)、貯蔵具は須恵器甕 (801) が出土している。5期の様相と考えられる。

第3028号住居址

土師器甕Cの小片が出土したのみで様相は不明。この小片の器面には、モミが付着している。

第3029号住居址 (第131図)

食膳具は須恵器杯A (803)、杯B (804)、蓋 (802)、黒色土器A杯A (805・806) が出土している。803は底部回転糸切り調整。804は底部周辺が回転ヘラ削り、中心部に回転糸切り痕が残る。貯蔵具では、横瓶 (807) が出土している。5期の様相と考えられる。

第3030号住居址

出土遺物が極めて少なく、様相は不明である。

第3031号住居址 (第132図)

出土量は少ない。須恵器杯A (808・809・810)、杯B (811)、黒色土器A杯A (812)、土師器甕C (813) の6点を図化している。須恵器杯Aは、809・812が回転糸切り痕、808は回転ヘラ削りのち不定方向の削りがみられる。杯Bは、底部回転ヘラ削り調整される。4期の様相である。

第3032号住居址 (第132図)

出土量が少なく、図示できたのは6点のみである。須恵器杯A(814)、杯B(815・816)、黒色土器A杯A(817・816)の食膳具がみられる。須恵器杯A・B共に回転糸切り痕が残る。黒色土器A杯Aは、大・小2法量みられる。6～7期の様相と考えられる。

第3033号住居址 (第132図)

出土量は、極端に少ない。図示できたのは、須恵器杯A(819)、土師器甕A(820)の2点のみ。812は、底部回転糸切り調整される。底部には、ヘラ記号がみられる。819・820ともに覆土中から出土しており、時期決定ができる遺物がないため様相は不明である。

イ. その他の遺構出土土器群

第3004号建物址 (第132図)

須恵器壺(821)が1点出土している。脚部に透かしが穿たれている。

第3004号土坑 (第132図)

黒色土器A杯A(823)、皿B(822)の2点が出土している。7～8期と推定される。

第3008号土坑 (第132図)

825は、須恵器器台の脚部と考えられる。図版では上・下逆に提示しているので、本年度報告「松本市塩辛遺跡」に再提示したい。器形は、脚部が下方へやや外反しながら開き、体部は内湾しながら立ち上がる。脚部には円形、体部には十字形の透かしが4単位(推定)穿たれている。成形は、脚部と体部を接合した痕跡が見られないため、一気に仕上げている。焼成はやや不良で、胎土は黄褐色を呈する。このような器台は、愛知県藤岡78号窯から出土している(註2)。

第3022号土坑

須恵器杯B、蓋の2点が出土している。杯は、底部中心部に回転糸切り痕が残る。時期は、6～7期と考えられる。

第3028号土坑 (第132図)

出土量が少ない。黒色土器A杯A(824)が1点出土している。

第3001溝 (第132～134図)

出土した遺物は、須恵器が主体である。食膳具は、須恵器杯A・Bが出土している。時期的に、差異が認められ、底部回転ヘラ切り・ヘラ削り・回転糸切りのものが混在する。貯蔵具は、須恵器長頸壺・短頸壺・横瓶・平瓶・甕A・甕C・甕Eなど多種類のものが出土している。863の甕の口縁部には、棒状に固まった自然釉が多量に付着している。全体の様相としては、集落存続期間の範疇に納まる土器群と考えられる。

註1：徳島県歴史文化財センター「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4」1990

註2：岐阜県教育委員会「老洞古窯址群発掘調査報告書」で橋岡彰一氏は、藤岡78号窯期を7世紀末に位置付けている。本遺跡出土の器台も、比較的古い様相を呈するものと考えられる。

2. 硯 (第135図)

合計4点出土している。1～3は円面硯で圓台をもつ。すべて破片状態で出土しており、全体の形状が判るものはない。2・3は第1001号溝 (B区) から出土、1は、第0017号住居址 (A区) から出土している。4は、提瓶形硯(註1)、あるいは把手付中空円面硯(註2)などと分類されているものである。以下、個別に記述する。

1は、圓台部の小片である。透かしは認められないが、圓台外面は沈線により方形に区画される。2は、硯面部の破片である。圓台部を欠く。外堤径は、10.4cmと小形である。外堤下縁に、一条の突帯を巡らしている。陸部には使用痕が明瞭に観察でき、僅かに墨痕が認められる。3は、圓台部の破片である。単位は不明であるが、瓢箪形の透かしが穿たれている。透かしの間は、縦方向の沈線で充填する。4は、提瓶形硯である。3013住床面から完形で出土した。硯部の直径は12.6cm、高さ5.8cmで杯状の硯台の上面を粘土板で遮断して硯面を作っている。硯面は、無堤式で凸形硯面である。僅かに擦痕が認められるが、墨の痕跡はみられない。硯部側面には把手がつけられ、その先端には杯状の受け部がある。この杯は、底部回転ヘラ削り調整で仕上げられた後に、把手部と接合している。さらに杯側面に円孔が穿たれ、硯部内面へ続いている。硯台部は、底部回転ヘラ切り調整の後不定方向にナデ調整される。提瓶形硯は、長野県内では丸子町長瀬瀬負沢や松本市塩辛遺跡 (松本市教育委員会：平成4年度報告) で出土しているにすぎない。しかし当該品のように、把手部に杯状の受け部が付く特異な形態をする提瓶形硯は、群馬県前橋市・群馬町上野国分僧寺・国分尼寺中間地域遺跡から類似例があるものの、量的には非常に少ない。この杯状の受け部は、墨汁あるいは墨を擦るための水を入れたとも推測されるが、詳細は不明である。

註1：1983年に山中敏史氏らを中心に奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターがまとめた「陶硯関係文獻目録」のなかで、分類されている。

註2：杉本宏氏の「飛鳥時代初期の陶硯—宇治半上り瓦窯跡出土陶硯を中心として—」[考古学雑誌]第72巻第2号による。

3. 瓦 (第138～142図)

今回の発掘調査では岡田町遺跡A～D区から合計29点が出土している。すべてが破片で、完形のものはない。このうち5点は瓦とは断定できないが、ここで取り上げた。種類別では軒丸瓦1、丸瓦4、平瓦19、不明瓦質製品5がある。軒平瓦は認められない。出土遺構ではB区の1001溝・D区の3001溝 (D区～B区～二反田遺跡に続く1つの溝) に21点があり、最も多い。その他は竪穴住居址と土坑からの出土である。竪穴住居址ではA区の0007住から3点、D区の3029住、3033住から1点がある。土坑ではB区の1038土とD区の3026土から各1点がある。遺構外ではB区の排土から1点が得られた。焼成についてはいずれも還元焰によるものであろう。色調は多様で、廃棄後に被熱

し、本来の色が変化してしまったものも含まれていると思われる。大別すると、①青灰色にちかいたもの11点 ②橙褐色にちかいたもの16点 ③青灰色・橙褐色が部分的に見られるもの2点となる。

軒丸瓦 1は瓦当面が約4割とそれに付属する丸瓦部が僅かに残存している。摩滅した瓦当面は、直径13.4cm、厚さ1.0～1.3cmを測る。瓦当面内区には単弁8葉蓮華文が飾られている。中房は圏線が付き直径3.4cm、高さ0.2～0.6cmを測る。断面形は凸形を呈する。圏線は幅0.3～0.5cm、高さ0.2cmで中房からは0.2～0.4cm程離れて全周する。中房内には中心に1個、第1周に5個の小さな連子が巡る。周環はもたず、直径は0.4～0.5cmを測る。高さは摩滅していることもあって僅か0.1cmと低い。断面形は凸形を呈している。中房から伸びる花卉は輪郭線で表現されている。弁端の中央にはハート型に大きな切り込みがあり、花卉の反転を表している。隣合う花卉はそれぞれ独立する。子葉は退化して短くなり円形、楕円形、ハート形のものとなり、それぞれの形、大きさは一定ではない。高さは0.2～0.3cmと低い。弁間には開弁はなく素文である。周縁は内区の様面より0.6cmほど高い高縁で、一重の直立縁と考えられ、階段状に段をもつ二重圏文が見られる。瓦当断面に接合痕は確認できなかった。丸瓦部分との接合は型取られた粘土板の上端から1.0cmほど下に直径約11cmの弧をもつ丸瓦部をあわせ、後に接合部に粘土を補っている。丸瓦部分の上面にはハケメ調整が施されていた。裏面は指ナデが行われている。他の遺跡との同范関係は、岡田町遺跡の南南西約1kmに位置する宮の前遺跡にのみ求める事ができる(文献1)。宮の前遺跡の軒丸瓦は第34号土坑から出土しているが、岡田町遺跡と同様に組み合わせられる軒平瓦は認められていない。文様のバランス等から明らかに同范関係にあるが両者を比較してみると、以下のような相違点が認められる。

①焼成 焼成良好な1は酸化還元炎による淡灰色を呈するが、宮の前のもは焼成不良で、淡茶褐色を呈し、還元炎によるものだろう。焼成時の取縮率は宮の前のもより1が大きかった。

②全体の大きさ 宮の前のもは直径13.4cmと0.3cm程小さいが、内区は1の7.4cmに比べ8.6cmを測り大きい。これは瓦当面全体に対する内区の比率の違いからくるものである。

③丸瓦部との接合位置 宮の前のもは瓦当面の先端、1はそれより1cm下に接合されている。

④頸の有無 宮の前のもは瓦当面の縁の裏側に頸がつくが、1には認められない。

⑤花卉の輪郭線 宮の前のもは、輪郭線が弁端に近づくにつれ、徐々に高く盛り上がり、重厚な感じがするが、1は全体にシャープではあるが、平面的である。

(これらの相違点が瓦を葺いた建物が異なる為に生じたのか、あるいは製作者や時期が異なる為のものなのか、今後の調査に期待したい。)

丸瓦 4点の破片があるが、図化し得たものは3点のみである。4はD区3001溝から出土した。全体の大きさが推定できる唯一のものである。長さは約29cm、幅は最小部で約14cm、最大部で約17cmを測る。厚さは1.9cm程である。上面には罫目のタタキ痕、下面には1cmあたり7×6本の布目痕が残る。色調は上下ともに淡黄灰色を呈し、白色の砂粒を多量に含む。7・8は小破片であるが、

推定される幅は7が13cm、8は17cmであった。焼成については4点すべてが酸化還元焰による須恵質のものであろう。

平瓦 19点が出土している。すべて破片のため全体の大きさを推定できるものはない。すべて須恵質のものである。このうち8点を図化した。5はB区1001溝からの出土である。厚さ2.2cmを測り、幅は約30cmである。下面には縄目のタタキ痕、上面には1cmあたり6×5本の布目痕が残る。表面の両端をへら状工具を用いて削り取り面を作り出している。焼成の際に大きく変れるように変形しており、原形をとどめていない。上面には別個体の瓦が溶着した跡があり、上下ともにひび割れ、剝離している。色調は上下ともに青灰色を呈し、白色の砂粒を多量に含む。13は5と同じくB区1001溝からの出土である。厚さは中央部で最も厚く2.4cm、端部に近づくにつれ薄くなり、端部では1.6cmとなる。幅は推定約30cmである。下面には縄目のタタキ痕、上面には1cmあたり6×6本の布目痕が残る。端部には乾燥の際に棒に立てかけてついた痕跡がある。色調は上面では淡黄褐色、下面は青灰色を呈し、胎土には白色の砂粒を多量に含む。6も13・5と同じくB区1001溝からの出土で、焼成の際に変形しており、幅はわからない。上面には窯壁が付着している。厚さは均一ではなく、中央部で最も薄く1.4cm、端部に近づくにつれ厚くなり、端部近くで2.2cmとなる。上面には1cmあたり6×5本の布目痕が残るが、上面と端部の間には稜（境）が無く、緩やかなカーブを描き、布目痕が端部の中央迄続いている。端部中央から下1cm程はへらで削られている。下面には縄目のタタキ痕がある。

不明瓦質製品 胎土・焼成等から瓦に属する可能性のあるもの5点をここで取り上げる。2・3は須恵質の板状の焼き物で、橙茶褐～暗橙茶褐色を呈する破片である。胎土には白色の砂粒を含んでいる。2は1辺の長さ10.9cm、厚さは1.7～2.0cmを測る。片面は平坦であるが、対する面には僅かな窪みがある。側面には傾きをもたない。調整は全体にナデが行われている。3は1辺が残存する破片で、長さは7.1cm、厚さは1.5cmを測る。2と同様に片面は平坦であるが、対する面には僅かな窪みがあり、調整は全体にナデが行われている。残存する側面には傾きをもつ。2・3は全形が長方形を呈するならば、鬘斗（堤）瓦の可能性も考えられるが、破片のため分らない。16は平瓦と同じ弧をもつ厚さ1.6cmを測る破片である。これが平瓦だとすると、普通は上面に布目痕が残るが、これとは逆に、下面の一部に帯状の布目痕が残り、上面は雑なナデがみられる。布目痕が残る部分の断面は凹凸があり、直径1～2mmの穴が7つ並んでいる。帯状の布目痕と穴が他の瓦と接合しやすくする為のものなら、この断面には軒平瓦が接合されていた可能性がある。17は淡紫灰色を呈する須恵質の破片で、胎土に白色砂粒と暗橙茶褐色砂粒を含んでいる。片面にはタタキ目が残る、もう片面は摩滅の為不明である。18は橙褐～淡紫灰色を呈する須恵質の破片で、胎土に白色砂粒と暗橙茶褐色砂粒を含んでいる。両面共ナデ調整が見られる。平瓦の可能性も考えられるが、他の平瓦に比して、弧が緩やかであり、須恵器の甕の破片ではなかろうか。

4. 土製品 (第143図)

土製品には、紡錘車と鞠の羽口がある。岡田町遺跡の住居址・溝からの出土である。

紡錘車 (1・2) 2点の破片がある。1はA区0022住出土で、断面は台形を呈する。寸法(推定)は最大径8.0cm、高さ4.8cm、孔径1.2cmである。円孔は斜めに穿孔され、中心からはずれている。調整はナデが行われている。2はD区3028住からの出土である。全体に丸みを帯び、上・下面と側面との稜線は明確ではない。断面形は台形に近い。推定される寸法は最大径8.2cm、高さ4.0cm、孔径1.3cmを測る。外面の調整は摩滅のため不明である。所属時期は伴出した土器より1は3期、2は2～4期と考えたい。

鞠の羽口 (3～11) 9点がある。いずれも破片で完形品はないが、7・9を除き溶滓が付着しており、先端側がわかった。9は断面が方形の角形羽口で、他の8点は円筒状である。円孔を見ると9は先端部が小さくなり、7は先端側なのか末端側なのか定かではないが、一方が広がっている様子が窺える。円孔の直径は大ききから2cm前後のもの(3・5・10)と、2.5cm前後のもの(4・6～9・11)の2つに分類できる。所属時期については、それぞれの住居址の時期より、3・4は6期、5・6は7～8期、10は2期と考えたい。

5. 金属製品 (第144・145図)

(1)銅製品

帯金具 (1) B区1014住から1点出土している。銅製の鉤尾で、2枚の長方形の銅板からなる。表金具には直径1mmほどの足金具があり裏金具へかかしている。先端部分は緩やかな方形を呈し裏金具の一部を欠く。反対側は表金具・裏金具とも欠損している。寸法は残存長4.1cm、幅3.0cm、最大厚0.4cmを測る。

煙管 (2) A区検出面で雁首が1点出土している。火皿は脂返しに補強帯をもたず緩やかな湾曲を示しつつながり、ラウ取り付け部の肩もすでに消滅している。内側にはラウが残る。時代的にはかなり下るものと推定する。

不明品 銅製品としては他にD区3031住から、最大9.1×3.9cmの2枚以上の銅板が一部で重なっているものが1点出土しているが、周囲の破損が著しく全形・器種は不明である。

(2)鉄製品

刀子 (3～13) 二反田遺跡で1点、岡田町遺跡ではA区3点、B区・C区で各1点、D区7点の合計13点が出土している。完形品は無いが、A区で残存度の良いものが2点出土しているのでこれらを中心に触れておく。3は刃部の先端と茎部の一部を欠損している。残存長10.7cm(刃部4.8cm、茎部5.9cm)、最大刃部幅1.2cm、同厚0.3cmを測り、明瞭な棟間を観察することができる。4も刃部と茎部の両端を破損しており、残存長11.7cm(刃部6.9cm、茎部4.8cm)、最大刃部幅1.6

cm、同厚0.3cmを測る。棟側は錆のため不明瞭であるが両関をもつものと推定する。茎部は木質がほぼ全体にわたり残存している。その他のものについては茎部が5点、刃部が2点、刃部から茎部にわたるものが4点出土しており、この内茎部に木質の残存が確認できるものが2点ある。地区別にはD区からの出土が多いが残存状況は総体に良くない。大きさでは大形のもの4点、中形が4点、小形5点に分類できる。

鎌(14) A区・D区で各1点ずつ出土している。14はほぼ完形。全長10.5cm、鎌身部長4.2cm、幅3.0cmで刃部は鑄造りで、身部関は逆刺。篋被部は断面長方形を呈し長い。もう1点は茎部のみで残存長2.8cm。紡錘車の軸の可能性もある。

楔(15・16) A区・B区で各1点ずつ出土している。15は短冊状をなし先端がやや丸みを帯びるが、16は先端が尖る。厚さは0.7cm・1.1cmと比較的厚い。

釘(18~20) A区・B区で各2点ずつ出土している。4点中3点が角釘で、内頭部が残存する2点は完形である。18は基部を単に曲げたものであるのに対し、19は基部を薄く叩き延ばして直線的に曲げて成形している。

火打ち金具(21) D区3006住より1点、ほぼ完形のものが出土している。全長7.8cm、基部幅3.3cmで、高い山形の基部の両裾を突出させわずかに立ち上がらせている。底部中央はほとんど凹まず、穿孔をもたない。

牽引鉄(22) D区3004建の検出面より1点得ている。1/2程度欠損しているため全長は不明であるが、刃部幅は1.3cm、棟の厚は0.3を測る。肩は丸みを帯び、刃は鋭さに欠ける。

不明品(17・23~27) 鉄製品の不明品は全部で8点ある。この内欠損が著しく機種が不明なものが3点、なにに使われたか不明なものが5点ある。A区0016住出土の24は片端部がわずかに折返されている状況が観察できる。B区排土出土の23は細長い板状の鉄板で両端を破損している。長軸上で残存の半分に凸状の盛上りが観察できる。D区3014住出土の26は塊状を呈し尖端側に1cm程度の切り込みがある。また、3003建出土の17は接点はないものの断面形状から同一個体と推定する。釘に類する建築材料の一種であろうか。

(3) 銭貨

銭貨は中世の土坑を中心にA区からのみ出土を見ている。銭類別に見ると「皇宋通宝」が4枚、「熙寧元宝」3枚、「元豊通宝」2枚、その他は各1枚ずつで合計15枚を得ている。すべて渡来銭で、時代別には唐銭・明銭が各1枚、宋銭13枚である。6枚・4枚とまとまって出土しているのは埋納銭と考えられるので、0078土・0144土は墓坑として差支えないだろう。また、0016住出土の「洪武通宝」は混入品であるとすれば、古代の遺構からの出土は皆無である。

6. 石器・石製品 (第146～149図)

①岡田町遺跡

(1)石器

本遺跡からは縄文時代と奈良・平安時代の定形的な石器が出土している。

縄文時代の石器は石鏃、石錐、ピエス・エスキュー、石匙、スクレイパー、打製石斧、凹石、石棒がある。このほか、黒曜石の原石・剥片・砕片が158点 (904.85g)、チャートの剥片・砕片が12点 (89.70g) 出土している。これらの中には、2次加工のある剥片・使用痕のある剥片が少量ではあるが含まれている。これらは縄文時代の遺構に伴うものではなく、すべて後世の遺構覆土や検出面からの出土である。しかし、A区では量的にまとまって出土していることから、調査区周辺には縄文時代の遺構が存在する可能性は高い。

奈良時代の石器としては砥石・つき臼・こもで石が住居址等の遺構から出土している。

報告にあたっては、遺物の形態をよく残すもの (完成品など)、特徴的なものを図化・掲載している。また、すべての石器について出土地点・寸法・石質・破損状況を一覧表に登載している。なお、石質の鑑定は太田守夫氏にご教示を受けている。遺物の説明は器種毎の概要・傾向と特殊な遺物を中心に記述している。文中の遺物を説明する数字は図番号である。

1) 石鏃 (1～5)

成品4点、未成品が2点出土している。2は凹基・有茎鏃で、晩期に属するものである。3は平基・無茎鏃としたが、基部からの剝離で上半部が破損していることから製作途中の破損品の可能性がある。石材は1点がチャート、その他は黒曜石である。

2) 石錐 (6)

錐部から徐々に幅が広がり、平面が三角形を呈するため、明瞭なつまみは認められない。錐部は両面加工により成形されている。石材は黒曜石である。

3) ピエス・エスキュー (7)

縦断面が紡錘形を呈し、片側辺には上端から下端に達する剝離面 (載断面) が認められる。石材は黒曜石である。

4) 石匙 (8・9)

8は黒曜石の縦長剥片を素材にした縦形の石匙で、刃部は両面加工の外湾刃である。9はチャートの縦長剥片を素材にした縦形の石匙で、刃部は両面加工の直刃である。

5) スクレイパー (10～14)

5点が出土している。すべて、黒曜石の縦長剥片を素材にし、剥片の末端に連続する剝離を施して刃部を形成している。刃部の剝離は10の両面加工以外は片面加工で、形状は直刃と内湾刃がある。

6) 打製石斧 (15～24)

21点が出土し、うち13点を図示している。石材は砂岩、硬砂岩、硬砂岩 (ホルンフェルス)、粘板

岩、粘板岩（ホルンフェルス）がある。平面形で分類すると撥形を呈するものが多く、短冊形は1点（16）、分銅形1点（26）が認められる。また、刃部の形状は円刃が多く、他は偏刃が1点（18）が認められるだけである。使用による磨耗痕が観察されるものは18・19・23、側縁部に着柄痕と考えられるつぶれが観察されるものに24がある。

7) 凹石（28）

平面が楕円形を呈する礫を素材にして、4つの面に合計7つの凹部が認められた。石材は砂岩である。

8) 石棒（29）

29は閃緑岩もしくは輝緑岩を素材とした、比較的小形の石棒である。下側は失われているが、先端部には球状の亀頭部を作り出している。表面は研磨されている。

9) 砥石（31～36）

9点が出土している。石材は凝灰岩4点（31～34）、砂岩3点（35、36）、安山岩1点、玢岩1点が利用されている。砥石の形態は、偏平な直方体を呈する31・32（小形）・35（大型）と内湾する砥面をもつため先細の直方体を呈する33・34・36、他に直方体を呈する1点がある。これらのうち35は大きさや重さから置き砥石と考えられるものである。

10) つき臼（37・38）

37は小形品で、凹部は使用により平滑な面を呈している。38は小形品で、上半部を破損している。石材は石英閃緑岩で、平面が楕円形（37）または円形（38）の自然礫を素材にしている。

11) こもで石

3001住の北西部から15個の自然礫がまとめて出土したので、編物用のこもで石として取り上げた。これらは長さ10～12cm、幅5cm前後、厚さ3cm前後の自然礫で、組掛けなどの加工は認められない。先端が破損しているものが4つほどあるが、これらは長さを揃えるために意図的に割った可能性も考えられる。石材は砂岩、玢岩、石英閃緑岩が使用されている。

(2) 石製品

30は縄文時代のメノウ製装身具（垂れ飾り）である。3004住のカマドから出土しているので混入品と考えられる。片側を破損しているが、長楕円形を呈していたと考えられる。規模は長(3.47)×幅(1.54)×厚(0.77)cmである。孔は楕円形を呈し、内面までよく研磨されているため穿孔方向は不明である。表裏面と片側面には沈線文が施されている。

40は石硯の破片である。第0093号土坑の覆土中から出土したものである。現在の石硯と同じ形態を呈する。残片のため規模は不明であるが、残存部で長(9.92)×幅(2.60)×厚(1.39)cmを測る。石材は黒色の粘板岩が使用されている。

②二反田遺跡

本遺跡からは、縄文時代と古墳時代の定形的な石器が出土している。

縄文時代の石器は打製石斧が2点ある。このほか、黒曜石の碎片が7点、チャートの碎片が1点出土している。

古墳時代の石器は砥石2点がある。なお、石質の鑑定は太田守夫先生にご教示を受けている。

1) 打製石斧 (1～2)

1は、3住より出土した完形のもので、石材は砂岩である。平面形は短冊形を呈し、刃部の形状は偏刃で、刃部は使用により磨耗している。

2は、C区排土で得られた完形品で、砂岩を素材としている。平面形は撥形を呈し、刃部の形状は円形である。

2) 砥石 (3～4)

3は、泥岩を素材とした砥石で、片側が失われている。形態は板状を呈する。砥面は2面ある。大きさ・形態より置き砥石と考えられる。

4は、D区の東トレンチより出土した。片側が失われ、泥岩を素材とする。形態は板状を呈し、砥面は5面ある。

第4表 瓦一覽表

No.	図 No.	種 別	地区	出土地点 No.	厚 さ (cm)	上面・下面の成形	糸本数 (g/100 ²)	備 考
1	1	軒丸瓦	B区	1001溝 No115	0.8	上、ハケメ 下、ナデ	---	ハケメは1単位の幅2.0cm?本
2		丸瓦	D区	3033住 フ	1.5	上、縄目 下、布目	6×4	
3	4	丸瓦	B区	3033住No64	1.9	上、縄目 下、布目	7×6	長さ約29cm、幅約14~17cm
4	7	丸瓦	B区	3033住No70	1.6	上、縄目 下、布目	6×6	小口布目痕 1枚作り、ヘラナデ
5	8	丸瓦	B区	3033住No65	1.8	上、縄目 下、布目	7×6	小口・端部ヘラ調整
6	9	平瓦	A区	0007住カマド No1, 2	1.6	上、布目 下、縄目	7×7	小口布目痕、ヘラナデ
7		平瓦	A区	0007住P ₁ フ	1.6	上、布目 下、縄目	7×6	No1,3と同一個体?
8	10	平瓦	A区	0007住P ₁ フ	1.6	上、布目 下、縄目	7×6	No1,2と同一個体?
9		平瓦	D区	3026土 No4	1.6	上、布目 下、縄目	6×6	小口布目痕、1枚作り
10	11	平瓦	B区	1001溝 No5	1.6	上、布目 下、縄目	6×5	小口布目痕、1枚作り、ヘラナデ
11		平瓦	B区	1001溝 No5	1.6	上、布目 下、縄目	6×5	No10と同一個体?
12	12	平瓦	B区	1001溝 No85	1.6	上、布目 下、縄目	6×6	端部ヘラ調整
13	5	平瓦	B区	1001溝 No109, 119	2.2	上、布目 下、縄目	6×5	焼成の際に変形、上層に炭塵混着
14		平瓦	B区	1001溝 No114	1.8	上、布目 下、縄目	8×6	焼成の際に変形
15		平瓦	B区	1001溝 No113	2.8	上、布目 下、縄目	7×7	端部ヘラ調整
16		平瓦	B区	1001溝 I層 (1)	1.6	上、布目 下、縄目	7×7	
17		平瓦	B区	1001溝 I層 (3)	1.9	不明	---	摩滅
18	6	平瓦	B区	1001溝 I層 (6)	2.1	上、布目 下、縄目	6×5	
19	13	平瓦	B区	1001溝 I層 (7)	2.4	上、布目 下、縄目	6×6	
20	14	平瓦	B区	1001溝 I層 (8)	2.0	上、布目 下、不明	7×5	下面摩滅
21		平瓦	D区	3001溝 東西部フ上	2.1	上、布目 下、縄目	6×6	焼成の際に変形
22	15	平瓦	D区	3001溝 トレンチ1	2.0	上、布目 下、縄目	6×6	小口布目痕 1枚造ヘラ
23		平瓦	D区	3001溝 北部東フ	1.6	上、布目 下、縄目	6×4	
24		平瓦	B区	排土	1.3	上、布目 下、縄目	6×4	
25	16	不明	D区	3029住 床	1.6	上下不明 布目・ナデ	10×8	平瓦?
26	2	不明	B区	1038土 フ	1.7	上、ナデ 下、ナデ	---	裂斗(縄)瓦?タイル状焼物
27	3	不明	B区	1001溝 I層 (2)	1.5	上下不明 ナデ	-	裂斗(縄)瓦?タイル状焼物
28	17	不明	B区	1001溝 I層 (4)	1.3	上、タタキ 下、ナデ	---	葉の破片?焼成・造土が瓦に似る
29	18	不明	B区	1001溝 I層 (5)	1.3	上下不明 ナデ	---	葉の破片?

第5表 二反田・岡田町遺跡・石器・石製品一覽表

岡田町遺跡

図 No	種 類	出 土 地 点	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)	石 質	破 損 状 況	備 考
1	1	石鏃	(2.04)	1.86	0.68	(2.10)	黒麻石	先端欠	凹基・無茎・未成品
2	2	#	1.94	1.47	0.43	0.65	#	#	凹基・有茎
3	3	0022住	(1.65)	2.00	(0.57)	(1.60)	#	完整	平基・無茎
4	4	1019住	5.05	3.66	1.38	13.35	#	先端欠	未成品
5	5	3005住 №37	(1.51)	(0.89)	(0.30)	(0.37)	先端・片割欠	#	凹基・無茎
6	6	3031住 P9	(2.45)	(1.50)	0.43	(1.30)	チャート	片割欠	凹基・無茎
7	7	石鏃	3.52	3.00	1.00	7.10	黒麻石	完整	上・下端割離
8	7	ビス・エスキュー	2.93	1.67	0.83	4.10	#	#	鏃部・外湾刃・両面加工
9	8	石鏃	4.17	1.72	0.80	4.00	#	#	鏃部・直刃・両面加工
10	9	3015住	5.21	2.53	1.01	12.00	チャート	下端欠	直刃・両面加工
11	10	スクレイパー	(4.04)	(0.69)	0.62	(3.10)	黒麻石	完整	内湾刃・片面加工
12	11	#	3.66	2.65	1.12	5.80	#	完整	内湾刃・片面加工
13	12	#	4.90	2.56	0.76	5.50	#	#	内湾刃・片面加工
14	13	2004土	2.78	2.23	0.83	3.35	#	#	直刃・片面加工
15	14	3001溝	4.43	2.25	0.51	6.30	#	#	#
16	15	0605住	(4.5)	(3.6)	(0.9)	(17.9)	砂岩	頭・刃部欠	#
17	15	#	(6.6)	4.3	(1.1)	(43.1)	#	上半欠	鏃部・円刃
18	16	0627住	(8.9)	3.9	2.1	(77.8)	硬砂岩	先端欠	短凹形・円刃
19	17	#	(11.6)	8.0	(4.0)	(37.0)	硬砂岩	頭部欠	鏃部・円刃
20	17	#	(6.3)	(5.0)	(1.3)	(50.6)	#	頭・刃部欠	#
21	18	#	10.4	6.1	1.9	160.9	硬砂岩(砂岩)	完整	鏃部・直刃・刃部磨耗
22	22	#	(8.4)	(4.9)	(2.4)	(104.0)	硬砂岩	下半欠	#
23	23	1019住	(1.6)	(6.5)	(1.6)	(82.1)	粘板岩	頭・刃部欠	#
24	24	1019住	(7.3)	(4.8)	(1.6)	(54.0)	硬砂岩	下半欠	鏃部
25	19	#	(8.0)	5.6	1.4	(83.2)	#	頭部欠	鏃部・円刃・刃部磨耗
26	20	#	(8.0)	6.2	1.9	(31.9)	#	頭部欠	鏃部・円刃
27	21	1007溝 P3	10.4	6.0	2.1	(171.9)	#	頭部欠	鏃部・円刃
28	22	3002溝 P1	(4.7)	(4.9)	(1.3)	(34.1)	#	頭部欠	鏃部・円刃
29	23	#	11.3	5.5	1.8	135.1	硬砂岩	頭部欠	鏃部・円刃・刃部磨耗
30	#	0114土	(6.6)	(5.6)	(1.2)	(31.5)	#	頭・刃部欠	円刃
31	31	1001溝	(6.2)	5.1	2.0	(86.5)	粘板岩	上半欠	鏃部・円刃
32	24	#	(9.4)	(5.3)	1.7	(97.1)	硬砂岩	刃部欠	鏃部・頭縁つぶれ
33	25	#	(8.0)	(4.9)	(1.3)	(51.5)	#	下半欠	鏃部
34	26	#	(8.5)	5.9	1.9	(117.6)	粘板岩(砂岩)	刃部欠	刃割形・円刃
35	27	A区 検出面	(11.3)	(6.2)	1.9	(161.6)	硬砂岩	刃部欠	鏃部
36	#	#	(6.5)	(7.0)	(1.3)	(56.3)	#	頭・頭部欠	#

No	区	種	山	土	地	点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	破損状況	備	考
37	28	凹石	#	11.6	6.9	4.7	455				4面に凹部7		
38	29	石塊	1001窪	(14.6)	(5.0)	(4.5)	(525)				突起		
39	30	波舟具	3004住カマドNo.1	(2.40)	(1.54)	(0.79)	(5.60)				下半穴		
40	31	磁石	0008住	(2.6)	(3.3)	(0.8)	(10.6)				凹穴	磁面4	
41	#	#	0027住	5.2	3.5	0.9	19.9				突起	磁面2	
42	32	#	0039住	7.1	5.8	1.7	112.1				#	磁面4	
43	33	#	2005住	6.8	2.8	2.4	39.5				#	磁面5	
44	34	#	3006住	(10.8)	4.7	(4.2)	(223.2)				上端・側面穴	(磁面5)	
45	35	#	3015住 No.13	(17.3)	(14.9)	(3.9)	(1859)				側面穴	磁面1	
46	36	#	3024住	(12.3)	(6.5)	(4.1)	(390)				側面穴	磁面6	
47	#	#	0001窓	10.4	5.5	4.3	590				突起	磁面6	
48	#	#	D区 検出箇	5.9	2.5	1.4	39.9				#	磁面6	
49	37	つぎ白	2006住 No.5	19.2	15.4	6.9	2649				#	突起	
50	#	#	3008住 No.8	(7.6)	(7.1)	(3.9)	(205.9)				突起?	深さ2.21cm・裏面に小凹部	
51	38	#	0080土 No.1	7.7	6.6	5.3	340				#	深さ1.01cm	
52	#	こもて石	3001住	10.4	5.7	3.1	208				突起	深さ1.25cm	
53	#	#	#	(9.4)	5.6	3.1	(289)				突起		
54	#	#	#	11.2	5.9	2.6	234				突起		
55	#	#	#	10.0	6.4	3.3	255				突起		
56	#	#	#	10.5	5.9	4.1	300				突起		
57	#	#	#	12.0	5.8	2.4	212				突起		
58	#	#	#	10.8	4.9	3.4	221				突起		
59	#	#	#	11.4	4.4	3.1	198				突起		
60	#	#	#	(11.2)	5.6	3.4	(282)				突起		
61	35	#	#	(8.7)	4.3	5.5	(266)				突起		
62	#	#	#	(10.2)	(4.8)	3.9	(253)				突起		
63	#	#	#	12.1	6.6	2.4	282				突起		
64	#	#	#	(11.1)	(5.0)	2.7	(227)				突起		
65	#	#	#	12.5	4.6	2.4	205				突起		
66	#	#	#	12.7	6.8	2.9	345				突起		
67	40	破	0093土	(9.8)	(2.6)	(1.4)	(53.6)				突起		

二反田遺跡

No	区	種	山	土	地	点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	破損状況	備	考
1	1	打製石片	3住 No.12	11.45	4.95	2.35	135.8				突起	知田形・偏刃・刃部磨耗	
2	2	#	脚土 C区	9.13	5.52	1.89	101.8				#	偏刃・偏刃	
3	3	磁石	3住 No.11	(12.33)	(12.86)	(1.82)	(415)				突起	磁面2	
4	4	#	東トレンチ層 D区	(5.33)	(3.43)	(0.68)	(21.00)				#	#	# 5

第6表 銭一覧表

No.	出土遺構	名称	初録年	径(mm)	重量(g)	備考
1	A0016住	洪武通宝	1368	21.8	3.74	完形
2	A0078住	天聖元宝	1023	22.1	2.75	完形
3	A0078住	至道元宝	995	24.3	2.85	完形
4	A0078住	天禧通宝	1017	24.2	2.88	完形
5	A0078住	皇宋通宝	1039	24.1	2.49	完形
6	A0078住	熙寧元宝	1068	24.1	2.69	完形
7	A0078住	開元通宝	621	24.1	2.90	完形
8	A0143土	熙寧元宝	1068	24.7	(1.83)	一部欠損
9	A0144土	皇宋通宝	1039	24.4	(一)	2片からなり一部欠損
10	A0144土	元豊通宝	1078	25.0	2.71	ほぼ完形
11	A0144土	熙寧元宝	1068	23.9	2.02	完形
12	A0144土	元豊通宝	1078	23.8	(1.56)	周縁欠損
13	A検出面	皇宋通宝	1039	25.0	2.98	完形
14	A検出面	元祐通宝	1086	24.4	3.60	完形
15	A検出面	皇宋通宝	1039	24.2	1.82	周縁欠損

第4章 調査のまとめ

岡田町遺跡における奈良・平安時代の集落について

これまでの事実記載をまとめながら、岡田町遺跡の奈良・平安時代の集落を考えてみたい。

1. 遺構分布の傾向

岡田町遺跡における全体的な遺構分布の傾向について、どのようなことが看取されるのかをみてみたい。

本遺跡における竪穴住居址と掘立柱建物址の分布状況をみた場合、全体的な傾向として両者がそれぞれまとまって分布することが窺える。また、各遺構はそれほど重複関係が激しくないが、拡散した状況もみせない。このように本遺跡では、それぞれが隣接して位置していることが特徴であろう。このことは建物の配置がほぼ定まっており、それがある程度踏襲されていた計画的な集落であることが考えられる。

ここで竪穴住居址・掘立柱建物址についての分布の傾向を、それぞれ細かくみてみたい。

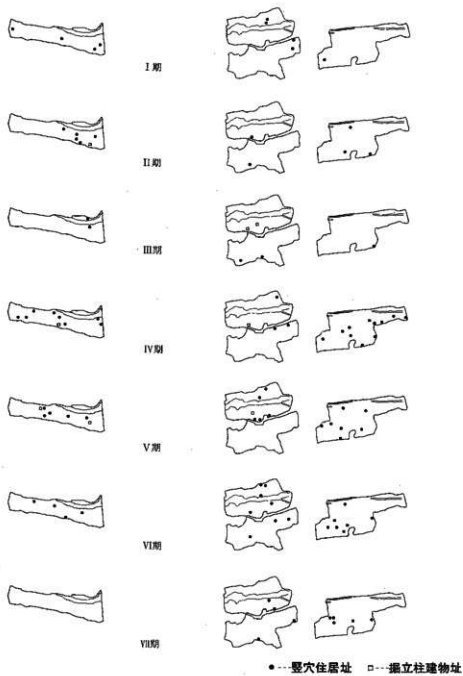
竪穴住居址は、各地区において検出されている。竪穴住居址の方向性は、岡田町遺跡を南流する溝の方向と密接な係わりがあると考えられる。たとえばD区では、溝が南西から南へ蛇行しているが、これに合せるように住居址の方向も規格している。B区では、溝と同様にほぼ南北方向に揃っている。A区では溝が検出されていないため不明瞭であるが、B・D区の方向とは異なり、北西～南東方向へ振れている。これは地形的な要因もあろうが、溝をある程度意識して建物を配置した結果によるものと考えられよう。また、竪穴住居址の規模・形状では、D区に大形の住居址が集中して中核をなしていたものと考えられる。

掘立柱建物址は、B・C・D区において検出されている。これらの分布のあり方をみると、次のような特徴があげられる。まず、建物址が全く建てられない空間がみられることがあげられる。これは、特にA区に顕著にみられる。また建物址のあり方には、次のような2種類の様相が看取できる。

A群・・・竪穴住居址に混在して、1～2棟みられるあり方。特にC・D区の建物址が、このような様相を呈する。(1001建・1002建・1010建・2001建～2005建・3001建～3006建)

B群・・・竪穴住居址が全くみられずに、建物址のみが建てられる空間が捉えられるありかた。これは、特にB区の北側に顕著にみられる。この区域には、奈良～平安時代の竪穴住居が存在せず、掘立柱建物址とピット群で構成される。このピット群は、単独のピットとして捉えられているものの、建物址として位置付けされていないものがかなり含まれていると考えられる。(1003建・1004建・1006建～1009建)

次に、これら各群の建物址の平面形を比較してみたい。A群は、2間×2間もしくは3間×3間



挿図10 岡田町遺跡における奈良・平安時代の集落変遷模式図

の側柱建物址で構成される。これに対してB群は、2間×2間の総柱建物(1003建)・庇が附属する2間×2間の側柱建物(1009建)・2間×3間の入側柱がある建物(1006建)など、特殊な形態をとるものが多い。

これらのことから、A群の建物址群は竪穴住居址と対応関係あるいは附属関係にあるものとして理解したい。B群は、竪穴住居址とセット関係にない建物址群として捉えられる。建物址と竪穴住居址の結合関係については、堤隆氏が9種類のモデルパターンから構成集団のあり方を想定している(註1)。これによると、竪穴住居址1軒と小規模な掘立柱建物址1~2棟から構成される「第一次結合」、「第二次結合」の複数の紐帯を示す「第二次結合」、「第二次結合」のさらに大きな共同体として位置付けられる「第三次結合」という結合モデルから集落構造を想定している。これらのことを、岡田町遺跡で考えてみたい。竪穴住居址との結合モデルを考えると、A群は「第一次結合」と「第二次結合」、またB群の建物址は「第三次結合」に想定されよう。堤氏は、このまとまりを「世帯」と言い換えて表現することも可能である」としている。このことから、A群が1世帯あるいは小規模な世帯共同体、B群は大規模な世帯共同体として把握できよう。B区北部の建物址群については、計画的に配置されて集落単位で共有される建物址群として捉えられよう。

2. 集落の変遷について

岡田町遺跡は、中央自動車道長野線の総論編の土器編年に従って時期決定を試みている。前章までの検討から、各遺構の時期的な様相を窺い知ることができた。これらの結果から、時期ごとの遺構群のあり方をみてみたい。

岡田町第Ⅰ期 (総論編2期・8世紀第Ⅰ四半期)

岡田町遺跡の奈良～平安時代の遺構群は、8世紀の第Ⅰ四半期から展開する。竪穴住居址9軒が抽出される。特に北側のD区では、1辺7m以上の大形住居(3013住)を中心に展開している。この時期以前には、古墳時代前期まで遡らないと集落はみられない。当該期の集落は、本遺跡の北西約300~400mに位置する塩辛遺跡が中心であるため関連が注目される。

岡田町第Ⅱ期 (総論編3期・8世紀第Ⅱ四半期)

岡田町遺跡第Ⅱ期は、埋文センター編年3期・8世紀第Ⅱ四半期に展開したものである。竪穴住居址はA~D区すべてにみられ、10軒を数える。大形住居はみられず、準大形と中形の住居址が主流となる。

岡田町第Ⅲ期 (総論編4期・8世紀第Ⅲ四半期)

総論編4期・8世紀第Ⅲ四半期に展開したものである。住居址数は4軒と減少し、散在的になる。建物址との結合関係では、岡田町Ⅰ~Ⅲ期にかけてはA群のみみられる。

岡田町第Ⅳ期 (総論編5期・8世紀第Ⅳ四半期~9世紀初頭)

総論編5期・8世紀第Ⅳ四半期~9世紀初頭にかけて展開する。この時期に、住居址は爆発的に増加している。A~D区すべてに分布し、計22軒を数える。再びD区に、核となる大形住居址がみ

られる。この現象は自然な人口増加というわけではなく、計画的に集落が形成された可能性が考えられる。このことは、竪穴住居地の方向性が画一化すること、B群の掘立柱建物址がB区にみられることなどから計画的な意図がはたらいた現象によるものであろう。

岡田町V・VI期（総論編6期～7期・9世紀第II四半期～第III四半期）

岡田町第IV期の様相を引き続き踏襲している。竪穴住居地は大形住居がみられなくなり、準大形～超小形のものだけになる。これらはほぼ同位置に立て替えており、掘立柱建物址との結合パターンは、A・B群の両方がみられる。

岡田町VII期（総論編8期・9世紀第IV四半期）

総論編8期・9世紀第IV四半期に展開する。住居址数は、9軒に減少している。分布の中心は、A・B・C区が中心となる。前代の住居地の位置と重複しているが、D区には全くみられない。8期と考えられる掘立柱建物址は、ほとんどみられない。住居地の規模も、小形住居が主流となる。当該期をもって、岡田町遺跡における集落の展開は断絶する。

3. 集落展開の背景について

さて、以上のように岡田町遺跡各時期の集落の構成をみてきたわけであるが、これらの結果をもとに本遺跡の集落の変遷について考えてみたい。

まず、8世紀第I四半期に集落が形成される。この時期は近隣の埴卒遺跡の方が拠点的な集落と考えられ、その展開が岡田町遺跡に及んだものと考えられる。III期まで住居址数が減少傾向にあるのは、集落の核にないため散在的になっていたのであろう。この様相はIV期になると一変し、飛躍的に住居址数が増加する。しかも画期となるI期とV期にのみ、D区に大形住居地が出現して集落が展開している。これらの大形住居地は、提瓶形硯の出土（3013住）や、礎石構造である（3004・3005・3010住）ことなどから、他の住居地とは様相を異にする。新たに集落が展開する場合、核となる大形住居地が必ず存在していることが窺えよう。これらのことから、本遺跡は意図的に配置された計画的な集落とも考えられる。この現象を、当該期における歴史的な背景と合わせて考えてみたい。

当遺跡が立地する岡田地区は、古代の官道である東山道が通っていたと推定されている地である。また、当初小県郡に置かれていた信濃国府は、おそらく延暦年間（790年代）に松本平に移転したと考えられている。この結果、本遺跡が立地する筑摩郡は、平安時代以降に信濃の交通・政治の中心となり、IV期の現象もこれらのことが背景に考えられる。

また、本遺跡の西～北西に位置する松本市田溝・山田古窯址群・豊科町上の山・葛蒲平古窯址などでは、郡内に供給される須恵器のほとんどが焼成されたと考えられている。本遺跡からは、焼成不良の瓦、窯壁や自然釉が多量に付着した甕・杯などが多量に出土しており、これらの古窯址群とも密接な係わりをもっていると考えられる。特に出土した瓦の中で、焼成不良品が多量に含まれていることは注目される。これは瓦葺き建造物の存在よりは、不良製品を廃棄した可能性が高いと考

えられる。また1001溝から出土した軒丸瓦は、宮の前遺跡出土軒丸瓦と同関係にあり、須恵器窯を背景にした同時期の集落址として関連が注目される。このような背景が考えられるIV～VI期は、住居址数はほぼ同程度に展開する。しかし、VII期には軒数が減り、以後は集落が断絶してしまう。VII期には、須恵器生産が衰退して杯の生産が停止する。これ以後の岡田地区の平安時代の集落は、岡田西裏遺跡・原畑遺跡・宮の上遺跡などの南東方向に拠点が移動する。また、これらの集落址には土師器焼成坑が顕著にみられ、須恵器生産に係わっていた工人集団が黒色土器・土師器生産に関わるようになったものと考えられる。本遺跡でも、VII期に比定される土師器焼成坑が、A・B区において2個検出されている。焼成坑の底面からは、まだ黒色処理されていない黒色土器A杯Aや皿Bが出土しており、黒色土器の製作技法を考える上で貴重な資料となろう。

以上のように、岡田町遺跡は岡田地区の奈良～平安時代の集落展開の一端を物語っている。今後、岡田西裏・原畑遺跡の整理作業が進めば、平安時代全般の展開が解明されるであろう。

註1： 奥 隆 1992 「信濃国佐久郡における奈良・平安時代の集落構造 - 土師器焼成坑における集落構造把握の試み -」
長野県考古学会誌 64

第7表 岡田町遺跡における奈良・平安時代の集落変遷表

規模 \ 時期	700			800			900
	I 期	II 期	III 期	IV 期	V 期	VI 期	VII 期
大 型 40㎡～ (1辺7m以上)	3013住			3005住・3010住			
準大型 25～40㎡ (1辺5.5m以上)	2003住	0009住・0022住 3025住	3031住	0001住・3004住	1012住・1016住	0026住・0029住 1009住・3032住	
中 型 15～25㎡ (1辺4.5m以上)	1000住・3024住 3008住	0014住・1017住 3014住・3017住 3018住	3023住	0004住・0005住 0015住・0018住 0023住・3015住 3020住・3029住	0010住・0025住 3007住・3009住 3022住	0008住・1013住 3004住・3006住	0017住・0028住
小 型 10～15㎡ (1辺3.5m以上)	0036住・1005住 2000住	2013住	2010住・2016住	0002住・0013住 0033住・1001住 2005住・2007住 3012住・3027住 3033住	0016住・0030住 1003住・1008住 3008住・3016住	0011住・0020住 0031住・1004住 2012住・3021住	0012住・0027住 0030住・1014住 2001住・2011住
超小型 ～10㎡ (1辺3.5m以下)	3001住	3019住		0019住	0034住・1021住	0021住・1002住 1018住・3011住	1011住

写 真 图 版



調査開始前



重機による試掘トレンチ



第1号住居址 遺物出土状況



第1号住居址



第2号住居址



第3号住居址 炭化材出土状況



第3号住居址 P。(貯蔵穴か)



第3号住居址

第1図版 二反田遺跡(1)



第4号住居址



第5号住居址



第7号住居址



第8号住居址



第8号住居址 カマド



第1号建物址



第1号溝址



第2(右)・3(左)号溝址土層断面

第2図版 二反田遺跡(2)



二反田遺跡A区 全景



二反田遺跡C区 全景



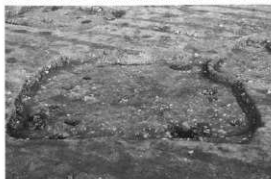
岡田町遺跡A区 調査開始前 (奥の山は伊深城山)



岡田町遺跡A区 調査開始前 (奥の山は芥子坊主山)



第0032号住居址 遺物出土状況



第0032号住居址



第0042号住居址



第0001号住居址

第3図版 二反田遺跡(3)・岡田町遺跡A区(1)



第0002号住居址 カマド



第0002号住居址



第0003号住居址



第0005号住居址



第0007号住居址



第0008号住居址 カマド



第0008号住居址

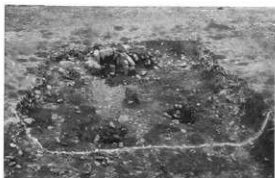


第0009号住居址

第4図版 岡田町遺跡A区(2)



第0012号住居址 遺物出土状況



第0012号住居址



第0017号住居址 (礎石2)



第0020号住居址 遺物出土状況



第0023号住居址



第0030号住居址



第0033号住居址



第0034号住居址



第0036号住居址



第0039号住居址



第0001号竖穴状遺構



第0002号竖穴状遺構 (石積み)



第0002号竖穴状遺構



第0176号土坑 遺物出土状況



第0078号土坑 遺物出土状況



第0149号土坑 遺物出土状況



第0175号土坑 遺物出土状況



第0135号土坑 遺物出土状況



第0001号土師器焼成坑 遺物出土状況



第0001号溝 T4埋没状況



第0001号溝址 T1埋没状況



第0001号溝址



桐原・倉科先生視察



本郷小学校6年生遺跡見学会



第1002(奥)・1003(手前)号住居址



第1002号建物址 P₂遺物出土状況



第1004号住居址



第1013号住居址



第1013号住居址 カマド



第1019号住居址



第1019号住居址 炭化材出土状況



第1008号住居址



第1008号住居址 カマド



第1008号住居址 遺物出土状況



第1003号建物址



第1005号建物址



第1007号建物址



第1008号建物址



第1009号建物址



第1001号溝址 (南から)

第9図版 岡田町遺跡B区(2)



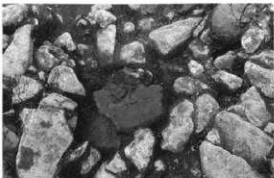
第1001号溝址(北から)



同 軒丸瓦出土状況



同 丸瓦出土状況



同 平瓦出土状況



同 遺物出土状況



同 遺物出土状況



同 土層断面



第1002号 焼土



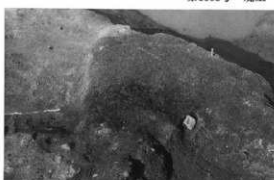
第1003号 焼土



第1005号 焼土



第1005号 焼土 (断面)



第1006号 焼土



第1006号 焼土 (断面)



調査区 全景 (北から)



調査区北部のビット群



作業風景



調査前の状況



作業風景



第2001号住居址



第2001号住居址 遺物出土状況



第2004号住居址



第2013号住居址



第2016号住居址



第2016号住居址 カマド



第2014号住居址 遺物出土状況



第2014号住居址 炭化材出土状況



第2014号住居址 炭化材出土状況



第2014号住居址 P₂遺物出土状況



第2001号建物址



第2002号建物址



C区全景(南から)



C区全景(北から)



重機による試掘



表土剥ぎ



検出



同



作業風景



同



現場水没



協力者一同

第14図版 岡田町遺跡D区(1)



第3001号住居址 遺物出土状況



第3003号住居址



第3004号住居址 遺物出土状況



第3006号住居址 遺物出土状況



第3006号住居址



第3008号住居址



第3010 (奥)・3011号住居址



第3011号住居址 カマド 遺物出土状況

第15図版 岡田町遺跡D区(2)



第3005号住居址 掘出土状況



同 カマド



第3005号住居址



同 北壁際礎石列



同 P₁礎石



同 P₂礎石



同 P₃礎石



同 P₄

第16図版 網田町遺跡D区(3)



第3013号住居址



同 提瓶形碗出土状況



同 カマド



第3020号住居址



第3021号住居址 カマド



第3028号住居址



第3031号住居址

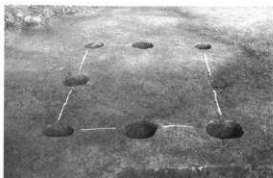


第3033号住居址 (内側)

第17図版 岡田町遺跡D区(4)



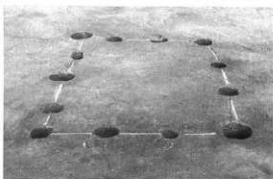
第3002号建物址



第3003号建物址



第3005号建物址 段据状況



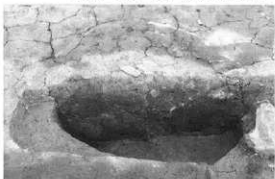
第3008号建物址



第3029・3030・3031（奥から）号土坑



第3001号溝址



第3001号焼土 半割状況



第3003号溝址



調査終了…北から (1)



同 (2)



同 (3)



同 (4)



同 (5)



同 (6)



同 (7)



同 (8)



4



12



22



25



26



33



34



48

第20図版 古墳時代の土器(1)



49



50



51



53



54



52



56



55

第21図版 古墳時代の土器(2)



32



70



74



98



99



118



127



128



236

第22図版 奈良・平安時代の土器・陶器(1)



130



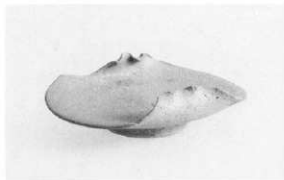
132



157



164



180



258



323



331

第23図版 奈良・平安時代の土器・陶器(2)



322



393



388



356



375



396



409



415



418



478



476



422



470



487



512



491

第25図版 奈良・平安時代の土器・陶器(4)



510



515



528



636



757



760



708



717

第26図版 奈良・平安時代の土器・陶器(5)



765



855



858



863



866



825



土師器焼成坑出土粘土塊



3028住 モミが付着した甕

第27図版 奈良・平安時代の土器・陶器(6)



1



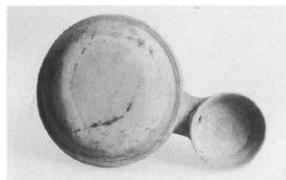
2



3



4



4 (上から)



4 (突手部)

第28図版 碗



1

参考資料



同 表面



同 横から

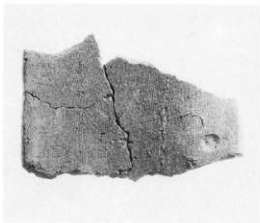


2

3



4



5



6

第29図版 瓦

土製品



靴の羽口

金属製品



1

2



21



3

5



22



4

7



11



6

10



15



16



18



19



14



縄文時代の石器(1)



縄文時代の石器(2)



二反田遺跡の石器



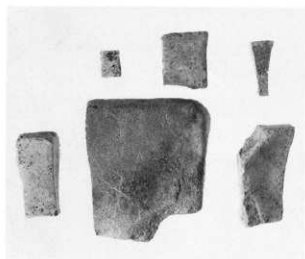
ミノウ製垂飾り



凹石

石棒

硯



砥石



つき臼

第31図版 石器・石製品

松本市文化財調査報告 No.99

松本市二反田・岡田町遺跡

平成5年3月22日 印刷

平成5年3月22日 発行

編集 松本市教育委員会
〒390 長野県松本市丸の内3-7
TEL.0263 (34) 3000

発行 松本市教育委員会

印刷 藤原印刷株式会社

